

平成 26 年度名古屋大学大学院文学研究科
学位（課程博士）申請論文

古代日本語における動詞接続の研究

名古屋大学大学院文学研究科
人文学専攻日本語学専門

阿部 裕

平成 26 年 12 月

凡例

一、本文中において、参考文献は氏(名)に続けて(西暦)の形で示す(阿部(2014)など)。文献の
題目、所収などは論文末の「参考文献」欄にまとめて示す。

一、用例の番号は章ごとに振り直す。

一、各資料の出典は論文末の「使用テキスト」欄にまとめて示す。

一、用例の採集には各種索引を用いた。本研究で用いた索引は論文末の「使用索引」欄に
まとめて示す。

一、注は脚注として同ページ下部に示す。番号は章ごとに振り直す。

一、記号 ϕ は、該当する形式が無いことを示す。

(本文一頁：40 字×30 行)

目次

凡例

目次

序論 本研究の位置づけ

1. はじめに	……1
2. 本研究で用いる用語について	……2
3. 接頭辞を前項とする動詞接続	……3
4. 接頭辞を前項とする動詞接続の研究史	……4
5. 古代語における複合動詞の存否の問題	……6
5.1 アクセントについて	……7
5.2 助詞の介入について	……9
5.3 その他の根拠	……12
5.4 複合動詞の存在を認める説	……14
6. まとめ	……14
7. 本論の内容	……16

第1章 上代日本語における動詞接続「トリー」の様相

1. はじめに	……19
2. 上代における「トル」	……19
3. 上代における「トリー」	……21
3.1 概要	……21
3.2 ①目的語を伴う「トリ＋他動詞」	……22
3.2.1 判定が難しい例	……22
3.2.2 二格補語を伴う「トリ＋他動詞」	……23
3.2.3 その他	……26
3.3 ②目的語を伴わない「トリ＋他動詞」	……27

3.3.1 トリ見る	……27
3.3.2 トリ持つ	……28
3.3.3 トリ装ふ	……30
3.4 ③目的語を伴う「トリ＋意志的自動詞」	……30
3.5 ④目的語を伴わない「トリ＋意志的自動詞」	……31
3.6 まとめ	……34
4. 「トリ」の接頭辞化	……35
4.1 「トリー」の再分析	……35
4.2 「トリ持つ」を契機とした接頭辞化	……36
4.3 希薄化した「トリ」の意味	……37
4.4 接頭辞化のプロセス	……38
5. おわりに	……40

第2章 中古日本語における動詞連接「トリー」の展開

1. はじめに	……41
2. 中古における「トル」	……41
3. 中古における「トリー」	……42
3.1 概要	……42
3.2 ①目的語を伴う「トリ＋他動詞」	……44
3.3 ②目的語を伴わない「トリ＋他動詞」	……46
3.4 ③目的語を伴う「トリ＋意志的自動詞」	……50
3.5 ④目的語を伴わない「トリ＋意志的自動詞」	……53
3.6 ⑤目的語を伴わない「トリ＋非意志的自動詞」	……53
3.7 まとめ	……55
4. テキストによる相違	……57
5. まとめ	……60
6. おわりに	……61

第3章 上代日本語における動詞連接「ウチー」の様相

1. はじめに	……63
---------	------

2. 「ウチー」に関する先行論	……64
3. 上代における「ウツ」	……66
4. 上代における「ウチー」	……67
4.1 概要	……67
4.2 I類の「ウチー」	……68
4.2.1 目的語を伴うもの	……68
4.2.2 目的語を伴わないもの	……70
4.3 II類の「ウチー」	……71
4.3.1 目的語を伴うもの	……71
4.3.2 目的語を伴わないもの	……72
4.3.3 移動動詞を後項とするもの	……73
4.4 III類の「ウチー」	……75
4.4.1 打撃を伴う動きを表す動詞を後項とするもの	……75
4.4.2 打撃を伴わない動きを表す動詞を後項とするもの	……76
4.5 まとめ	……77
5. 接頭辞化のプロセス	……78
5.1 「ウチー」の複合動詞化	……78
5.2 「ウチ」の接頭辞化	……79
6. おわりに	……82

第4章 中古日本語における動詞連接「ウチー」の展開

1. はじめに	……85
2. 中古における「ウツ」	……86
3. 中古における「ウチー」	……87
3.1 概要	……87
3.2 I類の「ウチー」	……90
3.2.1 目的語を伴うもの	……90
3.2.2 目的語を伴わないもの	……91
3.3 II類の「ウチー」	……92
3.3.1 移動動詞を後項とするもの	……93

3.3.2 移動動詞を後項としないもの95
3.4 皿類の「ウチー」96
3.4.1 自然現象を表すもの96
3.4.2 自然現象ではないもの97
3.5 まとめ99
4. 「ウチー」の発展の過程100
4.1 時期区分100
4.2 中古前期100
4.3 中古後期101
4.4 まとめ103
5. テキストによる相違103
6. おわりに104

結論 本研究のまとめと課題

1. はじめに107
2. 古代語における「トリー」の様相107
2.1 上代における「トリー」107
2.2 中古における「トリー」109
3. 古代語における「ウチー」の様相110
3.1 上代における「ウチー」110
3.2 中古における「ウチー」112
4. 古代語における複合動詞の存否113
5. 「トリー」と「ウチー」の差異115
5.1 非意志的自動詞への前接115
5.2 意味の希薄化の程度116
5.3 中古における異なり語数・延べ語数の増加118
5.4 意味の特殊化119
5.5 まとめ119
5.6 現代語への残存119
6. 今後の課題121

使用テキスト123
使用索引124
参考文献125
初出一覧129
〈資料〉古代語の「トリー」「ウチー」リスト131

序論 本研究の位置づけ

1. はじめに

現代日本語では「洗い流す」「取り決める」「食べ続ける」「突き止める」といった〈動詞連用形＋動詞〉が多く使用される。〈動詞連用形＋動詞〉は一般に「複合動詞」と呼ばれ、多くの研究が蓄積されてきたが、現在も日本語の複合動詞の全容が解明されているとはいえない。中でも未解明の部分が多く残されているのが、複合動詞の歴史的な変遷である。

近年、日本語複合動詞の研究は盛り上がりを見せており、2013年にはその集大成ともいえるべき影山太郎編(2013)『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』(ひつじ書房)が上梓された。同書の「はじめに」において編者の影山氏が次のように述べているように、日本語における複合動詞の発達には世界の諸言語に照らしても独特なものである。

(1) 世界の諸言語で、動詞＋動詞型の複合動詞を持つ言語はどれくらいあるのだろうか。

これまでの研究では、このタイプの複合動詞は古代サンスクリット語を始めインドヨーロッパ諸言語にほとんど観察されず、日本語、朝鮮語、チュルク諸語、中国語、インドを含む南アジアの諸言語に共通して見られることが指摘されている。(略)

そして、東アジア地域の中でも、日本語の複合動詞は数と種類において他の言語を凌駕しているように見える。(略)なぜ、東アジア諸言語の中でも、日本語の複合動詞はこれほどの多様性を持つのだろうか——これが、大きな謎である。(影山編 2013: iii・v)

複合動詞の多様性が日本語の特質の一つであるとすれば、その歴史的な発達の過程を記述することは日本語史の構築において重要である。しかし、複合動詞の歴史に関しては、それがいつ頃から存在するのかといった基本的な問題さえも定説を見ておらず、検討すべき課題は山積している。

本研究が対象とするのは、前項が接頭辞であるとされる複合動詞の歴史的な変遷である。現代語においては「トリ決める」「ウチ明ける」「カキ口説く」などがこれに該当し、頻繁に使用されるが、同様の形態は古くは上代文献から出現しており、文献資料出現後の日本語には連綿と見られるものである。したがって、前項が接頭辞である複合動詞の歴史的な

検討は、後述する古代語¹における複合動詞の存否の問題にも直結する。このタイプの複合動詞の変遷について考察することは、複合動詞の歴史的展開の解明において大きな意味を持つといえる。

2. 本研究で用いる用語について

〈動詞連用形＋動詞〉を指す術語としては「複合動詞」が一般的であるが、本研究では〈動詞連用形＋動詞〉形態の名称として「動詞連接」を用いる。「複合動詞」は合成語の一種であり、前項と後項が一体化している〈動詞連用形＋動詞〉にしか用いることができない。後述するように、古代語の〈動詞連用形＋動詞〉は前項と後項が一体化していなかったとする説があり、これに従えば現代語と同じレベルでの「複合動詞」は古代語には存在しなかったということになる。この説には再検討の余地があるが、〈動詞連用形＋動詞〉という形でありながら「複合動詞」と呼べないものが古代語に存在していたことは確実であると考えられる。古代語の〈動詞連用形＋動詞〉が現代語と異なっていた可能性がある以上、歴史的な研究において〈動詞連用形＋動詞〉の名称として「複合動詞」を用いることは適切ではない。以下、本研究では〈動詞連用形＋動詞〉形態そのものの名称として「動詞連接」を用い、動詞連接のうち前項と後項が一体化していると認められるものに限って「複合動詞」と呼ぶこととする²。

本研究で主に注目するのは、本来の動詞としての機能を失い、後項動詞に従属している動詞連接前項である。かような前項は、先行論では「接頭辞」とされる場合と「接頭語」とされる場合があるが、本研究では引用などの場合を除き「接頭辞」で統一する。「接頭辞」と「接頭語」の違いが重視されるのは、前項の形態論的位置づけを問題にする場合である。本研究では、前項が本来の動詞としての機能を失っているかどうかには注目するが、かような前項を動詞の用法の一つと見るのか、それとも完全に脱範疇化して接辞となっているのかについては検討しない。

なお、「接辞＋語基」「語基＋接辞」という構造の合成語は一般的には「派生語」とされ、前項が接頭辞である動詞連接についてもそのように扱われることがある(村木 1991 など)。

¹ 本研究では、上代から中古を「古代」とする。「上代」は奈良時代およびそれ以前、「中古」は平安時代の始めから院政開始までの時期を指す。

² 百留(2001b,2003ab)は、〈動詞連用形＋動詞〉のうち「語になり切っていないと考えられるもの」(百留 2003b,注(1))を「動詞連接」と称している。本研究とは「動詞連接」の定義が異なる。

前項を「接頭辞」と呼ぶならば、「派生動詞」という用語を用いる方が本来的であろう。しかし、本研究で注目するのは前項と後項が一体化した動詞接続が古代語に存在したのかという問題であり、かような動詞接続を「複合動詞」と呼んでも「派生動詞」と呼んでも論に影響はない。先行論においては、前項あるいは後項が接辞的であるものも「複合動詞」に含められるのが一般的である。本研究においても、〈動詞連用形＋動詞〉という形態で前項と後項が一体化していると認められるものは、全て(広義の)「複合動詞」とする。

3. 接頭辞を前項とする動詞接続

現代語の動詞接続はほとんどが複合動詞であると考えられるが、複合動詞の内容は多様である。先行論においては、語彙的な複合か統語的な複合か(影山 1993、2013)、各構成要素が自立的か付属的か(寺村 1969、斎藤 1984)のほか、格支配の在り方(山本 1984)、構成要素間の意味的關係(長嶋 1976、関 1977、森田 1978、石井 2007)など、様々な観点からの整理が行われてきた。今日、最も広く受け入れられているのは影山(1993)による「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の区別であるが、青木(2012)が「複合動詞の「語彙的」と「統語的」の区別が、通時的(さらには通言語的)にすべて有効にはたらくとは限らない」「統語的複合動詞」は、テストを用いて「*」をつけることが可能な、内省の利く言語の共時態においては有効な記述の枠組みであるが、歴史変化の説明においては必ずしも有用とはいえない」(いずれも p.207)と指摘するように、動詞接続の歴史的変遷を追う上では適用に困難がある。筆者の考えと類似し、かつ通時的研究にも利用可能な複合動詞分類の枠組みとして、ここでは石井(2007)を挙げておく。

(2) 石井(2007)による複合動詞分類

複合構造

前項と後項とがいずれも明確な語彙的意味をもって結びついているもので、形態・意味の両面において「複合語」と呼べるもの (p.108)

例：洗い流す、折り曲げる、受け止める、すすり泣く、思い悩む、生まれ育つ

派生構造

構成要素の一方の意味が形式化(接辞化)し、もう一方の要素に接辞のように従属しているもので、意味的には「派生語」と言えるもの (p.113)

例：打ち消す、立ち去る、鍛え上げる、踊り狂う、苦しみ出す、食べ過ぎる

熟合構造

構成要素の意味が明確に取り出せない、いいかえれば、複合動詞の意味を構成要素に分担させることができないもの (p.117)

例：当て付ける、立て替える、突き止める、遣り込める、開き直る、有り触れる

(2)の各構造は、構成要素の「アスペクトおよびヴォイスにかかわる範疇的な意味」(p.107)からさらに細分化される。分類の詳細については石井(2007)を参照されたい。

本研究が対象とする前項が接頭辞である動詞連接は、「派生構造」に含まれる。石井(2007)は「派生構造」を「語彙的派生構造」と「文法的派生構造」に分け、さらに「語彙的派生構造」を前項と後項のいずれが接辞化するかによって「語彙接頭辞構造」と「語彙接尾辞構造」に細分化している。前項が接頭辞である複合動詞は「語彙接頭辞構造」に該当する。

このように「派生構造」の複合動詞には前項が接頭辞化するものと後項が接尾辞化するものが認められるのだが、阪倉(1983)が(3)と述べるように、今日においても接尾辞を後項とする動詞連接の研究に比べて接頭辞を前項とする動詞連接の研究は進んでいない。

- (3) 語構成要素のうち、いわゆる「接尾語」については、さまざまの種類があつて、意義及び文法の問題(たとえば派生語の品詞の問題、助動詞あるいは副助詞・連体助詞との関係など)に関わることも多様なために、これまで種々論議されることが少なかった。それに比して「接頭語」の方は、種類も少く、専ら意義にのみ関するものとして、一通りの扱いで済まされて来たところが多い。(阪倉 1983:1)

しかし、先にも述べたように接頭辞を前項とする動詞連接は上代から現代まで連綿と存在すると考えられるため、その歴史的変遷の記述は動詞連接史を構築する上で欠かすことができない重要な課題である。

4. 接頭辞を前項とする動詞連接の研究史

接頭辞を前項とする動詞連接がいつ頃から存在したのかを明示した研究は存在しないが、和歌解釈や辞書といった分野では、接頭辞を前項とする動詞連接が上代から存在していたことが認められている。例えば次の「ウチ霧らし」について、伊藤(1996b)は「空を一面にかき曇らせて。「うち」は接頭語」(p.464)と注釈している。

(4) ウチ霧らし(打霧之)雪は降りつつしかすがに我家の苑に鶯鳴くも³

(万葉集・巻 8・1441・大伴家持)

また『時代別国語大辞典 上代編』(三省堂)は、「うち」を立項して「接頭語。複合動詞前項としての打ツの連用形が固定したもの」と説明するほか、動詞「とる」の項では「接頭語的に用いられることもある」と注記している。このように、前項が接頭辞である動詞連接が上代から存在したという考えは、一部では既に定着している。

関(1993)は、古代語において「その前項の「動詞連用形」の動作の意味が希薄化し、形式化したと見なされている」(p.188)ものとして次の 8 種類を挙げる⁴。

(5) うち・おし・ひき・とり・かき・もて・さし・たち

注目されるのは、石井(2007)が挙げる現代語の「語彙接頭辞構造」の複合動詞に、「もて」を除いた全てが含まれている点である。石井(2007)は「語彙接頭辞構造」の例として次の前項を挙げる(pp.113-114)。

(6) 打ち(消す)、押し(隠す)、掻き(集める)、差し(押さえる)、突き(返す)、たたき(起こす)、
取り(決める)、引き(比べる)、ぶち(壊す)、踏ん(づかまえる)、立ち(至る、去る)

このうち、「ぶち」は「うち」の俗語形とされるため(佐藤 1986)、それを除けば現代語の「語彙接頭辞構造」の前項は 10 種類となる。関(1993)と併せて考えれば、このうち 7 種類は古代語の段階から接頭辞化が確認できる可能性があるということになる。

このように、一般には動詞連接前項の接頭辞化は古代語から確認できるとされ、まさに

³ 本研究では『万葉集』のテキストとして鶴久・森山隆編『万葉集』(おうふう)を用いているが、そのテキストでは「ウチ霧らひ」と読まれている。しかし、この部分は「ウチ霧らし」と読むのが一般的であるため(『時代別国語大辞典 上代編』(三省堂)、伊藤博『万葉集釋注』、新日本古典文学大系『万葉集』(岩波書店)など)、ここでは「ウチ霧らし」とする。

⁴ ただし関は、関(1977)では「押し」「かき」「さし」「取り」「引き」について「後世(大ざっぱに中世以降をいう)接頭語化していったもので、中古では多く叙述性をもっていたとみなされる」(p.120)としている。

古代語において盛んであったと推測されるのだが、古代語において「ウチ」「トリ」といった動詞連接前項が接頭辞化していたことを言語学的手法で明示した研究は見られない。関(1977、1993)、阪倉(1983)、堀(1986)、近藤(1996、1997、1998ab、2001)、山王丸(2011)、村田・前川(2013)など、接頭辞的前項の研究も少なくないのだが、これらはそれぞれの前項の意味的機能の検討や大掴みな歴史的変遷を扱うのみであり、動詞連接の前項がどの時代からどの程度接頭辞化していたのか、なぜ接頭辞化したのか、どのような過程で接頭辞化したのかといった接頭辞化の内実やプロセスについては、ほとんど明らかとなっていない。また、接頭辞的な動詞連接前項に関する研究の多くは中古を対象にしたものであり、上代における前項の接頭辞化についての研究はほとんど蓄積されていない。

接頭辞化のプロセスについての数少ない先行論の一つとして、石井(2007)が挙げられる。石井(2007)によれば、「語彙接頭辞構造」は「過程結果構造」の複合動詞の前項が形式化することによって成立したものと考えられるという。「過程結果構造」とは、「複合動詞の表すひとまとまりの運動を二つの局面に分割し、時間的に先行する〔過程〕の局面を前項が、それに後続する〔結果〕の局面を後項が表わす構造」(p.108)であり、(2)の「複合構造」における基本的な構造である。すなわちこの説に従えば、前項が接頭辞である動詞連接は「複合構造」の複合動詞を経て成立するということになる。これは注目すべき指摘であるが、具体的な接頭辞化のプロセスについては述べられていない。また、石井(2007)は現代語の共時的な様相からの考察のみであり、古代語における動詞連接の様相は踏まえていない。

動詞連接の前項が接頭辞化するという現象は、自立していた語彙項目がその自立性を失うという点で、文法化の一種と位置づけることができる。文法化は一般に「再分析」と「類推」の過程を経ると考えられるが(Hopper and Traugott1993)、動詞連接前項の接頭辞化において「再分析」が「複合動詞化」という形で実現することは十分に考えうる。したがって、動詞連接前項の接頭辞化のプロセスを明らかにし、かつそれが古代語において起きていたことを明示することは、古代語における複合動詞の存否の問題にも一石を投ずることになると考える。

5. 古代語における複合動詞の存否の問題

では、古代語における複合動詞の存否については、これまでどのような議論が行われてきたのか。この問題は金田一(1953)による古代語には複合動詞が存在しないとする主張に端を発し、それ以降、吉澤(1952)、井上(1962)、中村(1971)、関(1977)、小松(2000)、小島

(2001)、百留(2001ab、2002、2003ab)、山王丸(2009)、徳本(2009)、青木(2013)などでも触れられてきた⁵。複合動詞の歴史に関する研究のほとんどがこの問題に触れていると言っても過言ではないが、古代語における複合動詞の存在を否定する立場、中古語の複合動詞は認めるが上代語には認めない立場、上代語から複合動詞の存在を認める立場が混在しており、定説と呼べるものは確立されていない。

古代語に複合動詞が存在しないことの根拠として挙げられる現象のうち、特に注目されるのは(7)に挙げる 2 点である。以下、この 2 点について確認しておく。

- (7)a. 古辞書に見えるアクセントが前項と後項のそれぞれのアクセントをそのまま接続したものであること
- b. 前項と後項の間に係助詞が介入する例があること

5.1 アクセントについて

アクセントの観点から古代語における複合動詞の不在を論じたのは金田一(1953)である。金田一(1953)の主張の要点を以下に抜き出す。

- (8)a. 現在、我々が、《複合動詞》と呼んでいる一群の動詞がある。「率^{ママ}いる」「攻め取る」などはこれであって、これらは、今でこそ全く一つの単語と見るべきものであるが、語源的に見れば二つの動詞の集合であって、いずれ、古い時代には、二語の連続として用いられ、また使う人も、二語の連続として意識していたろうことは確実である。然らば、いつごろまで二語の連続だったのだろうということをアクセントの上から考えてみたいと思う。(p.334)
- b. これらの語が「名義抄」ではどうなっているかというと、「率いる」は上平上平型であり、「攻め取る」は平上平上型に表記されている。(略)「率いる」のアクセントは、「引き」のアクセントと、「ある」のアクセントとをそのまま接続させたものであり、「攻め取る」のアクセントは、「攻め」のアクセントと、「取る」のアクセントとをそのまま接続させたものである。(略)「率いる」の当時のアクセントは、ヒキ

⁵ 金田一(1953)は、同氏が 1946 年に行った講演の内容を論文化したものであるという。吉澤(1952)はこの講演の内容を承けて執筆された。したがって、論文の発表時期は吉澤(1952)よりも金田一(1953)の方が後であるが、実際の内容は金田一(1953)が先である。

イルとなり、「攻め取る」はセメトルとなる。つまり、両方とも二か所に高い部分がある。これは、「率いる」「攻め取る」ともに、当時はまだ二語として意識されていたことを物語るものと考えられる。(p.334)

- c. なお、この種の動詞は、近世初期のアクセント資料である「補忘記」などでは、これらの語は高く発音される音節が一か所に限られており、これによれば、このころには、すでに、現代と同じように、融合して一語となっていたと推定される。(p.335)

しかし、古辞書のアクセントによる判定については、こまつ(1975)、関(1977) 小松(2000)による批判がある。

- (9)a. 名義抄の和訓に差された声点はその語の意味を明確に把握するための一つの考慮であり、工夫であるということになるかと思う。

このような観点に立つとき、問題の複合語に差された声点は、当時の語調に基づいたものではあっても、その意味を明確にするためのある種の作為が、そこに働いていたのではないかと考えたいのである。(関 1977:71)

- b. 語法上からはそれぞれ一動詞と認められるものが、アクセントからは二つの語の連続であるかのようにみられるのは、実は当時の声点の機能が語調標示にありながらも、一面意味を明確にするための一種の作為的判断から、一致関係(阿部注：各構成要素が意味的に対等である合成語の関係)もしくは語源を意識しての差声を行う結果になったものと思う。(関 1977:74)

- (10) 和訓の仮名に声点を加えた一次的目的は、当該の漢字をそのように訓じることについて「師説」や「証拠」があることを明示するためであったが(略)、結果からみると、仮名表記が同じで、抑揚の異なる和訓を声点で区別したり、語構成を明らかにしたりすることによって、同定を確実にしている場合が少なくない。動詞の連続した和訓には後者の方法がとられている。したがって、二つの動詞の単純な和として声点が加えられていることは、語構成の表示が目的であって、そのように発音されていたことを必ずしも意味しない。(小松 2000:52-53)

この問題については、新田(2010)において興味深い指摘がなされた。新田(2010)によれば、現代語においても石川県白峰方言の複合動詞は前項・後項それぞれのアクセントを保

ったまま発音されるという。例えば、「洗い流す」であればアクセントは「[アラ]イ[ナ]ガス HHLMLL」、「思い直す」であれば「[オ]モイ[ナ]オス HLLMLL」とのことである⁶。

(11)a. 白峰方言の 2 つの動詞要素からなる複合動詞は、アクセントについてもほとんどが 2 つのアクセント単位で現れる。これは、金田一春彦(1953)で指摘されている古代のアクセントと類似している。 (p.415)

b. 動詞どうしの複合動詞基本形のアクセントは、原則的には、連用形の前部要素のアクセントと動詞基本形の後部要素アクセントが直接つながった音調で現れる、とまとめられる。ただし、後部要素の音調変動は多少弱まった形で現れる。(p.416)

c. 白峰方言の複合動詞アクセントは、この(阿部注：金田一 1953 に示された)『補忘記』以前の状態に近いものとして注目してよいものであろう。ただ、白峰方言の複合動詞アクセントが韻律的に 2 単位といっても、それが即、形態論的に 2 語で扱ってよいかは問題を含む。白峰方言の複合動詞は、東京方言等と文法的・意味的な性質が共通しており、アクセントの性質だけから 2 語とすることはできないと考える。 (p.415)

この新田(2010)の報告は、ある動詞接続が複合動詞であるかどうかはアクセントのみを根拠にしては論じられないことを示している。また、『類聚名義抄』に付された動詞接続アクセントが当時の実際の発音を表していた可能性を示唆するものでもある。

以上のように、古辞書の声点から分かるアクセントは、古代語における複合動詞の不在の根拠にはならないと考えられる。アクセント以外の事実とも併せて考えなければ、存否は見えてこないであろう。

5.2 助詞の介入について

次に、前項後項間への助詞の介入について考えたい。介入しうる動詞は、主に係助詞と接続助詞「テ」「ツツ」である。本節では係助詞の介入について扱う。

係助詞の介入に関しては、金田一(1953)、吉澤(1952)で言及されている。

⁶ 音調記号の意味は次の通り。H…高、M…中、L…低、[…音調の上昇、] …音調の下降。

- (12) ここに、考え合わせられるのは、「咲き初む」とか、「降りまさる」とかというような語である。これらは現代ではいつも続けて用いられるが、古い時代には、「咲きか初むらん」とか、「降りぞまされる」とかいうように、時に、中間に助詞の類を入れて用いられる。これも二つの動詞の結合がゆるかったことを表わすにちがいない。

(金田一 1953:335)

- (13) (阿部注：助詞が介入する形式について)いま、全面的に調べたのではないが、こゝに述べたように中間に助詞が入り得たのは、これら複合動詞における《二語の複合度が弱かった——即ち、まだ二語として意識されていた》ために他ならないと考えられる。

(吉澤 1952:37)

これに対して、中村(1971)や関(1977)は係助詞が介入している動詞連接にも複合動詞が存在するという立場をとる。中村(1971)は上代においては動詞連接の間に係助詞が介入する例が多いことを指摘し、「思ひは過ぎず」や「思ひそ焼くる」を例に挙げて次のように述べる。

- (14)a. はつきり認定できる「思ひ過ぐ」なる複合動詞は、万葉集中に六例(略)数へることができるのである。しかも、そのいずれもが、既に熟して、「忘レテシマフ」の意に固定してゐるのである。これら諸点から考へて、これもまた、「思ひ過ぐ」なる複合動詞に係助詞「は」が介入した形とこそ見るべきであらう。

(p.6)

- b. ある任意の動詞—助詞—他のある任意の動詞を随意に並べて、その場その場で自由にこの種表現がなされたといふのではなく、やはり既に一往は複合動詞として構成せられた「動詞+動詞」の、その間に、助詞が割つてはひつたものと考へられてくるのである。

(pp.19-20)

- c. 上代にあつては、複合動詞が、このやうに助詞をはさむ例が多い。それはたしかに、上代人が、この種の複合動詞を二語に意識してゐたからではあらう。だが、助詞をはさんだ形の、この種の複合動詞が、動詞—助詞—動詞の順で、突如その場で生まれたものではなくして、二語に還元し得る、しかし、二語連用が漸く固定化しつつあつた複合動詞が既にあつて、助詞はあくまでも強調等のはたらきを添へるべく、この間に割つてはひつたものと考へられるのである。

(p.20)

また関(1977)は、同書中で複合動詞と認定した中古語の「見入る」に「も」が介入した「見も入れず」という形式について、次のように述べている。

- (15) 「も」は一つの叙述性をもった「見入る」に介入することによって、この場合意味の中心になる「見」の部分をもつ働きをなしたものと解することができるように思う。 (p.92)

このように、動詞接続に係助詞が介入するものに関しては、複合動詞となっているものに強調などの目的で挿入したと考える立場も存在する。

この問題についてはその後もしばしば取り上げられるが、小松(2000)は(16)と、宮岡(2002)は(17)と主張するように、決着する気配がない。

- (16) 仮名文テキストで、連続した二つの動詞の間に係助詞が挿入されている場合があることは、(略)仮名文における係助詞の行動の一つとして説明すべきであって、「二つの動詞の結合がゆるかった」と一般化すべきではない。複合名詞と違って、結合が緩かろうときつかりと、動詞には形態の特徴があるので、二つの動詞の切れ目は判然としており、表現の類型に従って中間に助詞を挿入することは容易であった。(pp.47-48)
- (17) 万葉集の歌語には、たとえば「泣キ行ク」にたいして、「泣キテ行ク」(9-1756)、「咲キ散ル」にたいして、「咲キテ散ル」(5-829)、「咲キカ散ル(ラム)」(2-231)、「咲キカモ散ル(ト)」(12-3129)のように、おそらくとくに大きな差もなく「複合動詞」のなかに助詞が割りこむと説明されている現象がある。このような助詞の挿入は、要因が音数を整えることであれ何であれ、挿入が許されるということ自体は、むしろ「泣キ行ク」、「咲キ散ル」がいまだ完全に複合語化してはいない語接続であった可能性を窺わせるように思われる。くりかえすまでもなく、そもそも勝義の複合語には助詞などによる分割を考えるのは妥当ではないからである。 (pp.90-91)

これは、何を以て複合動詞と認定するかという「語」の定義の問題であり、その立場の相違といえる。筆者は、複合動詞(化)を2つ以上の動詞を組み合わせる別の機能の動詞を作るシステムと捉えているため、係助詞の介入などの形態論的な特徴よりも、実際の用例における意味用法を重視したい。いずれにせよ、この問題は個別の形式の蓄積を重ねた上

でなければ言及できないものであり、本研究の立場は本論での検討ののち結論で述べる。

なお、前項後項間への助詞の挿入は、中世室町期にかけて後項が補助動詞であるタイプに偏るようになり、さらに「言いもあへず」「思いもよらず」のような打ち消し句に限定されていくという(青木 2013)。合成語の構成要素に係助詞が介入する現象は、いわゆる断定の助辞「なり」(「に」+「あり」)に係助詞が介入して「にぞある」「にやありけむ」となる場合があるように、動詞接続に限られるものではない。助詞の介入という現象面、あるいは係助詞の振る舞いに史的变化が生じた可能性も大きく、これも含めて実証的な史的研究の蓄積が求められる。

5.3 その他の根拠

先行論では、アクセントや係助詞の介入以外にも、複合動詞の不在の根拠とされる現象がいくつか挙げられている。

吉澤(1952)では、『応永本日本書紀私記』⁷に見られる「分ち書き」によって金田一(1953)の説が補足されている。吉澤(1952)によれば、『応永本日本書紀私記』に挙げられた語句には「連読符(訓仮名と訓仮名の間に付した - 印)」が施されており、それによって「どこからどこまでを一区切りに読むべきか」という「文節」に相当する単位を表していたという。つまり、連読符によって「分ち書き」がなされていたとする。この「分ち書き」が、例えば「投げ入る」であれば「ナ - ゲ イ - ル」、「掴み掛る」であれば「ツ - カ - ミ カ - ハ - ル」のように行われていることを挙げ、「やはり古くは二語に意識されていたために、このように分ち書きされていると考えられる」(p.35)としている。しかし、この「分ち書き」についても、アクセントと同様に複合動詞の存否の決め手にはならないであろう。

さらに吉澤(1952)は、現代語の複合動詞の後項には連濁が起きにくいことを指摘し、次のように述べる。

(18) 動詞プラス動詞の構成を持つ複合動詞が、連濁を起していないのは、取りも直さず、

(略)清濁意識があまり明瞭でなかった時代—連濁が行われ易かった時代(阿部注：吉澤

⁷ 吉澤(1952)には「応永三十五年(一四二八)髪長吉叟の書写になる本文全三十四丁の写本。日本書紀卷一及卷二(神代紀上下)の中から語句を鈔出し、(略)和訓を付したもの」(p.35,注 1)とある。なお、実際にはこれらの部分は万葉仮名で書かれ、さらには声点が付されているということである。吉澤(1952)はこれらをカタカナで引用しており、ここでもそれに従った。

は明示していないが、おそらく中古から中世にかけて)には、いまだ二語と意識されていたためにほかならないのではないだろうか、と考えられる。

もしも一語として意識されていたならば、有声化(連濁)する傾向に抗し切れなかったに違いない。(p.40)

複合動詞に連濁が起きにくいことは事実として認められそうであり、注目すべき現象だが、青木(2013)も指摘するように連濁は語の複合の際に必ず起きるという性質のものではないため、複合動詞の不在の根拠とするには再検討の余地がある。

また、関(1977)や山王丸(2009)では、前項と後項の順序を入れ替えても意味が変わらない動詞接続の存在が、上代において複合動詞が未発達であったことの根拠の1つとされている。そのような動詞接続の例として、関(1977)では「隠り行く」と「行き隠る」、「恋ひ思ふ」と「思ひ恋ふ」、「あがめかしづく」と「かしづきあがむ」などが挙げられている。

「テ」「ツツ」の介入についても、関(1977)が論じている。関(1977)は上代には動詞接続の前項後項間に「テ」「ツツ」が介入しても意味が変わらない例が多いとし、上代の動詞接続の大半が「二つ(以上)の動詞の連続」であると述べる。

このような、前項と後項を入れ替えたり「テ」「ツツ」を介入させたりしても意味が変化しない動詞接続は、確かに2つの動詞の連続と見るべきであろう。しかしこのような動詞接続の存在は、古代語における「継起的な動作(「行き隠る」)や副詞的に修飾すべき動作(「急ぎ行く」)、また付帯状況(「横たへ差す」)であっても、「動詞連用形+動詞」の形で表すことができた(青木 2013:231)という「連用形の修飾法における機能の広さ」(同)によるものであって、複合動詞の存在を否定する根拠にはならない。前項・後項の入れ替えや「テ」「ツツ」の介入を許さない動詞接続も上代から少なからず存在していたと考えられるのであり(徳本 2009)、存否の議論においてはこちらの事実を重視すべきである。

百留(2001ab、2002、2003ab)では、古代語における複合動詞の不在が論じられている。その主張の根拠となっているのは、主として後項の補助動詞化の度合いである。「一入る」「一続く(続ける)」「一出す」といった後項が中古頃までは文法化していなかったことなどを挙げ、古代語には複合動詞が存在していなかったと論じている。しかし、後項が文法化していないとしても、全ての複合動詞の不在を論じることはできない⁸。

⁸ 青木(2013)でも言及されているように、古代語における「たまふ」「たてまつる」などのいわゆる敬語の補助動詞は文法化したものと認められる。後項の文法化の度合いについても再検討の余地があろう。

5.4 複合動詞の存在を認める説

このように古代語における複合動詞の不在は様々な面から論じられているが、上代あるいは中古から複合動詞が存在したとする説もある。

関(1977)は上代の複合動詞の存在は基本的に認めていないが、中古については一部認めている。複合動詞と認められる例として「出で立つ」「立ち出づ」「見入る」などを挙げ、これらは前項と後項を入れ替えると意味が変わるとする。同様に、山王丸(2009)でも『万葉集』中の「ありがよふ」「ありわたる」については連濁や順序の入れ替えが不可である点から複合動詞としている。この他、井上(1962)、中村(1971)においても上代の複合動詞が一部ながら認められている。

さらに、徳本(2009)は上代語の動詞接続について広く検討しており、以下に挙げるような事実を指摘する。

- (19)a. 上代においても、前項と後項が対等であるもの＝単なる複数の動詞の羅列の割合は高くない。
- b. 前項と後項の順序が固定された語の割合が高い。
- c. 一見単なる羅列に見えても、文脈から対象との関係を分析すると一体化している動詞が見られる。
- d. 接頭語的用法、補助動詞的用法が多い。補助動詞的用法については、不可能・困難と継続の表現を中心に高い造語機能を持つ語も見られる。

これらの事実から、徳本(2009)は「一語化とは言い切れないまでも、上代においてすでに複数の動詞が一体化して多用されており、複合動詞が成立していたと言えるだろう」(p.123)とする。ただし、徳本(2009)においても、前項が接頭辞的なものについてはほとんど論じられていない。

6. まとめ

以上のように、古代語においては動詞接続の非一語化を示すとされる事実と、複合動詞の存在を示すとされる事実が共存しており、存否に関しては未だ定説を見ていない。先行論をまとめれば、古代語においては現代語ほどには複合動詞が発達していなかったが、複

合動詞と認められる動詞接続も存在していたということになる。青木(2013)は、このような古代語の動詞接続の様相について次のように述べる。

- (20) 少なくとも奈良時代文献において「複合動詞」と見るべき例とそうでない例が混在しているという事実は、複合動詞というカテゴリーがそのような歴史的展開の只中にあることを示していよう。明らかな「複合動詞」として認められるものは、前項や後項において、意味の抽象化や脱範疇化(格付与能力の欠如)を起こしながら「複合」したもののとして、いずれも歴史的所産として説明することができる。(p.220)

青木(2013)は、古代語の動詞接続を「基本的に「語」を作る形式ではなく、「句」を作るための形式であったと考えられる」(p.220)とし、次のような構造を想定する。

- (21) VP [VP [項+V1(連用形)] [V2]]

このような「句」を作る構造において、歴史的に前項(V1)と後項(V2)の結びつきが強まり、複合動詞が発達したと主張している。これが事実であれば、次に問題となるのは前項と後項の結びつきがいつ頃から強まったのかである。青木(2013)は、動詞接続への助詞の介入が「補助動詞タイプにおける打ち消し句」に限定されていくという「助詞挿入の固定化」、単なる動詞の連続の際には「テ」を表示するという「テ形の発達」、前項の「接頭語化」が近代語以降は起こりにくいという「接頭語化の収束」といった、前項と後項の緊密な結びつきを示す現象がいずれも中世室町期を境に起きているとする⁹。しかし、複合動詞と見るべき動詞接続が上代から存在する以上、前項と後項の結びつきがすべての動詞接続において中世室町期に一齐に起こったのではないことも明らかである。

先にも述べたように、前項や後項の接辞化は「複合動詞」の段階を経ている可能性が高い。「意味の抽象化や脱範疇化」が起きている動詞接続は(2)の「派生構造」と「熟合構造」に相当し、古代語においても比較的発見が容易である。しかし、「派生構造」「熟合構造」のもとになると考えられる「複合構造」の複合動詞は、前項も後項もその本来的な特徴を

⁹ 青木(2013)は、前項の「接頭語化」について「ある特定の語との結びつきを契機として漂^マ泊^マ化が進んだ可能性は高いが、結果的に前項 V1 が文法的要素として切り出されるということは、それだけ前項 V1 と後項 V2 の結びつきが緩いことを示していると考えられる」(p.232)とする。

保持しているのであるから、内省の利かない古代語においては発見が困難である。古代語に「複合構造」の複合動詞が存在していたとしても、それは豊富な実例を詳細に検討しなければ発見できないものであり、従来の研究では見逃されることが多かったと推測される。

動詞接続の変遷の大まかな流れは青木(2013)によって示されたが、古代語において動詞接続の複合動詞化がどの程度進んでいたのかという問題には未だ明らかでない部分が多い。複合動詞の存否に限らず、古代語において動詞接続がどのような様相であったのか、どのような複合動詞がどの程度存在していたのかについては、個別の動詞接続についての詳細な検討を蓄積し、そこから帰納的に結論を導くよりほかないであろう。本研究は、そのような動詞接続の個別的検討の 1 つであり、動詞接続史構築の一環として位置づけられる。前項の接頭辞化が確認される動詞接続の古代語における様相や接頭辞化のプロセスを示すことによって、日本語動詞接続史の一端を明らかにすることが、本研究の目標である。

7. 本論の内容

本研究では、前項が接頭辞である動詞接続の具体例として、「取る」を前項とする動詞接続(以下、「トリー」)と、「打つ」を前項とする動詞接続(以下、「ウチー」)を取り上げる。次章からは、本論として、古代語文献に出現する動詞接続「トリー」「ウチー」についての具体的な検討を行っていく。各章で扱う具体的な内容を以下に示す。

第 1 章では上代語の「トリー」を扱う。「トリー」は、辞書や注釈書では上代から前項が接頭辞的な例が見られるとされるが、接頭辞化や複合動詞の存否といった観点から上代の「トリー」を扱った研究はこれまでに見られない。これらの観点到に注目して「トリー」の検討を行うことにより、上代における動詞接続の様相の一端を明らかにできる。

第 2 章では中古語の「トリー」を扱う。「トリー」は中古には異なり語数・延べ語数ともに増加する。したがって、中古の「トリー」の様相を記述することは、古代語における複合動詞の存否について考察する上で重要である。また、第 1 章で明らかにした上代の「トリー」の様相と比較することによって、上代から中古にかけての「トリー」の変遷を明らかにすることを目指す。

第 3 章では上代語の「ウチー」を扱う。「ウチー」は、先行論では中古には前項が接頭辞化していたとされる。とすれば、「ウチ」の接頭辞化について探るには上代の様相についての考察が必須である。上代の「ウチー」の様相を記述し、「ウチ」の接頭辞化が上代にどの程度認められるのか、接頭辞化のプロセスはどのようなものと考えられるのかについて検

討する。

第4章では中古語の「ウチー」を扱う。中古の「ウチー」については先行論の蓄積があるが、「ウチ」の意味的機能に焦点を当てているものが多く、動詞接続史の観点からの「ウチー」の検討はほとんど行われていない。中古には爆発的に増加する「ウチー」の様相を記述し、上代の様相と比較することにより、「ウチー」の歴史的な変遷に迫りたい。

最後に、本研究のまとめを述べる。古代語における複合動詞の存否や、前項が接頭辞である動詞接続の古代語における様相について、本研究の立場からの主張を行い、結論とする。さらに、本研究では明らかにすることができなかった課題についても述べる。

第1章 上代日本語における動詞連接「トリー」の様相

1. はじめに

本章では「取る」の連用形「トリ」を前項とする動詞連接「トリー」を取り上げる。『時代別国語大辞典 上代編』（三省堂）が動詞「取る」の項目で「接頭語的に用いられることもある」とするように、上代語の「トリ」に接頭辞的用法が存在することは広く知られている。しかし、上代語の「トリー」について詳細に論じた先行研究は見られず、前項が接頭辞である「トリー」が上代語にどの程度存在したのか、どのようなプロセスで接頭辞化したのかといった接頭辞化の実態は明らかとなっていない。これらの問題についての検討は、日本語動詞連接史を構築する上で欠かせないものである。

以下、上代語資料に現れる「トリー」について、前項の接頭辞化が認められるかを中心に検討する¹。考察においては、まず前項となる動詞「トル」の上代語における振る舞いを確認し、その後「トリー」の様相を見る。単独使用時の「トル」の機能を保存しておらず、意味的・統語的に後項動詞に従属しているような前項「トリ」が存在すれば、接頭辞と認められる。

序章で述べたように、前項が接頭辞である動詞連接は石井(2007)の「派生構造」（語彙接頭辞構造）の複合動詞に当てはまる。「派生構造」の複合動詞がどのように成立するのかは明らかになっていないが、石井(2007)が指摘するように、前項と後項がそれぞれの機能のある程度保っている「複合構造」の複合動詞をもとにしている可能性が高い。しかし従来、複合動詞の存否の議論において、前項の接頭辞化が取り上げられることはほとんど無かった。したがって、前項が接頭辞である動詞連接の存否を明らかにし、接頭辞化が認められるとすればそのプロセスについて考察することによって、古代語における複合動詞の存否の問題にも一石を投じることができる。

2. 上代における「トル」

動詞連接「トリー」について考察する前提として、上代語文献における動詞「トル」の

¹ 上代語資料として、『古事記』歌謡、『日本書紀』歌謡、『万葉集』、『続日本紀』宣命を用いる。

特徴を確認する。上代語資料から「トル」は 125 例得られた²。仮名書き例を除いた「トル」の原表記は、「取」「採」「獲」「執」「漁取」であった。

上代語の「トル」は、ほぼすべての用例において目的語(動作対象)を伴う。「トル」の目的語は具体物であることが多いが、『続日本紀』宣命には「姓」(四十四詔)「政の柄」(二十八詔)といった抽象的な事柄を目的語とする例も存在する。このような用法は、具体物を目的語とする用法から派生したものと考えられる。目的語が明示されない例³も僅かにあるが、その場合も文脈から「トル」の動作対象を容易に判断できる。以上より、上代語資料の「トル」は常に他動詞として使用されているといえる。

- (1) 霰降り吉志美が岳を陰しと草トリかなわ(草取可奈和)妹が手をトル(妹手乎取)
(万葉集・巻 3・385)
- (2) 千万の軍なりとも言挙げせずトリて来ぬべき(取而可来)男とぞ思ふ
(万葉集・巻 6・972・高橋虫麻呂)
- (3) 瘦す瘦すも生けらばあらむをはたやはた鰻をトルと(武奈伎乎漁取跡)川に流るな
(万葉集・巻 16・3854・大伴家持)
- (4) 珠洲の海人の沖つ御神にい渡りて潜きトルといふ(可都伎等流登伊布)鰻玉
(万葉集・巻 18・4101・大伴家持)
- (5) み幣取り三輪の祝が斎ふ杉原薪伐りほとほとしく手斧トラえぬ(手斧所取奴)
(万葉集・巻 7・1403)

「トル」はいずれも他動詞として使用されるが、表す動作は一樣ではない。(1)は草を「つかむ」「持つ」といった単純な「手にする」意、(2)は敵を「討ち取る」意、(3)は鰻を「捕まえる」意、(4)は鰻玉(真珠)を「採取する」意、(5)は手斧を「奪い取る」意で解釈される。このように「トル」は様々な動作を表すが、いずれの例にも「自分の領域の外にある対象を、手を介して自分の領域に引き入れる」という意味的な共通性があると考えられる。こ

² 用例採集においては、『万葉集』は『萬葉集索引』(塙書房)、『萬葉集總索引 單語篇』(平凡社)を利用し、記紀歌謡は日本古典文学大系『古代歌謡集』(岩波書店)を参照した。また、「トル」が単独で使用される例だけでなく、動詞連接後項となる例もここに含めた。

³ 冬こもり 春さり来れば 鳴かずありし 鳥も来鳴きぬ 咲かずありし 花も咲けれど 山をしみ 入りても トラず(入而毛不取) 草深み トリても見ず(執手母不見)
(万葉集・巻 1・16・額田王)

れを上代語における「トル」の基本的な意味と考えてよいだろう。

3. 上代における「トリー」

3.1 概要

動詞接続「トリー」は、延べ語数で『古事記』歌謡から 6 例、『万葉集』から 91 例、『続日本紀』宣命から 2 例得られた。『日本書紀』歌謡には用例が無かった。前項「トリ」の仮名書き例を除く表記は「取」「採」「執」であり、「トル」の単独使用時とほぼ同様である。

上代における「トリー」の用例数は以下の通り。

- (6) トリ上ぐ[1]、トリ与ふ[2]、トリ置く[2]、トリ負ふ[4]、トリ懸く[5]、トリ替ふ[3]、
トリ枯らす[1]、トリ着る[3]、トリ来[2]、トリ探る[1]、トリ敷く[1]、トリ垂づ[2]、
トリ総べ持つ[1]、トリ添ふ[2]、トリ束ぬ[1]、トリ付く(四段活用)[3]、
トリ付く(下二段活用)[3]、トリ尽す[1]、トリ続く(四段活用)[2]、トリつづしろふ[1]、
トリとどこほる[1]、トリ撫づ[1]、トリ靡く[1]、トリ並め掛く[1]、トリ佩く[8]、
トリ離す[1]、トリ見る[7]、トリ向く[2]、トリ食す[1]、トリ持つ[29]、トリ装ふ[5]、
トリよろふ[1]

「トリー」の後項には、他動詞と意志的自動詞があることが分かる。非意志的自動詞を後項とする「トリー」は見られない。

前項「トリ」が動詞として機能しているのか、あるいは接頭辞であるのかを判定するには、「トル」の単独使用時との比較が有効である。動詞接続前項となった際に「トル」の本来の特徴が失われていれば、単なる動詞の連続ではないことになる。先に見たように、「トル」には何らかの動作対象を有するという統語的な特徴がある。したがって、前項「トリ」の機能を判定する際には、目的語の有無が重要な手掛かりとなると考えられる。

後項動詞の性質と目的語の有無により、「トリー」は 4 つのタイプに分けられる。以下、①～④の「トリー」について、前項の機能を中心に考察する。

(7) 上代語の「トリー」

- ①目的語を伴う「トリ+他動詞」
- ②目的語を伴わない「トリ+他動詞」

③目的語を伴う「トリ＋意志的自動詞」

④目的語を伴わない「トリ＋意志的自動詞」

3.2 ①目的語を伴う「トリ＋他動詞」

上代の「トリ＋他動詞」の大部分は目的語を伴って使用される。前項「トリ」が動詞として機能しているのか、あるいは接頭辞であるのかを判定しがたい例も多いが、前項が接頭辞と考えられる例も確認できる。

3.2.1 判定が難しい例

「トリ＋他動詞」は前項となる動詞も後項となる動詞も目的語を伴いうるため、「トリ」が動詞としての機能を有している場合も、接頭辞となっている場合も、統語的特徴には違いが生じない。そのため、このタイプは前項「トリ」が接頭辞化しているのかの判定が非常に難しい。しかし、古代語の「トリー」に最も多いのはこのタイプであるため、まず初めに触れておく。

例えば、次に挙げる「トリー」では、前項「トリ」が動詞として機能しているのか、あるいは接頭辞であるのかの判断が難しい。

(8) やすみしし 我が大君の 朝には トリ撫でたまひ(取撫賜) 夕には い寄り立たしし み
執らしの 梓の弓の 中弭の 音すなり (万葉集・巻1・3・間人連老)

(9) 針袋トリ上げ前に置き(等利安宜麻敝尔於吉)返さへばおのともおのや裏も継ぎたり
(万葉集・巻18・4129・大伴池主)

このような連用形で直接繋がれた動詞接続は、現代語においては複合動詞である可能性が高い。しかし、古代語においては「継起的な動作(「行き隠る」)や副詞的に修飾すべき動作(「急ぎ行く」)、また付帯状況(「横たへ差す」)」といった単なる2つの動詞の連続であっても「動詞連用形＋動詞」で表すことができたとされる(青木 2013:231)。そのため、複合動詞ではない単なる動詞の連続である可能性も考える必要がある。また、仮に(8)(9)の「トリー」が複合動詞となっているとしても、「トリ」と「撫づ」「上ぐ」がそれぞれの意味を保ったまま「複合構造」の複合動詞となっているという解釈、「トリ」は接頭辞であり「派生構造」の複合動詞となっているという解釈のいずれもが可能である。かような「トリー」

については、前項「トリ」の機能を判定するに足る情報が無いため、現時点では保留とせざるをえない。古代語の「トリ＋他動詞」にはこのような判定が困難な例が多い。内省の利かない古代語において複合動詞であることが判明するのは、主に、前項あるいは後項の特徴が失われている場合である。

3.2.2 ニ格補語を伴う「トリ＋他動詞」

「トリー」には目的語とニ格補語の両方を伴うものが多く、上代の「トリー」99例のうち42例を占める⁴。「トリー」の補語になるニ格には、「手に(トリ持つ)」「腰に(トリ佩く)」「海中に(トリ向く)」のように「トリー」の間接的な対象を示すものや、「春の日に(トリ持つ)」「乞ひ泣くごとに(トリ与ふ)」のように動作の時間や場所、契機などを示すものがある。ここでは、前者に注目する。

動作の間接的な対象を示すニ格を伴う「トリー」は上代に36例確認できる。この形式で最多のものは、「手にトリ持つ」の16例である。「トリ持つ」は上代に29例確認されるが、そのうち16例が「手に」(「大御手に」1例を含む)を伴って使用される。

- (10) 木綿疊手にトリ持ちて(手取持而)かくだにも我れは祈ひなむ君に逢はじかも
(万葉集・巻3・380・坂上郎女)
- (11) まそ鏡手にトリ持ちて(手取持手)朝な朝な見む時さへや恋の繁けむ
(万葉集・巻11・2633)
- (12) 手束弓手にトリ持ちて(手取持而)朝狩りに君は立たしぬ棚倉の野に
(万葉集・巻19・4257・船王)

これに対し、単独使用時の「トル」がニ格補語を伴うことは少なく、「手に」を伴う例は125例中5例に過ぎない。

- (13) 目には見て手にはトラえぬ(手二破不所取)月の内の楓のごとき妹をいかにせむ
(万葉集・巻4・632・湯原王)

⁴ 『古事記』歌謡にはニ格補語ではない「ニ」を伴う例ある。次例は、副詞あるいは形容詞の一部と考えられる「ニ」を伴っており、形態的にはニ格補語を伴う例と同様である。

ぬばたまの 黒き御衣を ま具に トリ装ひ(登理與曾比) (古事記・歌謡4)

- (14) 初春の初子の今日の玉簪手にトルからに(手尔等流可良尔)ゆらく玉の緒

(万葉集・巻 20・4493・大伴家持)

「トル」が「手に」を伴う例は『万葉集』に 5 例あるのみであるのに対し、「トリ持つ」は半数以上が「手に」を伴っている。二格補語の共起という点で、「トル」と「トリ持つ」の差は顕著である。このような明らかな差が見られることは、「トリ持つ」が単に「トル」と「持つ」が連続しただけの動詞接続ではないことを示している。前項「トリ」が単独使用時と同じく個別の動詞として機能しているとすれば、「持つ」に前接した場合にのみ「手に」を伴いやすいことが説明できない。なお、『万葉集』において他動詞「持つ」が「手に」を伴う例は 1 例のみであり、この特徴は「持つ」とも合致しない⁵。「手に」を伴いやすいという特徴は、動詞接続「トリ持つ」に備わるものといえる。「トル」「持つ」にはない独自の統語的特徴を有していることから、「トリ持つ」が複合動詞であった可能性が浮かび上がる。

二格補語を伴いやすい「トリ＋他動詞」は他にもある。中でも「トリ佩く」は二格補語を伴って使用されやすく、8 例中 6 例が二格補語を伴う⁶。

- (15) ますらをの 心振り起し 劔太刀 腰にトリ佩き(腰尔取佩) 梓弓 鞆トリ負ひて 天地
と いや遠長に 万代に かくしもがもと (万葉集・巻 3・478・大伴家持)

- (16) 枕太刀腰にトリ佩き(己志尔等里波伎)ま愛しき背ろが罷き来む月の知らなく
(万葉集・巻 20・4413・大伴部真足女・防人歌)

『万葉集』を調査したところ、四段活用の「佩く」が「トリ佩く」形以外で二格補語を伴う例は「劔太刀身に佩き添ふる(身尔佩副流)」(万葉集・巻 11・2635)のみであった⁷。二格補語を伴いやすいことは、「佩く」にはない「トリ佩く」独自の特徴と言える。「トリ佩く」が二格補語を伴いやすい点は、「トリ持つ」が「手に」を伴いやすいことと類似する。

⁵ 手に持てる(手尔持流) 我が子飛ばしつ 世の中の道 (万葉集・巻 5・904)

⁶ 「取帶之」(万葉集・巻 2・199)は「トリオバシ」と訓読される場合があるが、ここでは『萬葉集』(おうふう)に従い「トリハカシ」と読む。

⁷ 「佩く」には四段活用のもと下二段活用のものがあり、『万葉集』において前者は 4 例、後者は 2 例で確認できる。この他、「トリ佩く」以外では「かけ佩く」「さし佩く」「佩き添ふ」「佩けり」「み佩かしを」「むか佩き」が各 1 例見られる。

両者には何らかの関連があると推測される。

この他、「トリ懸く」「トリ添ふ」「トリ向く」「トリ付く」「トリ垂づ」にも二格補語を伴う例が見出だされる。

- (17) 我が思へる 君によりては 言の故も なくありこそと 木綿たすき 肩にトリ懸け(肩荷取懸) 斎瓮を 斎ひ掘り据ゑ 天地の 神にぞ我が捧む いたもすべなみ

(万葉集・巻 13・3288)

- (18) ちはやぶる 神の社に 照る鏡 倭文にトリ添へ(之都尔等里蘇倍) 祈ひ捧みて 我が待つ時に

(万葉集・巻 17・4011・大伴家持)

- (19) 在り嶺よし対馬の渡り 海中に幣 トリ向けて(幣取向而)早帰り来ね

(万葉集・巻 1・62・春日藏首老)

- (20) 矢形尾の 我が大黒に 大黒者蒼鷹之名也 白塗の 鈴 トリ付けて(鈴登里都氣豆) 朝獵に 五百つ鳥立て

(万葉集・巻 17・4011・大伴家持)

- (21) 竹玉を 繁に貫き垂れ 斎瓮に 木綿 トリ垂で(木綿取四手而) 斎ひつつ 我が思へる我子 ま幸くありこそ

(万葉集・巻 9・1790)

以上をまとめると、「トリ＋他動詞」には二格補語を伴う例が多く、その傾向は「トリ持つ」「トリ佩く」でより顕著に現れていると言えよう。単独使用時の「トル」が二格補語を伴う例が少ないことを考慮すると、これらの「トリー」における前項「トリ」は、単独の動詞としては機能していないと考えられる。「トリ」と後項動詞が一体化した複合動詞と見るべきであろう。

また、手に関する動作を表す「トル」が「腰にトル」「肩にトル」などの表現を形成することは考えにくい。一方、例えば「佩く」は「腰から下の身体に物を装着する」意を表す他動詞と考えられており、単独で二格を伴う用例は少ないながらも、その意味からは「腰に佩く」という表現を十分に想定しうる動詞である。「懸く」も同様に「肩に懸く」という表現を想定できる。したがって、「腰に」「肩に」は「佩く」「懸く」と格関係にあり、その間に「トリ」が介入していると見ることができる。二格補語とその述語の間に別の動詞が割りこむことも、臨時的には起こりえたであろう。しかし、前項「トリ」が自立した動詞として機能しているのであれば、「～ヲトリ腰に佩き」「～ヲトリ肩に懸け」といった語順が自然であると思われる。そのような語順の例が 1 例も見られず、「腰にトリ佩く」「肩に

トリ懸く」という二格補語と述語の間に「トリ」が介入する例のみが見られるという事実は、「トリ」と後項動詞の接続が固定化していることを示しているといえよう。断定はできないものの、かような前項「トリ」は接頭辞的に機能していると考えられる。

なお、このような二格補語を伴う「トリー」は、中古の韻文にも見られる。「～(ヲ)～ニトリー」あるいは「～ニ～(ヲ)トリー」という韻文に特徴的な構文として定着していたと考えられるが、これについては次章で扱う。

「トリ持つ」「トリ佩く」「トリ懸く」などには、(22)(23)のように二格補語を伴わない例も見られる。また、(24)(25)のように二格補語を伴う「トリー」が別の「トリー」と連続する例もある。これらの「トリー」も、(8)(9)と同様に前項の機能の判定は困難であるが、単なる動詞の連続ではないと考えられる。

- (22) なでしこが花トリ持ちて(波奈等里母知互)うつらうつら見まくの欲しき君にもある
かも (万葉集・巻 20・4449・船王)
- (23) もころ男に 負けてはあらじと 懸け佩きの 小太刀トリ佩き(小劔取佩) ところづら
尋め行きければ (万葉集・巻 9・1809・高橋虫麻呂歌集)
- (24) 奥山の 賢木の枝に しらか付け 木綿トリ付けて(木綿取付而) 斎瓮を 斎ひ掘り据ゑ
竹玉を 繁に貫き垂れ 獣じもの 膝折り伏して たわや女の 襲トリ懸け(押日取懸) か
くだにも 我れは祈ひなむ 君に逢はじかも (万葉集・巻 3・379・坂上郎女)
- (25) ますらをの 心振り起し 劔太刀 腰にトリ佩き(腰尔取佩) 梓弓 鞆トリ負ひて(鞆取負
而) 天地と いや遠長に 万代に かくしもがもと 頼めりし 皇子の御門の
(万葉集・巻 3・478・大伴家持)

3.2.3 その他

これまでに上げていない「トリ+他動詞」で注目されるものとして、(26)(27)の 2 例を挙げておく。

- (26) 風交じり 雨降る夜の 雨交じり 雪降る夜は すべもなく 寒くしあれば 堅塩を トリ
つづしろひ 糟湯酒 ウチすすろひて (万葉集・巻 5・892・山上憶良)
- (27) 劔大刀身に添ふ妹を トリ見がね(等里見我祢)音をぞ泣きつる手児にあらなくに
(万葉集・巻 14・3485・東歌)

(26)は、「トリー」が「ウチー」と並列される例である。この例については、第3章で触れる。

(27)の「トリ見る」は「妹」を目的語とする。「トル」が単独使用された際には人物を目的語とする例が無いことから、この「トリ見る」も単なる動詞の連続であるとは考えにくい⁸。「トリ見る」については次節で扱う。

3.3 ②目的語を伴わない「トリ+他動詞」

このタイプは上代には少ないが、「トリ見る」「トリ持つ」「トリ装ふ」には注目すべき例が存在する。以下、この3つの「トリー」の用法を見ていく。

3.3.1 トリ見る

「トリ見る」は上代に7例確認できる。衣類を対象とする例と人を対象とする例があるが、後者には(31)のように目的語が明示されない場合がある。前者の例として(28)(29)を、後者の例は(27)に既出だが、さらに(30)(31)を挙げておく。

(28) 今年行く新防人が麻衣肩のまよひは誰れかトリ見む(誰取見) (万葉集・巻7・1265)

(29) 織女の五百機立てて織る布の秋さり衣誰れかトリ見む(孰取見)(万葉集・巻10・2034)

(30) 槻弓の 伏る伏りも 梓弓 立てり立てりも 後もトリ見る(能知母登理美流) 思ひ妻あはれ (古事記・歌謡 89)

(31) 道の隈廻に 草手折り 柴トリ敷きて 床じもの うち臥い伏して 思ひつつ 嘆き伏せらく 国にあらば 父トリ見まし(父刀利美麻之) 家にあらば 母トリ見まし(母刀利美麻志) 世間は かくのみならし 犬じもの 道に伏してや 命過ぎなむ

(万葉集・巻5・886・山上憶良)

(28)の「まよひ」は「布のほつれ」と解釈される。「トリ見る」が単に「手に取って見る」という意であれば、歌意は「肩の部分のほつれは誰が見ののだろうか」となるが、「ほつれ」は見るものではなく繕うものであり、このままでは和歌として成り立たない。かような「ト

⁸ 「君が手」「妹が手」といった身体の一部を目的語とする例は存在する。

「トリ見る」は、文脈上「世話をする」「面倒を見る」（この場合、具体的には「繕う」）と解釈すべきである。(29)は、単に「手に取って見る」意とされることもあるが、これから一年間独り暮らしの彦星の衣を誰が世話するのか、と解する立場もある⁹。(28)のような「トリ見る」の存在に鑑みると、(29)も「世話をする」意で解釈すべきと考えられる。

(27)(30)は「妹」「思ひ妻」といった人物を「トリ見る」という例である。「トル」が人物を目的語とする例は無いこと、文脈上「手に取って見る」という解釈が成り立たないことから、先の例と同じく「世話する」「面倒を見る」意と取るべきである。(31)は目的語が明示されない例である。旅の途中で死んだ若者について詠んだ歌であり、国にいれば父が、家にいれば母が「トリ見」てくれるだろうに、という内容である。この「トリ見る」は「介抱する」「看病する」と解釈されるが、これは「世話をする」「面倒を見る」意の用法からの派生と見ることができる。かような「トリ見る」は、人物を目的語とする例や目的語が表示されない例があるという統語的特徴や、「世話をする」「面倒を見る」といった解釈が求められるという意味的特徴から、単なる動詞の連続ではなく、複合動詞と考えられる。

「トリ見る」の成立プロセスは現時点では明らかでないが、「～ヲトリ、見る」という単なる2つの動詞の連続である例が見られないことから、「見る」に接頭辞「トリ」が付されて成立した可能性が高いと思われる。

3.3.2 トリ持つ

「トリ持つ」は既に見たように目的語と「手に」を伴う例が多いが、次のような目的語を伴わない例も存在する。

(32) 大君の 任きのまにまに トリ持ちて(等里毛知氏) 仕ふる国の 年の内の 事かたね持
ち (万葉集・巻18・4116・大伴家持)

「トル」が常に目的語を伴うことは先に述べたが、「持つ」もまた、単独で使用される際にはほぼ例外なく目的語を有する。したがって、この「トリ持つ」は、動詞「トル」「持つ」のどちらの統語的特徴にも合致しない。また、(32)の「トリ持つ」は「政事を行う」「とり

⁹ 当該箇所について、伊藤博『萬葉集釋注』（集英社）は「いったいどなたが取り上げて見るのであろうか」、新日本古典文学大系『萬葉集』（岩波書店）は「誰が手に取って見るのであろうか」と注する。これに対し、新編日本古典文学全集『萬葉集』（小学館）は「誰が世話をするのだろうか」と注している。

まとめる」といった意味で使用されていると考えられ、「トル」や「持つ」が本来表す何らかの物体を手にする動作を表していない。統語・意味の両面において、「トリ」「持つ」どちらの特徴も確認できないといえる。

同じ用法と思われる「トリ持つ」に、以下の 2 例がある。これらにはそれぞれ「食す国の事」「政事」という目的語が存在するが、政治的な文脈において具体的な目的語を伴わずに使用されている点で、(32)の「トリ持つ」に類似している。

(33) 大君の 命畏み 食す国の 事トリ持ちて(許等登理毛知弓) 若草の 足結び手作り
(万葉集・巻 17・4008・大伴池主)

(34) 大嘗^乃政事^乎取^以天^奉供^{良之止}念行^{天奈毛}位冠賜^{久止}宣。
(続日本紀・宣命第三十七詔・称徳天皇)

目的語の性質は注目すべきである。「事」「政事」のような、誰かの所有物となりえない、モノではない事柄を目的語とする例は、「トル」には見られない¹⁰。「トル(執)」が「政事を行う」意で使用されているように見える(35)のような例も存在するが、ここは「悪くて心のねじれた奴が政治の根本を握っている」という文脈であり、本来は具体物である「柄」を比喩的に使用していると考えられる。

(35) 悪^久奸岐奴^乃政乃柄^乎執^天
(続日本紀・宣命第二十八詔・孝謙天皇)

一方「持つ」には(32)「事かたね持ち」の例があり、「持つ(かたね持つ)」が「事」を目的語としているが、そのような例はこの 1 例のみである。抽象的な事柄を対象として取りうるという特徴は、動詞接続「トリ持つ」においてより顕著であると言えよう。

以上のように、(32)～(34)の「トリ持つ」は「政事を行う」「とりまとめる」といった意で使用されており、独自の特徴を有する複合動詞と見るのが妥当である。このような前項とも後項とも異なる意味的機能を有する複合動詞は、石井(2007)の「熟合構造」に当てはまると考えられる。

¹⁰ 次節で述べるように、「トル」が抽象的な目的語を伴う例は中古に至っても限定的である。

3.3.3 トリ装ふ

「トリ装ふ」は上代に 5 例確認される。ただし、「トリ装ほひ」と読まれる『万葉集』巻 16・3791 の「取飴氷」は訓読が定まっておらず、「トリ飾らひ」と読まれる場合もあるため、確例としない。

「トリ装ふ」には目的語を有する例(36)と目的語を有さない例(37)がある。

- (36) ぬばたまの 黒き御衣を ま具に トリ装ひ(登理與曾比) (略) 鳩鳥の 青き御衣を ま具に トリ装ひ(登理與曾比) (略) 染木が 汁に 染衣を ま具に トリ装ひ(登理與曾比)
(古事記・歌謡 4)
- (37) 大君の 命畏み 妻別れ 悲しくはあれど 大夫の 心振り起し トリ装ひ(等里与曾比)
門出をすれば たらちねの 母搔き撫で 若草の 妻はトリ付き 平らけく 我れは斎は
む (万葉集・巻 20・4398・大伴家持)

同様に、「トリ」の付されない「装ふ」にも目的語を有する用法と有さない用法のいずれもが存在する¹¹。そのため、「装ふ」を自動詞と見るか他動詞と見るかの判断が難しいが、ここでは目的語を有する例の存在を重視し、他動詞とした。

(36)は前項「トリ」が実際的な手にする動作を表している可能性がある。これに対し、(37)は目的語が存在せず、「トリ」が動作を表している可能性は低い。「トリ装ふ」で複合動詞化していると考えられる。

意味的には「装ふ」と「トリ装ふ」に顕著な差異はなく、いずれも「身支度する」「準備する」「装飾する」といった意味を表していると考えられる。「トリ」は具体的な動作を表さない接頭辞と考えられる。

3.4 ③目的語を伴う「トリ+意志的自動詞」

意志的自動詞を後項とする「トリー」は「トリ付く(四段活用)」「トリ来」「トリ続く(四段活用)」「トリとどこほる」のみであり、「トリ+他動詞」に比して少ない。このうち、目的語を伴うものは「トリ来」の 2 例のみであった。

¹¹ 木綿花の 栄ゆる時に 我が大君 御子の御門を (略) 神宮に 装ひまつりて(装束奉而)

(万葉集・巻 2・199・柿本人麻呂)

(38) 天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月夜見の 持てる をち水 いトリ来て(伊取来而) 君に奉りて をち得てしかも (万葉集・巻 13・3245)

(39) 虎に乗り 古屋を越えて青淵に 蛟竜 トリ来む(蛟龍取将来) 剣大刀もが (万葉集・巻 16・3833・境部王)

「をち水」「蛟竜」は「トリ来」の目的語になっているが、後項「来」は自動詞であり目的語を有するとは考えられないことから、これらは前項「トリ」の目的語であると判断できる。目的語を伴うという特徴は、既に見た「トル」の特徴と合致する。これらの例における「トリ」は「(をち水を)手に入れる」「(蛟竜を)捕まえる」という具体的な動作を表しており、意味的にも「トル」が単独で使用される場合と相違ない。前項「トリ」は他動詞としての機能を保持している¹²。

前項「トリ」の統語的特徴が保持されていること、意味の特殊化が認められないことから、これらの「トリ来」は前項「トリ」と後項「来」がいずれも動詞としての機能を有していると考えられる。かような「トリ来」を複合動詞と考える積極的な理由は存在しない。ここでは、2つの動詞の連続と見ておく。

3.5 ④目的語を伴わない「トリ+意志的自動詞」

このタイプの「トリ」は「トリよろふ」「トリ付く(四段活用)」「トリ続く(四段活用)」「トリとどこほる」である。このうち「トリよろふ」は語義未詳であるため、ここでは「トリ付く」「トリ続く」「トリとどこほる」に注目する¹³。

(40) 大君の命畏み出で来れば 我のトリ付きて(和努等里都伎互)言ひし子なはも (万葉集・巻 20・4358・物部龍・防人歌)

いや日異に 栄ゆる時に およづれの たはこととかも 白妙に 舍人 装ひて 和東山 御輿立たして (万葉集・巻 3・475・大伴家持)

¹² 上代の「来」に接尾辞的な例があることが井上(1962)で主張されているが、この例の「来」は接尾辞的用法とは考えにくい。

¹³ 「トリよろふ」の例は以下の通り。

大和には 群山あれど トリよろふ(取興呂布) 天の香具山 登り立ち 国見をすれば (万葉集・巻 1・2・舒明天皇)

- (41) 若草の 妻はトリ付き(都麻波等里都吉) 平らけく 我れは斎はむ
(万葉集・巻 20・4398・大伴家持)
- (42) 唐衣裾にトリ付き(須宗尔等里都伎)泣く子らを置きてぞ来のや母なしにして
(万葉集・巻 20・4401・他田舎人大嶋・防人歌)
- (43) 世の中の すべなきものは 年月は 流るるごとし トリ続き(等利都々伎) 追ひ来るも
のは (万葉集・巻 5・804・山上憶良)
- (44) 茅渟壮士 その夜夢に見 トリ続き(取次寸) 追ひ行きければ
(万葉集・巻 9・1809・高橋虫麻呂歌集)
- (45) 衣手にトリとどこほり(取等騰己保里)泣く子にもまされるわれを置きていかにせむ
(万葉集・巻 4・492・舎人吉年)

これらの「トリー」には目的語が存在せず、いずれも「トリー」全体で自動詞として使用されている。「トル」は常に目的語を伴う他動詞であるから、これらの前項「トリ」が自立した動詞として機能しているとは考えにくい。また、目的語が存在しないということは、「トリ」が「自分の領域の外にある対象を、手を介して自分の領域に引き入れる」という「トル」の本来の動作を表していないということである。したがって、このタイプの「トリー」の前項「トリ」は動詞として機能していないと考えられる。

後項となる「付く」「続く」「とどこほる」のうち、「付く」「とどこほる」には(46)～(48)のように単独で自動詞として使用される例がある。また、これらの「トリー」は「我に」の訛りかとされる「我の」(伊藤 1998)、「裾に」、「衣手に」といったニ格補語を伴っているが、ニ格補語を伴う例は「付く」にも存在する。

- (46) 衣手に水渋付くまで(水澁付左右)植ゑし田を引板我が延へまもれる苦し
(万葉集・巻 8・1634)
- (47) 旅とへど真旅になりぬ家の妹が着せし衣に垢付きにかり(阿加都枳尔迦理)
(万葉集・巻 20・4388・占部虫麻呂・防人歌)
- (48) 群鳥の 出で立ちかてに とどこほり(等騰己保里) かへり見しつつ いや遠に 国を来
離れ (万葉集・巻 20・4398・大伴家持)

このことから、「トリ付く」「トリとどこほる」は、前項「トリ」ではなく、後項「付く」「と

どこほる」の統語的特徴に一致していることが分かる。

ただし、二格補語を伴う例はこれらの意志的自動詞の単独使用においては多くない。(40)から(45)に挙げた 6 例のうち 3 例が二格補語を伴う点は、「トリ＋他動詞」に二格補語を伴う例が多いという特徴に類似するため、注目される。

では、意味的特徴に関してはどうかであろうか。「とどこほる」「トリとどこほる」は各 1 例のみであり、比較は難しいが、「トリとどこほる」は人に取りすがる意、「とどこほる」は前に進まない意を表すと考えられ、やや意味的差異があるように見える。しかし、いずれの例も別れの場面における離れがたさを表しており、ある場所から動かない意を表す点では共通している。「トリ付く」は、3 例全てが別れの場面において人に取りすがる動作である。これに対し、単独使用の「付く」は人に付く意を表す例が少なく、東歌に 1 例あるに過ぎない¹⁴。この点から、「付く」と「トリ付く」には若干の意味的差異があると考えられる。しかし、両者はいずれも何らかの接着を表しており、その点では意味的な共通性がある。意味的特徴に関しては、「トリ付く」「トリとどこほる」はいずれも単独用法との間に若干の差異が認められるが、その差は顕著ではなく、基本的な意味は共通していると言えるだろう。

以上のように、「トリ付く」「トリとどこほる」は、統語的にも意味的にも機能の中心は後項動詞にある。前項「トリ」は動詞としての機能を失い、後項動詞に従属していると考えられる。かような「トリー」の前項は、接頭辞であると認められる。

なお、上代には「続く」の単独例が存在しないため、単独使用の「続く」と「トリ続く」の特徴を比較することはできないが、構造的には「トリ付く」「トリつづしろふ」に類似しており、「トリ続く」の前項も接頭辞である可能性が高い。

では、このような接頭辞と考えられる「トリ」はどのような意味を表していたのだろうか。「トリ付く」「トリとどこほる」「トリ続く」はそれぞれ「しがみつく」「ぴったり続く」のように解釈されることから、前項「トリ」が「距離が近く、密接している」あるいは「手でつかめるほどに近い」「手で掴むようにしっかりと」などのニュアンスを表している可能性がある。これが正しければ、「トル」が本来有する「自分の領域に引き入れる」という意味が僅かに残っていると考えることができる。とすれば、かような「トリ」を接頭辞と認めない立場もあるかもしれない。しかしここでは、全体の意味的・統語的特徴が後項動詞

¹⁴ 高き嶺に雲の付くのす我さへに君に付きなな(伎美尔都吉奈那)高嶺と思ひて

(万葉集・巻 14・3514・東歌)

に類似する点、前項が動詞として機能していることが明らかな「～(ヲ)トリ、付く」といった例が見られない点から、動詞としての機能が失われた接頭辞「トリ」が意志的自動詞に付されて成立したものと判断する。かような「トリ」は、意味的に完全には希薄化してはいなくとも、接頭辞と認めてよいと考える。

3.6 まとめ

上代における「トリー」について、前項の接頭辞化や複合動詞化を中心に検討した結果、以下のことが確認できた。

- ・ 目的語を伴う「トリ＋他動詞」には二格補語を伴う例が多く、この傾向は「トリ持つ」「トリ佩く」で顕著である。単独で使用される他動詞「トル」が二格補語を伴う例は少ないことから、二格補語を伴いやすいという特徴は動詞連接「トリー」にのみ備わるものと言える。
- ・ 目的語を伴わない「トリ＋他動詞」のうち、「トリ見る」は「世話をする」「面倒を見る」意、「トリ持つ」は「政事を行う」「とりまとめる」意に固定化している例が見られる。また、「トリ装ふ」にも複合動詞と認められる例がある。
- ・ 目的語を伴わない「トリ＋意志的自動詞」である「トリ付く(四段活用)」「トリとどこほる」「トリ続く(四段活用)」の前項は接頭辞的である。

これらの諸点は、上代の「トリー」に単なる動詞と動詞の連続ではないものが含まれることを示している。中でも、意味の特殊化が起きていると考えられる「トリ持つ」、前項が接頭辞的である「トリ付く」「トリとどこほる」「トリ続く」の存在は注目される。意味の特殊化が起きている「トリー」は石井(2007)の「熟合構造」に、前項が接頭辞的である「トリー」は「派生構造」に相当する複合動詞である。これらの構造は、前項と後項がそれぞれの機能をある程度保ったまま一体化した「複合構造」の複合動詞を基にして成立すると考えられる。したがって、上代に「熟合構造」や「派生構造」と見られる「トリー」が存在するということは、「複合構造」の段階にある「トリー」も少なからず存在していた可能性が高い。「トリー」の複合動詞化は、記紀万葉の時代には既にある程度進んでいたと考えられる。

4. 「トリ」の接頭辞化

4.1 「トリー」の再分析

このように、上代語の「トリー」には前項が接頭辞と認められる例が存在する。では、「トリ」の接頭辞的な用法はどのように成立したのだろうか。

「トリ」の接頭辞化は、自立要素が付属要素になる点で、文法化の一種と位置づけることができる。文法化の一般的なプロセスに「再分析」と「類推」がある(Hopper and Traugott1993)。「トリ」の接頭辞化においても、これら 2 つのプロセスが存在したと考えられる。

再分析は、「トリ+他動詞」においても「トリ+意志的自動詞」においても起こりうるものである。動詞接続の再分析は、「複合動詞化」という形で実現すると考えられる。後項が他動詞であるものは、「[~(ヲ)トリ][他動詞]」から「[~(ヲ)][トリ+他動詞]」という変化である。具体例を挙げれば、「[~(ヲ)トリ][持つ]」から「[~(ヲ)][トリ持つ]」への変化となる。後項が意志的自動詞の場合は、「[~(ヲ)トリ][意志的自動詞]」から「[トリ+意志的自動詞]」という変化である。「トリ付く」を例に挙げれば、「[~(ヲ)トリ][付く]」から「[トリ付く]」への変化となる。ただし、意志的自動詞を後項とする場合、前項は目的語を有するが後項は有さないという項構造の違いがある。再分析が起こるには、この違いをクリアしなければならない。そのための条件として考えられるのが、〈目的語の非表示〉である。何らかの原因で「トリ」の目的語が表示されなくなれば、理論的には意志的自動詞との再分析も起こりうるであろう。すなわち、「[~(ヲ)トリ][付く]」の目的語が表示されない「[φトリ][付く]」という形が成立すれば、「[トリ付く]」への再分析が起こりうる。

しかし、「トリ+非意志的自動詞」において再分析が起きたことを示す痕跡は、少なくとも上代文献には見出されない。「トリ+非意志的自動詞」で再分析が起きたとすれば、同じ意志的自動詞を後項とする「[~(ヲ)トリ][意志的自動詞]」という例が存在する(あるいは、存在していた)はずである。しかし、複合動詞化が確認できる「トリ付く」「トリ続く」「トリとどこほる」といった「トリー」には、前項「トリ」が動詞として機能することが明らかな例は見られない。また、目的語の非表示が許容されるのは、その動詞接続が頻用される場合や、語用論的にその動詞接続の目的語が何であるかが自明である場合に限られると思われる。しかし、何らかの物体を手にする動作を表す「トル」と、手を使わずに行われる動作を表す「付く」「続く」「とどこほる」の連続した使用が、目的語の非表示が許容されるほど頻繁に起こったとは考えにくい。以上より、接頭辞化につながる再分析が「トリ

＋意志的自動詞」で起きた可能性は積極的には認められない。とすれば、再分析が「トリ＋他動詞」において起きた可能性を第一に考える必要があろう。

4.2 「トリ持つ」を契機とした接頭辞化

では、「トリ＋他動詞」における再分析はどのように生じたのだろうか。また、「トリ＋他動詞」から再分析が起きたとすれば、接頭辞化に深く関与したのはどの「トリー」なのだろうか。再分析が起こるには、その動詞の連続が慣用的に使用される必要がある。また、同じ後項を有する「トリー」に、前項と後項が別個の動詞として機能する「[～(ヲ)トリ][他動詞]」というタイプと、複合動詞化した「[～(ヲ)][トリ＋他動詞]」というタイプが共存している(あるいは、していた)はずである。さらに、前項が接頭辞的である「トリー」には、〈目的語が存在しない場合がある〉〈二格補語を伴いやすい〉という特徴がある。したがって、接頭辞化の契機となった「トリー」は、これらの特徴を備えていた特定の「トリ＋他動詞」である可能性が高い。

上代において、これらの特徴を備える「トリー」は「トリ持つ」のみである。「トリ持つ」は上代文献に最も多く出現する「トリー」である。対象に対する「トル(領域外のものを手を介して領域内に引き入れる)」という動作の後にはその対象を「持つ」状態に至ることから、「～をトリ、持つ」と連続的に使用されることも少なくなかったと推測される。実際に、「トリ」と「持つ」のいずれもが動詞として機能していると考えられる「トリ持つ」の例も存在する。(49)では、「トリ」が「捕まえる」という動作、「持つ」が「持ってくる」という動作を表している。

(49) 韓国の 虎といふ神を 生け捕りに 八つトリ持ち来(八頭取持来)(万葉集・巻16・3885)

これに対し、「トリ持つ」には意味変化が進行した熟合的な用法(32)～(34)も認められる。かような「トリ持つ」は、前項も後項も動詞としての機能を有している(49)のような「トリ持つ」が複合動詞となり、さらにその複合動詞「トリ持つ」に比喻などによる用法変化が起きた結果、成立したと考えられる。

熟合的な「トリ持つ」には、目的語が抽象化した例や目的語を伴わない例が見られる。抽象的な目的語を伴う「トリー」は、上代に確認できる限り「トリ持つ」のみである。かような「トリ持つ」においては、前項「トリ」の本来的な意味が希薄化している。意味的

に希薄化した「トリ」が、何らかの要因によって接辞的な要素として切り出されたとすれば、「トリ」の接頭辞的用法の成立に説明を与えることができるのではないだろうか。

なお、目的語の存在しない例は「トリ見る」や「トリ装ふ」にも存在する。しかし、これらの「トリー」の影響で接頭辞化が進行したと想定する場合、接頭辞的な「トリ」が二格補語を伴いやすいことを説明できない。また、二格補語を伴いやすいという特徴は「トリ佩く」や「トリ添ふ」にも存するが、これらの「トリー」には目的語が存在しない例が無いこと、接辞化の契機になったと積極的に考えるべき特徴が見出されないことから、接頭辞化の契機になったとは考えにくい。以上より、「トリ」の接頭辞化には「トリ持つ」が関与したと考えられる。

4.3 希薄化した「トリ」の意味

では、希薄化した「トリ」はどのような意味を有していたのだろうか。これについては、接頭辞的な「トリ」を前項とする「トリ見る」「トリ付く」といった「トリー」の意味から推測するほかない。上代の「トリ見る」は「看病する」「世話をする」「面倒を見る」といった意味と考えられる。「トリ見る」のかような意味は、「対象を自分の領域(自分の支配下)に置いてしっかりと見る」あるいは「対象を責任をもって見る」と言い換えることができる。また、「トリ付く」は「しがみつく」「すがりつく」といった意で解釈できる。この意は、「相手が自分の領域から離れないようにしっかりと付く」といったような言い換えが可能である。すなわち、これらの「トリー」はいずれも動作対象を自分の領域下に置くことを含意していると考えられる。この意は、「トル」の「自分の領域の外にある対象を自分の領域に引き入れる」という意味の形式化と解することができる。

「[~(ヲ)トリ][持つ]」が再分析によって複合動詞「[~(ヲ)][トリ持つ]」になった後には、例えば「しっかりと持つ」「責任をもって持つ」といったような、単なる「持つ」こと以上の意味を有していたはずである。この段階では、対象物を実際に「手にする」意が残っていた。そのような「トリ持つ」が、比喻によって実際の「手にする」動作を表さない場合にも使用された結果、「事」「政事」などの抽象的な目的語を伴う用法や、目的語を伴わずに用いられる用法が出現したと考えられる。「[抽象的な目的語/φ][トリ持つ]」は、「トリ持つ」が本来有していた意味のうち、「手にする」という部分が希薄化している。しかし、「トル」の意味のうち「対象物を自分の領域に引き入れる」意は、形式化して「自分の領域の中で」「責任をもって」といったような形で残っていたと考えられる。「政事を行う」「と

りまとめる」意の熟合的な「トリ持つ」も、「政事に関する事柄を自分の領域で責任をもって処理する」といった意味の延長として理解することができる。

「自分の領域に置いてしっかり持つ」「責任をもって持つ」といった意味を有する「トリ持つ」の前項「トリ」が、「自分の領域でしっかりと」「責任をもって」といった意味を有する接頭辞的要素として分析され、類推によって他の動詞に付されて成立したのが「トリ見る」「トリ付く」といった「トリー」であると考えられる。実際の「手にする」意が薄れた「トリ持つ」には目的語を有さない用法も存在したのであるから、「付く」などの意志的自動詞に「トリ」を付すことも許容されたはずである。

さて、接頭辞「トリ」には「腰にトリ佩き」のような二格補語を伴うタイプの例もある。この用法の成立も、やはり「トリ持つ」が契機であろう。「トリ持つ」には、実際に手にする意が失われた「[抽象的な目的語／ ϕ][トリ持つ]」も存在していたが、同時に具体的な物体を手にする動作を表すためにも使用された。そのような用法の場合、「政事を行う」「とりまとめる」といった意味ではなく、実際に「手にする」という動作であることを示すために、「手に」が付されやすかったと考えることができる。そして、そのような「手にトリ持つ」からの類推によって、「トリ佩く」「トリ添ふ」などの「トリー」にも二格補語を伴う例が多く出現すると考えて矛盾は無い¹⁵。「～ヲ～ニトリー」は韻文における技巧的な表現と考えられ、「トリ見る」「トリ付く」などの「[抽象的な目的語／ ϕ][トリ持つ]」からの類推で成立した「トリー」と用法上の衝突を起こすことは無かったと思われる。

4.4 接頭辞化のプロセス

以上より、「トリ」の接頭辞的用法の成立には「トリ持つ」が大きく関与したのではないかと考えられる。「トリ持つ」から接辞化が進んだとすれば、次のようなプロセスを経たと推測される。

(50) 「トリ」の接頭辞化のプロセス

(a) 「[～(ヲ)トリ][持つ]」(2つの動詞の連続の段階)

↓ 慣用的な使用による再分析

¹⁵ なお、「巻き持つ」という動詞接続も「手に」を伴う例が多い。しかし、単独使用の「巻く」も「手に」を伴いやすいことから、「巻き持つ」のこの特徴は「巻く」の特徴を保存しているためと言える。

(b) 「[～(ヲ)][トリ持つ]」(複合動詞の段階)

↓ 比喩などにより「手にする」意が希薄化した用法が成立

(c) 「[～(ヲ)手ニ][トリ持つ]」／「[抽象的な目的語／ ϕ][トリ持つ]」

↓ 「トリ」を接頭辞として解釈

(d) 「[接頭辞トリ＋持つ]」(前項が接頭辞化した段階)

↓ 他の意志的な動詞への類推

(e) 「[～(ヲ)～ニ][トリー]」(「トリ佩く」「トリ懸く」など)

「[抽象的な目的語／ ϕ][トリー]」(「トリ見る」「トリ付く」など)

↓ 既存の「トリー」への類推

(f) 前項が「手にする」意を表す他の「トリー」の前項を接頭辞として再解釈

↓ 非意志的な動詞への類推

(g) 非意志的な動詞への接頭辞「トリ」の付加

(d)(e)間の類推は、「トリー」の後項として定着していなかった動詞や、それまで「トリ」と連続することのなかった動詞に「トリ」が付されるものである。これに対し(e)(f)間の類推は、すでに「複合構造」(石井 2007)の複合動詞として定着していた「トリー」の前項「トリ」を接頭辞的要素として再解釈するものである。「トリ持つ」の前項を接頭辞と解釈することが定着していれば、(e)と(f)はいずれも起こりうる。したがって、(e)と(f)の段階が同時並行的に起こる可能性や、(f)が(e)に先行する可能性もある。しかし、(f)の段階で成立したと積極的に認められる「トリー」は上代には見られない。

上代にはプロセスの(e)の段階までは現象として確認できるが、「言ふ」「思ふ」といった思考や伝達に関わる他動詞など、意志的な動詞であっても「トリ」が前接しないものがある。このことは、(e)の段階においても「トリー」の後項となる動詞がある程度限定されていたことを示すと思われる。また、上代の「トリ」が非意志的自動詞に前接する例も確認できない。このことから、接頭辞化の(g)の段階は上代にはほとんど発達していなかったと考えられる。「トリ」の形式化した意味がさらに希薄化すれば、(g)のように意志的でない動詞に付されるようになると考えられる。しかし、次章で述べるように「トリ」は中古以降も非意志的自動詞に付される例は少ない。中古に至っても、(g)の段階は盛んには行われなかったと思われる。

5. おわりに

以上、上代語における「トリー」の様相を確認した。ニ格補語を伴う「トリ＋他動詞」、「世話をする」「面倒を見る」意の「トリ見る」、「政事を行う」「とりまとめる」意の「トリ持つ」、目的語を伴わない「トリ＋意志的自動詞」など、複合動詞と認められる「トリー」が上代から複数存在していることが確認された。「トリー」に関しては、複合動詞が上代語から存在していたことは明らかである。なお、「政事を行う」「とりまとめる」意の「トリ持つ」の存在や「トリ」に接頭辞的用法が存することなど、本章で述べた事実の一部は『時代別国語大辞典 上代編』などにおいて既に指摘されている。しかし、これらの事実を明示し、さらに動詞連接史の一環として位置付けた本章の意義は大きいと考える。

ただし、動詞連接史の構築のためには、上代語の「トリー」の検討だけでは不十分である。「トリー」が中古以降どのように変遷していくのかという歴史変化の問題、上代語には「トリ」以外にどのような動詞連用形接頭辞が存在していたのかという共時的な問題についても、検討する必要がある。前者については次章で、後者については第3章で扱う。

第2章 中古日本語における動詞連接「トリー」の展開

1. はじめに

前章では、上代における動詞連接「トリー」の様相を確認した。その結果、「トリ佩く」「トリ添ふ」といった前項が接頭辞と考えられる「トリ＋他動詞」、「トリ付く(四段活用)」「トリとどこほる」「トリ続く(四段活用)」といった前項が接頭辞であると認められる「トリ＋意志的自動詞」、「政事を行う」「とりまとめる」といった意の熟合的な「トリ持つ」などが確認できた。これらの「トリー」はいずれも複合動詞と認められる。上代から複合動詞が存在していたことを示す事実が複数確認されたことは、古代語における複合動詞の存否を検討する上で大きな意味を持つ。

動詞連接史を描くにあたって注目されるのは、このような「トリー」が中古においてどのような振る舞いを見せるのかである。中古における「トリー」を検討した先行研究としては関(1977、1993)があるが、いずれも接頭辞的な「トリ」の意味的機能についての考察を主としており、前項が接頭辞と考えられる「トリー」がどの程度存在するのか、複合動詞と認められる「トリー」が存在するのか、上代の「トリー」とどのように異なるのか、といった点についてはほとんど検討されていない。

まとまった上代語資料である『万葉集』の最終歌が詠まれた天平宝字3年(759年)から、中古の最初期の和文資料である『竹取物語』が成立したとされる9世紀後半には、100年以上の開きがある。さらに、『宇津保物語』や『源氏物語』といった和文資料が豊富に出現する10世紀から11世紀では、『万葉集』との時代差は200年から300年ほどになる。上代における「トリー」が、複合動詞化や前項の接頭辞化の只中にあったとすれば、上代と中古の間に少なからず様相の変化がある可能性が高い。中古の「トリー」についての検討は、上代の様相を動詞連接史上に位置づけるためにも重要である。

本章では、中古における「トリー」の様相を、複合動詞化や前項の接頭辞化といった点に注目して記述する。さらに、上代の様相と比較することによって、上代から中古にかけての「トリー」変遷も明らかにする。

2. 中古における「トル」

「トリー」について考察する前提として、前項となる動詞「トル」の中古における特徴

を確認しておこう。

「トル」は(1)(2)のように目的語を伴って「手にする」あるいは「手に入れる」意で使われる。目的語は「折敷」「扇」のような具象物から「官位」「名」といった抽象物まで幅広い。文脈上明らかであれば、目的語が表示されずに使用されることもある。「トル」は基本的な動詞であり、多様な意味で使われるが、他動詞としての用法から逸脱することは稀である。(3)のように二格のみを伴う用法もあるが、これは用法の変化が起きているものとして、「トル」とは別に扱う。現代語の「～にとって」に通じる用法と考えられる。

- (1) 参り物なるべし、折敷手づからとりて、(源氏物語・玉鬘)
(2) 罪なくて罪に当たり、官位をとられ、家を離れ、境を去りて、(源氏物語・明石)
(3) げに、この方にとりて思たまふるには、(源氏物語・夕霧)

以上より、中古の「トル」は目的語を有する他動詞としての使用が典型的であると分かる。「トル」の特徴には、上代と中古で目立った差は見られない。したがって、上代と同様、前項「トリ」が動詞としての機能を有しているかを判定する際には目的語の有無が手掛かりになると考えられる。

3. 中古における「トリー」

3.1 概要

中古の「トリー」は、上代と比べて異なり語数・延べ語数ともに大幅に増加する。中古には異なり語数で 103 種類確認された。中古に確認される「トリー」を以下に示す。なお、中古の 3 作品以上で用いられるものには下線を付した。

(4) 中古のトリー

トリ上ぐ、トリ当たる、トリ扱ふ、トリ集む、トリ合はす、トリ敢ふ、トリ誤つ、トリ誤る、トリ争ふ、トリ出だす、トリ出づ、トリ入る(下二段活用)、トリ得、トリ動かす、トリ失ふ、トリ埋み被く、トリ奪ふ、トリ置く、トリ行ふ、トリ落とす、トリおはさうず、トリ覆ふ、トリ下ろす、トリ掛かる、トリ懸く(下二段活用)、トリ隠す、トリ重ぬ、トリ被く、トリ交はす、トリ替ふ、トリ飼ふ、トリ返す、トリ聞こゆ、トリ聞こえさす、トリ着る、トリ具す、トリ加ふ、トリくびる、トリ食ふ、トリ込む、トリ籠む、トリ殺す、トリ探す、

トリ放く、トリ下ぐ、トリしたたむ、トリ占む、トリ据う、トリ捨つ、トリ添ふ(下二段活用)、トリ初む、トリ背く、トリ違ふ、トリ立つ(下二段活用)、トリ違ふ、トリ散らす、トリ使ふ、トリ付く(四段活用)、トリ付く(下二段活用)、トリ次ぐ、トリ作る、トリ繕ふ、トリ伝ふ、トリ続く(四段活用)、トリ続く(下二段活用)、トリ繋ぐ、トリ積む、トリとむ、トリなす、トリ直す、トリ並ぶ、トリのく、トリ始む、トリ果つ、トリ外す、トリ放つ、トリはやす、トリ払ふ、トリ広ぐ、トリ広む、トリ触る、トリ設く、トリ申す、トリ詣で来、トリ賄ふ、トリ紛らはす、トリまさぐる、トリ申す、トリ混ず、トリ乱る(四段活用)、トリ見る、トリ向かふ、トリ持たり、トリ持つ、トリ遣る、トリ寄す、トリ寄る、トリ分かつ、トリ分く(四段活用)、トリ忘る、トリ渡す、トリ率る、トリ犯す、トリ納む

異なり語数には上代と比べて大きな差があるものの、自動詞を後項とするものは少なく、他動詞を後項とするものが多い点は上代と同様である。3 作品以上に使用される「トリー」の多さは注目される。複数の作品に使用される「トリー」は、前項と後項がそれぞれに動詞として機能する偶発的な動詞の連続や、個人的な造語ではなく、社会的に定着していた可能性が高い。まずこの点から、中古には「トリ」を前項とする動詞接続が広く定着していたと推測される。

考察に際しては、前章と同様に後項動詞の自他と目的語の有無によって「トリー」を分類する。上代の「トリー」は他動詞を後項とするものと意志的自動詞を後項とするもののみであり、非意志的自動詞を後項とする例は確認できなかったが、中古には少数ながら出現する。ただし、「トリ＋非意志的自動詞」で目的語を伴う例はほとんど見られない。したがって、中古の「トリー」は以下の 5 タイプとなる。

(5) 中古の「トリー」の分類

- ①目的語を伴う「トリ＋他動詞」
- ②目的語を伴わない「トリ＋他動詞」
- ③目的語を伴う「トリ＋意志的自動詞」
- ④目的語を伴わない「トリ＋意志的自動詞」
- ⑤目的語を伴わない「トリ＋非意志的自動詞」

以下、これら⑤タイプの「トリー」の中古における様相について、接頭辞化、複合動詞化

の観点から検討していく。

3.2 ①目的語を伴う「トリ+他動詞」

中古の「トリー」の大部分を占めるのがこのタイプである。目的語が存在するため、前項「トリ」が接頭辞化しているのかを統語的特徴を手掛かりとして判定することは難しい。目的語の性質や文脈によって判定する必要がある。以下、具体例として「トリ寄す」「トリ隠す」「トリ重ぬ」を取り上げる。

「トリ寄す」は中古に多用された「トリー」の一つであり、10 作品に計 55 例使用されている。動作対象を近くに寄せる意で使用されるが、前項「トリ」がその対象物を手にする動作を表しているのか、あるいは動作を表さず接頭辞的であるのか、判断は難しい。

(6) 夏虫、いとをかしうらうたげ也。火ちかうトリ寄せて、物語など見るに、草子のうへなどにとびありく、いとをかし。(枕草子・虫は)

(7) いとど心とまりはてて、なかなか思ほゆれば、琵琶をトリ寄せて、いとなつかしき音に想夫恋を弾きたまふ。(源氏物語・横笛)

(6)(7)の前項が「手にする」意を有しているのであれば、複合動詞ではない単なる動詞の連続か、石井(2007)の「複合構造」の複合動詞のいずれかであり、「トリ」が接頭辞であるならば「派生構造」の複合動詞となる。これらのいずれであるかを判定するに足る根拠は得られないため、現時点では保留とせざるを得ない。

「トリ隠す」は 7 作品に計 26 例見られる。何らかの物や事柄を隠す意を表すが、「隠す」と「トリ隠す」には顕著な意味の違いは認められない。(8)は前項「トリ」に動作性を認める解釈と、単に「隠す」意で「トリ」は接頭辞であるとする解釈の両方が可能である。しかし、(9)は「不都合な事柄を隠す」という文脈であり、目的語が抽象的であることから、「トリ」が具体的な「手にする」動作を表しているとは考えにくい。かような「トリー」の前項は接頭辞と見るべきであろう。

(8) その人、母なきおのこどのかたち・心すぐれたるをもちて、かぎりなくかなしくし給、君もふたつなくかへりみ給人を、ほろぼさんと思心ふかくて、おやの家のたからをトリ隠して、かれがぬすみたるといひ、(宇津保物語・ふきあげの下)

- (9) 「(略)かたはならむこと」は、トリ隠して、さることなんありけると、おほかたの物語の
ついでに、僧都の言ひしこと語れ」とのたまはす。(源氏物語・手習)

「トリ重ぬ」は 4 作品に 16 例使用される。(10)(11)のように抽象的な目的語を伴う例が多いが、これは「衣」「織物」「夜」「年月」など衣類や時間を重ねる意を表す用法が多くを占める他動詞「重ぬ」には見られない特徴である。意味はいずれも「重ねる」ことであるが、「重ぬ」と「トリ重ぬ」は目的語の傾向に差異があるといえる。

- (10) 秋のころほひなれば、もののあはれトリ重ねたる心地して、その日とある暁に、秋風
涼しくて虫の音もとりあへぬに、(源氏物語・松風)
- (11) おのづからものゝ心知りたる人はあはれに堪えがたく、世の常なきことをさへトリ重
ね思続けて、女房の車を見て思ひけり、(栄花物語・巻二十九)

「トリ重ぬ」は抽象的な目的語をとる例が多いことから、前項「トリ」が具体物に対する「手にする」動作を表していると解釈するのは難しい。「トル」にも抽象的な名詞を取る例があるが、かような例は、少なくとも『源氏物語』においては「つかさ位をトうれ」(明石)のような「奪う」意か、「まめひとの名をトリて」(夕霧)のような評判となる意の「名をトル」に限られる。したがって、(10)(11)の「トリ」が抽象的な目的語をとる動詞として機能しているとは考えにくい。以上より、「トリ」は接頭辞と考えられる。

このように、中古の「トリ＋他動詞」には抽象的な目的語をとるものが目立つ。かような「トリ＋他動詞」は、「トリ」がその目的語に対する具体的な「手にする」動作を表しているとは考えにくいことから、「トリ」を接頭辞と捉えるのが妥当である。

目的語を有する「トリ＋他動詞」は、本節で取り上げたものの他にも多く存在する。先にも述べたように、「トリ＋他動詞」が具体的な目的語を有する場合、個別の例を検討するのみでは前項「トリ」が動詞的か接頭辞的かの判断が難しい。しかし、「トリ」を前項とする動詞接続が共時的に数多く存在するという状況と併せて考えれば、判断が難しい「トリー」の中にも前項が接頭辞であるものが多く含まれる可能性が高いといえるだろう。

また、これらの「トリー」が中古において複数の作品で使用されることも注目される。1 作品や 2 作品に散発的に出現する「トリー」であれば、社会的に定着していない臨時的な動詞の連続である可能性を考慮すべきであるが、複数の作品にまとまって出現する「トリ

一」は、複合動詞として定着していたと考えられる。

3.3 ②目的語を伴わない「トリ+他動詞」

このタイプの「トリー」は上代には少なく、「トリ見る」「トリ持つ」「トリ装う」に少数見られるのみであったが、中古には増加する。「トル」は本来的には目的語を有する他動詞であるため、目的語を有さない「トリ+他動詞」が複数認められるという事実は注目すべきものである。ここでは「トリ申す」「トリ外す」「トリ集む」「トリ立つ」「トリ分く」「トリ持つ」「トリなす」を取り上げる。

「トリ申す」は抽象的な目的語を有する(12)のような例もあるが、目的語を伴わず引用のト格を伴う(13)のような例が存在する。ト格を伴う点は「申す」の統語的特徴に一致するが、他動詞「トル」にはト格を伴う例は見られない。前項「トリ」は動詞として機能しておらず、「申す」に付属している接頭辞と考えられる。

(12) 「明石の浦より、前の守新発意の、御舟よそひて参れる也。源少納言さぶらひたまはば、対面して事の心トリ申さん」と言ふ。(源氏物語・明石)

(13) 上には、「身の宿世のおもひしられ侍りて、きこえさせず」とトリ申させ給へ。(蜻蛉日記・下)

「トリ外す」は(14)(15)のように目的語を伴わず「失敗する」「うっかりする」といった意味で使用される。前項「トリ」は接頭辞と考えられる。単独の「外す」は「外す」「機会を逃す」といった意味で使用され、「トリ外す」とは用法が異なることから、「外す」と「トリ外す」には意味的な差異が存すると言える。

(14) 上も大臣も、かくつと添ひおはすれば、おのづからトリ外して、見たてまつりたまふやうもあらむにあぢきなし、と思して、(源氏物語・柏木)

(15) 北の方、「何ばかりの徳か我は見侍る。おとゞは父なればせしにこそあめれ。トリ外して落窪といひたらん、何かひがみたらん」といへば、(落窪物語・巻四)

「トリ集む」は(16)のように具象物を集める意で使用される例もあるが、明確な目的語を有さない(17)(18)のような例が目立つ。これに対し、他動詞「集む」は物体や人物を実際に

集める意を表す。このことから、「トリ集む」は「集む」に比べて表す動作が抽象化していると分かる。抽象化した例であっても、「集める」意が完全に失われてはいないと思われるが、「手にする」意が希薄になっていることは明らかである。また、(18)は「トリ集めて」が副詞的に「あはれなり」を修飾していると捉えることもできる。

- (16) この御文をトリ集めて賜せたりしかば、(源氏物語・橋姫)
- (17) 宰相中将、をさをさけはひ劣らずよそほしくて、容貌など、ただ今のいみじき盛りに
ねびゆきて、トリ集めめでたき人の御ありさまなり。(源氏物語・藤裏葉)
- (18) 山の駅は、あはれなりしことを聞きおきたりしに、又もあはれなることのありしかば、
なほトリ集めてあはれなり。(枕草子・駅は)

意味的に抽象化した「トリ集む」においては、前項「トリ」が実質的な「手にする」動作を表しているとは考えにくい。「トリ」は接頭辞と見てよいだろう。

「トリ立つ」は目的語を伴う他動詞としての用法(19)も存するが、(20)のように「トリ立てて」形で目的語を伴わず副詞的に使用される例や、(21)のように「トリ立てたる」形で名詞句を修飾する例が見られる。本来は(19)のように動詞として機能していたものが、抽象化していったものと思われる。前項「トリ」は「手にする」という動作を表しておらず、希薄化して後項「立つ」と一体化している。なお、副詞的用法は(22)のように「立てて」が単独で使用される場合にも見られる。

- (19) からうじて思ひ起こして、弓矢をトリ立てんとすれども、手に力もなくなりて、萎え
かゝりたり。(竹取物語)
- (20) 何ごとの儀式をももてなしたまひけれど、トリ立ててはかばかり後見しなければ、
事ある時は、なほ抛りどころなく心ぼそげなり。(源氏物語・桐壺)
- (21) 「(略)トリ立てたる御後見ものしたまはざらむは、なほ心細きわざになむはべるべき。」
と聞こゆ。(源氏物語・若菜上)
- (22) すべて女は、立てて好めること設けてしみぬるは、さまよからぬことなり。
(源氏物語・玉鬘)

「トリ分く」は(23)のように「他と区別する」意の動詞として使用される例もあるが、動

詞や形容詞に前接して副詞的に使用される(24)(25)のような例が多い。ただし、副詞的用法に「トリ分き」「トリ分きて」と揺れがあることから、この用法としては未だ形式が固定してはいなかったようである。なお、「トリ」が前接しない「分きて」にも副詞的用法が見られ、(26)のように主に韻文に使用される。用例数は「分きて」に比べ「トリ分きて」が圧倒的である¹。

- (23) されど、(阿部注：紫上を)かくトリ分きたまへる御おぼえのほどは、いと頼もしげなりかし。(源氏物語・紅葉賀)
- (24) 榊、臨時の祭の御神楽の折など、いとをかし。世に木どもこそあれ、神の御前のものと生ひはじめけむも、トリ分きてをかし(枕草子・花の木ならぬは)
- (25) 御はてにも、誦経などトリ分きせさせたまふ。(源氏物語・横笛)
- (26) 分きてこの暮こそ袖は露けけれもの思ふ秋はあまたへぬれど(源氏物語・葵)

「立てて」と「トリ立てて」、「分きて」と「トリ分きて」のように、「トリ」が付されるものと付されないものの両方に副詞的用法が存する点は興味深い。どのようなプロセスを経て両形式が併存するに至ったのかについては現時点では明らかでないが、いずれにせよ、副詞的用法において前項「トリ」が意味的に希薄化していることは明らかである。

上代から意味が特殊化した熟合的な例が確認された「トリ持つ」は、引き続き中古にも使用される。上代には「トリー」全体の3分の1近くを占める用例があったものの、中古には比較的少ない。上代と同様「手にする」意での使用が主だが、『源氏物語』や『浜松中納言物語』には熟合的な例が確認できる。(27)は抽象的な目的語を有し、(28)は目的語が存在しない。いずれも「引き受ける」「世話する」と解釈される例であり、上代における「政事を行う」「とりまとめる」意の「トリ持つ」と連続する用法である。また、(29)のように解釈が容易でない例も存在するが、このような例の存在からは「トリ持つ」の意味が拡大していることが窺える²。

¹ 動詞としての用法と副詞的用法の境界が明確ではないため、用例数を正確に示すのは難しい。試みに新日本古典文学大系『源氏物語索引』(岩波書店)に挙げられる両者の用例数を確認したところ、副詞「わきて」が6例であるのに対し、副詞「とりわきて」は46例であった。

² 日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)では、当該部分は「宮もあいにくに身を入れておせきたてになられるし」と訳されている。

(27) 宰相の君は、まして、よろづをトリ持ちて、あはれに営み仕うまつりたまふ。

(源氏物語・藤裏葉)

(28) かの殿は、かくトリ持ちて何やかやと思して、残りの人をはぐくませたまひても、なほ、言ふかひなきことを忘れがたく思す。

(源氏物語・蜻蛉)

(29) 人々しくもてなさばやと、あやしきまでもてあつかはるるに、宮もあやにくにトリ持ちて責めたまひしかば、

(源氏物語・総角)

中古における熟合的な「トリ持つ」の存在から、上代の「トリー」に中古にまで残存するものがあることが確認される。

「トリなす」も、「トリ持つ」と同様に意味の特殊化が見られる。単独の「なす」は(30)のように「～を～の状態にする」「～を～に変える」といった意味を表す。これに対し「トリなす」は、「解釈する」「勘繰る」と解釈されるように、「実際とは違うように捉える」意で使用されることが多い。(31)は「薄情と考える」、(32)は「作り事めいていると考える」意である。いずれも、「実際はそうではない」という含みであろう。「トル」と「なす」を合成するだけでは、この意味は生じない。

(30) 今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを

(源氏物語・桐壺)

(31) 「なごりなくいかかは。心浅くもトリなしたまふかな。心長き人だにあらば、見はてたまひなむ物を。命こそはかなけれ」とて、

(源氏物語・葵)

(32) 「など帝の皇子ならんからに、見ん人さへかたほならずものほめがちなる」と、作りごとめきてトリなす人ものしたまひければなん。

(源氏物語・夕顔)

なお、中古にはいわゆる補助動詞的な「ナス」を後項とする動詞連接(以下、「一ナス」)が数多く確認される。そのため、「トリなす」においては「一ナス」との関連を考えなければならない。「一ナス」は(33)のように二格を前接することが多いが、これは後項動詞「ナス」の特徴である³。

³ 「一ナス」の特徴は青木(2010)に詳しい。

- (33) 「扇を取られてからきめを見る」と、うちおほどけたる声に言ひナシて、寄りゐたまへり。
(源氏物語・花宴)

(33)で注目されるのは、動作の中心が前項「言ふ」にあり、後項「ナス」は二格とともに「言ふ」という動作の在り方を限定しているに過ぎない点である。すなわち「一ナス」においては、意味的な中心部は前項にある。そのため、「トリなす」がこの類であるならば、前項「トリ」が意味的な中心部として「考える」「理解する」といった意味を表していなければならない。(34)に挙げるように、現代語にはその意味で使用される「トル」が存在する。

- (34) 決して悪い意味にトラないで戴きたいのですが、コンビニエンスストアや書店・ファーストフード店^{ママ}ナド、時給が安く交通費も出ない所で働いている方は、もっと時給が高い所で働こうと思わないですか？

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1121371621)

かような「トル」も、「考える」「理解する」意を「相手の言うことを自分の頭に取り入れる」意と考えれば、本来の意味からの派生的な用法と見ることもできる。しかし、「トリなす」が豊富に出現する『源氏物語』には、「トル」が「考える」「理解する」意で使用される例は確認できない。また、筆者が調査した限りでは、他の中古和文作品においてもこのような意で「トル」が使用されている例は見られない。従って「トリなす」は、他の「一ナス」のような前項が意味的な中心を担う構造ではない可能性が高い。「トリなす」の意味的な中心が後項にあるのか、あるいは意味を構成要素に分担できない「熟合構造」(石井2007)であるのかは定かではないが、現時点では後項が補助動詞的な「一ナス」とは別に扱っておくべき動詞連接であろう。

3.4 ③目的語を伴う「トリ+意志的自動詞」

このタイプの「トリー」は、前項「トリ」が動作対象を有する動作、後項動詞がそれに続く動作を表すと解釈されやすい。上代には「～を取って、来る」意の「トリ来」のみが確認された。中古に至っても少ないが、「トリ出づ」「トリ続く」など注目される例がある。

「トリ出づ」は現代語の「取り出す」に相当する意味で使用されている。14 作品に 151 例確認され、多用された「トリー」であることが分かる。

(35) 墨染ならぬ御火桶、物の奥なるトリ出でて、塵かき払ひなどするにつけても、
(源氏物語・椎本)

(36) 久しう手ふれたまはぬ琴を袋よりトリ出でたまひて、はかなく掻き鳴らしたまへる御
さまを、
(源氏物語・明石)

前項「トリ」は他動詞、後項「出づ」は主に自動詞として使用されることから、前項と後項の動作主体が異なる「(動作主が)火桶/琴を取り、(火桶/琴が)出る」という解釈も成り立ちうる。百留(2003b)は、この種の「一出づ」は由本(1996)の「主語の義務的同定」に違反するとし、このような構文が許容された事実を、古代語に複合動詞が存在しなかった証拠とする。百留(2003b)は次の例を挙げ、前項「おこし」の主体と後項「出づ」の主体は異なると述べる。

(37) 火桶ひきよせたるに、火のおほきにて、つゆ黒みたる所もなくめでたきを、こまかな
る灰のなかよりおこし出でたるこそ、いみじうをかしけれ。
(枕草子・節分違などして)

この例を見る限りでは、前項と後項の主体が別であるとする解釈も可能かもしれない。しかし、「トリ出づ」にはそのような解釈を許さない例が存在する。(36)では「トリ出づ」にいわゆる尊敬の補助動詞「たまふ」が後接していることから、「トリ出づ」は全体で光源氏の「取り出す」という動作を表していることが分かる。同様の、前項と後項の主体が同一と考えられる例は、「ウチ出づ」にも確認できる。

(38) 昔の御事は、年ごろかく朝夕に見たてまつり馴れ、心隔つる隈なく思ひきこゆる君たちにも、一言ウチ出できこゆるついでなく、忍びこめたりけれど、(源氏物語・椎本)

(38)は、いわゆる謙譲の補助動詞「きこゆ」が「ウチ出づ」に続く例である。「ウチ出できこゆ」は「(姫君達に)申し上げる」意で使用されている。

以上より、「トリ出づ」の後項「出づ」は「出現する」という非意志的な動きを表してはいないことが分かる。「トリ出づ」は「取り出す」意の他動詞として機能しており、後項「出

づ」もその一部を成しているといえる。また、「トリ出づ」は複数の作品で使用され、用例数も多いことから、個人の特徴的な言い回しではなく、表現方法としてはごく一般的なものであったと思われる。複合動詞として定着していたことは明らかである。

自動詞用法を基本とする「出づ」が動詞連接後項になった際に他動詞的に機能するのは、興味深い現象である。「一出づ」については百留(2003b)のほか関(1977)にも考察があり、「出づ」の成立が「出だす」よりも早かったこと、「一出づ」が時代とともに「一出だす」に変化していくことなどが指摘されている。「トリー」にも「トリ出だす」の例があるが、「トリ出づ」151例に対して「トリ出だす」は5例であり、用例数はきわめて少ない⁴。しかし、現代語で用いられるのは「トリ出だす」の変化形である「トリ出す」であり、中世以降のどこかの時点で交替があったと考えられる。関は「出づ」から「出だす」への交替を、複合動詞全般における構成要素の間の意味関係の変化の反映とする(関 1977,p.160)。「出す」から「出だす」への変化は、「トリー」や「ウチー」にとどまらない、動詞連接全般に関わる問題といえよう。同様の現象が「出づ」以外の動詞でも見られるのかも注目される。

「トリ続く」は上代には(39)のように目的語を伴わずに使用され、前項「トリ」は接頭辞と判断された。

- (39) 世の中の すべなきものは 年月は 流るるごとし トリ続き(等利都々伎) 追ひ来るものは
(万葉集・巻5・804・山上憶良)

これに対し中古では、目的語となる名詞句を伴って使用される(40)(41)のような例が多い。その場合、「禄」「折櫃物」「折敷」「御台」などを目的語とし、「手にして後に続く」意を表す例が目立つ。

- (40) 宮の亮をはじめて、さるべき上人ども、禄トリ続きて、童べに賜ふ。
(源氏物語・胡蝶)
- (41) 籠物四十枝、折櫃物四十、中納言をはじめたてまつりて、さるべきかぎり、トリ続きたまへり。
(源氏物語・若菜上)

⁴ 男の朝廷に仕うまつり、はかばかしき世のかためとなるべきも、まことの器ものとなるべきをトリ出ださむにはかたかるべしかし。
(源氏物語・帚木)

(40)(41)は前項トリが「手にする」意を、後項「続く」が「後続く」意を表していると考えられる。複合動詞ではない単なる動詞の連続の例であり、上代には見られなかった用法である。

3.5 ④目的語を伴わない「トリ+意志的自動詞」

このタイプは、上代には「トリ付く(四段活用)」「トリ続く(四段活用)」「トリとどこほる」の3種が見られた。中古に至っても少ないが、「トリ付く」「トリ続く」は引き続き確認される。

上代から複合動詞と認められる例が存在し、現代語においても使用される「トリ付く」だが、中古には次の例のみが確認される。

- (42) いたう日頃弱らせ給へるに、御ものゝけのトリ付き奉りにければ、すべて御けしき事の外にて、物もはかばかしく宣はず。 (栄花物語・卷二十六)

目的語が存在せず全体で自動詞として使用されていることから、上代と同じく前項は接頭辞といえる。上代の「トリ付く」の残存と見ておく。

「トリ続く」には、中古には前節で挙げた目的語を伴う例、次節で挙げる時間的な連続を表すと考えられる例が見られる。これに対し、上代には空間的な連続を表す例のみが見られた。空間的な連続性を表す「トリ続く」は中古には見られないが、院政期には(43)に挙げる例がある。このことから、文献には現れないが中古にも存在はしていたものと推測される。

- (43) さぶらひ呼び出して、申入れたれば、使ひにトリ続きて、半尻なる狩衣にて出給て、 (今鏡・ふちなみの下)

3.6 ⑤目的語を伴わない「トリ+非意志的自動詞」

このタイプは上代には見られなかったが、中古には少数ながら見られる。ここでは、「トリ続く(四段活用)」「トリ乱る」「トリ敢ふ」を取り上げる。

次に挙げる「トリ続く」は、短期間に出産が続くという時間的な連続を表している。上

代の「トリ続く」は、意志的自動詞としての「続く」を後項とし、空間的な連続を表していた。これに対し、中古には時間的な連続の例が出現していることから、意味の抽象化が進んでいると見ることができる⁵。前項「トリ」は接頭辞と考えられる。

- (44) 又の年の秋、また男君うつくしう生み給へれば、右の大い殿の北の方、「御産屋に、うつくしういそがしうもトリ続き給へるかな。此度はこゝに預り奉らん」とて、御乳母具して迎え奉り給へば。
(落窪物語・巻二)

上代に見られた「トリ続く」は(39)のような空間的連続を表す例であり、前項「トリ」が相手を自分の領域に引き入れるを僅かに残していると解釈することが可能であった。しかし、時間的連続を表す「トリー」においては、そのような解釈は不可能である。接頭辞「トリ」を前項とする動詞接続にも、用法の変化が起きているといえる。

「トリ乱る」は 3 例しか見られないが、(45)のように非意志的自動詞として使用される。後項「乱る」は自動詞的にも他動詞的にも使用されるため、自他いずれの解釈も可能な(46)のような例もある。「トリ続く」と同様、「トリ」は接頭辞と考えられる。

- (45) たまたま朝廷に数まへられたてまつりては、またトリ乱り暇なくなどして、
(源氏物語・朝顔)

- (46) さて寺へものせし時、とかうトリ乱りし物ども、つれづれなるまゝにしたゝむれば、
(蜻蛉日記・上)

テキスト間の表記の異同が大きいため確例としないが、次のように他動詞的に用いられる「トリ乱る」も存在する。

- (47) そのひとふしこもりて、むすめどもをもトリ乱りてまどはさんに、人／＼なむさはぐ事あらむ。
(宇津保物語・国ゆづりの下)

しかし、「トリ乱る」の他動詞的な例は(47)のみであり、かような例の用法変化によって非

⁵ 大堀(2005)によれば、Heine et al.(1991)は、文法化における意味の抽象化の方向性を次のように示す。

身体>物体>過程>空間>時間>性質

意志的な「トリ乱る」が派生したとは考えにくい。非意志的な「トリ乱る」は、非意志的な「乱る」に「トリ」が付されることによって成立したと考えられる。

非意志的自動詞を後項とする「トリー」のうち、やや傾向の異なるものとして「トリ敢ふ」が挙げられる。「敢ふ」は単独で「耐える」意の動詞として使用されるほか、非意志的な動詞連接後項として「～できる」「～しとげる」意を表す。これまで述べた「トリー」と異なり、「トリ＋接尾辞」という構造である。「敢ふ」は単独使用の場合も動詞連接後項となった場合も否定を表す文脈で使用されることが多い。従って、(48)のような「取ることができない」意を表す「～(ヲ)トリ敢へず」が本来的な用法と思われる。これに対し、(49)のような目的語の存在しない用法も見られる。

(48) 肱笠雨とか降りきて、いとあはたたしければ、みな帰りたまはむとするに、笠もトリ敢へず。
(源氏物語・須磨)

(49) 「高潮といふものになむ、トリ敢へず人損はるるとは聞けど、いとかかる事はまだ知らず」と言ひあへり。
(源氏物語・須磨)

(49)からは、「トリ敢ふ」の前項「トリ」の「手にする」意が希薄化しつつあることが窺える。現代語の副詞「とりあえず」の萌芽と見ることができよう。接頭辞化ではないが、用法の特殊化が起きている点で、注目すべき「トリー」である。

3.7 まとめ

以上、具体例を挙げて中古における「トリー」の様相を見た。目的語の抽象化が認められる「トリ隠す」や「トリ重ぬ」、目的語の存在しない例のある「トリ申す」「トリ外す」「トリ集む」、副詞的用法の「トリ立つ」や「トリ分く」、意味が特殊化している「トリなす」、前項と後項の動作主体が同一と考えられる「トリ出づ」、否定を表す文脈で使用されやすい「トリ敢ふ」など、上代には見られなかった「トリー」が多く出現することが確認された。また、時間的連続性を表す「トリ続く」や「とりまとめる」などの意では解釈できない「トリ持つ」など、上代から連続する「トリー」にも用法の変化が窺えた。上代から中古にかけて、「トリー」は大きな変化を経験したといえよう。副詞的用法や熟合構造のように用法が特殊化している「トリー」は、単なる慣用表現や「意図的な動詞の連接」(百留 2003a)という段階ではなく、語彙化した複合動詞として社会的に定着していたと考えられる。

「トリ+他動詞」の場合、「トリ隠す」や「トリ重ぬ」のような具体的な目的語を伴う例と抽象的な目的語を伴う例が共存するものや、「トリ集む」や「トリ立つ」のような具体的な目的語を有する例と目的語を有さない例が共存するものが見られた。このような統語構造の変化を起こしている「トリ+他動詞」が複数見られることは、中古において「トリー」の複合動詞化が進行していることを示すといえる。

中古には前項が接頭辞と認められる「トリー」が多く見られたことから、上代から中古にかけての「トリー」の増加は、接頭辞「トリ」の生産性の拡大によるものと思われる。接頭辞と考えられる「トリ」を前項とする例は、上代には他動詞と意志的自動詞のみに接続したが、中古には「乱る」などの非意志的自動詞に接続する例も僅かながら見られる。この事実からも、接頭辞「トリ」の生産性の拡大が窺える。

「トリー」は上代から存在し、少なくともその一部は語彙化していたのであるから、それら既存の「トリー」からの類推によって〈動詞に「手にする」意の希薄な「トリ」を付す〉という造語システムが生じ、多くの「トリー」が生み出されたのではないだろうか。

前章では「トリ」の接頭辞化プロセスとして(50)を想定し、上代には(e)の段階まで進行していることを確認した。

(50) 「トリ」の接頭辞化のプロセス

(a) 「[～(ヲ)トリ][持つ]」(2つの動詞の連続の段階)

↓ 慣用的な使用による再分析

(b) 「[～(ヲ)][トリ持つ]」(複合動詞の段階)

↓ 比喩などにより「手にする」意が希薄化した用法が成立

(c) 「[～(ヲ)手ニ][トリ持つ]」／「[抽象的な目的語／ ϕ][トリ持つ]」

↓ 「トリ」を接頭辞として解釈

(d) 「[接頭辞トリ+持つ]」(前項が接頭辞化した段階)

↓ 他の意志的な動詞への類推

(e) 「[～(ヲ)～ニ][トリー]」(「トリ佩く」「トリ懸く」など)

「[抽象的な目的語／ ϕ][トリー]」(「トリ見る」「トリ付く」など)

↓ 既存の「トリー」への類推

(f) 前項が「手にする」意を表す他の「トリー」の前項を接頭辞として再解釈

↓ 非意志的な動詞への類推

(g) 非意志的な動詞への接頭辞「トリ」の付加

ただし、(e)の段階に相当する「トリー」の異なり語数はさほど多くなく、上代において(e)の段階はあまり発達していなかったと考えられる。中古に「トリー」の異なり語数が増加するのは、(e)の段階が上代に比べて発達しているためといえる。また、上代には確認できなかった(g)の段階の「トリー」(⑤「トリ＋非意志的自動詞」)が中古には僅かながら確認できる。これは、プロセスの(g)の段階が一部では起きていたことを示す事実と見る事が可能である。そして、そのようにして生産された「トリー」の一部に、慣用化などによって用法の特殊化が起きたと考えられる。

ただしここで注目されるのは、中古において用法の特殊化が起きており、成立してからある程度長い時間を経ていると推測される「トリ立つ」「トリなす」などが上代に確認されないという事実である。上代と中古の間の空白期間に成立した可能性もあるが、熟合構造の「トリ持つ」は上代から確認できるのであるから、「トリ立つ」「トリなす」などが上代から存在していたという可能性も考慮すべきではないだろうか。ここで注目したいのは、上代と中古に存するテキストの性質の差異である。上代の資料はほとんどが韻文であり、中古の資料は散文が大半を占める。この違いが、「トリー」の出現に影響を及ぼすことはあるのだろうか。

4. テキストによる相違

中古以降の韻文として八代集を取り上げる。八代集は中古から中世初期にかけての八つの勅撰和歌集(『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』『金葉集』『詞花集』『千載集』『新古今集』)であり、本研究では考察対象外とした院政鎌倉期の歌集も含まれるが、三代集(『古今集』『後撰集』『拾遺集』)のみではデータ量が少ないため、便宜的に八代集を調査対象とした。用例の検索は『八代集総索引 和歌自立語編』⁶を用いた。

既に示したように、中古散文には 103 種の「トリー」が確認される。これに対し、八代集に出現する「トリー」は 15 種 23 例にとどまる。テキストの量の差を考慮すれば、103

⁶ 片桐洋一監修、ひめまつの会編。1986 年、大学堂書店。なお、通説に従い、同索引の『新古今集』1883 番歌の「トリかはす」は「トリかざす」として、『拾遺集』1099 番歌の「トリすう」は「トリすぶ」として扱った。

種に対して 15 種という異なり語数は極端に少ないとはいえないが、八代集の総計約 9500 首に使用される「トリー」の延べ語数が 23 例に過ぎない点は看過できない。まずこの事実から、〈韻文には「トリー」が使用されにくい〉という仮説が成り立つ。

八代集に出現する 23 例のうち、5 例は「取ることができない」意の「トリ(も)敢へず」である。後項「敢ふ」が補助動詞的に機能する「トリー」であり、前項が接頭辞的なものとは異なるタイプである。また「摘み終えることができない」意の「トリも果てず」が 1 例含まれるが、これは前項「トリ」が明らかに具体的な動作を表している。これらを除けば、八代集の「トリー」は「トリ入る」「トリ懸く」「トリ交はす」「トリかざす」「トリ飼ふ」「トリ返す」「トリすぶ」「トリ添ふ」「トリつなぐ」「トリつむ」「トリとむ」「トリ持つ」「トリ分く」の 13 種 17 例となる。

この 17 例には、ヲ格目的語とニ格を伴う構文が 4 例含まれる。

- (51) わが齡君が八千世にトリ添へて留めおきては思ひでにせよ (古今集・346)
(52) みしまゆふ肩にトリ懸け神南備の山のさか木をかざしにぞする (千載集・1286)

前章で扱ったように、この構文は上代にも多く確認される。上代から見られるこの「～(ヲ)～ニトリー」構文には、神事、祈願、武装といった特定文脈の歌に集中するという特徴がある。同様の文脈にはニ格を伴わない「トリー」も使用されやすいことから、神事、祈願、武装などの文脈には「トリー」が使用されやすく、その場合はニ格も伴うことが多いと言え換えることができる。中古においても同様の構文が和歌中に見られることから、この構文は和歌に特有の技巧的表現であったと考えられる。前述の 17 例から和歌独特の構文と思われる「～(ヲ)～ニトリー」構文の 4 例と、これに類する文脈の 2 例を除けば、八代集の「トリー」は 9 種 11 例となる。

これら 9 種のうち、「トリ飼ふ」「トリすぶ」「トリつなぐ」「トリつむ」「トリとむ」はいずれも散文での使用が 0～2 例に過ぎず、頻用されたものではない。従って、八代集に見られる「トリー」のうち、散文にも多用されたものは、「トリ入る」「トリ返す」「トリ分く」の 3 種のみということになる。

- (53) トリ分きてわが身に露やおきつ覧花よりさきにまづぞうつろふ (後拾遺集・1135)
(54) 何にあゆるを鮎といふらん 鶺鴒舟にはトリ入れしものをおぼつかな (金葉集・657)

(55) 池に住むわが名をおしのトリ返す物ともがなや人を恨みじ

(金葉集・391)

では、八代集以外の和歌で「トリー」は使用されているのだろうか。『源氏物語』中の和歌を調査したところ、「トリ集む」「トリ隠す」「トリ重ぬ」などの使用が1例ずつ確認された。八代集に見られない「トリー」が出現するものの、使用数はやはり少なく、〈韻文には「トリー」が使用されにくい〉という仮説に反するものではない。

以上より、中古の和歌には散文に現れるような接頭辞的前項を有する「トリー」は現れにくいといえそうである。韻文は散文に比べて日常語彙を反映しにくいいため、中古の和歌には当時使用されていた「トリー」の一部しか使用されなかったのではないだろうか。

『万葉集』や記紀歌謡といった韻文が中心的なテキストとなる上代においても、中古と同様に「トリー」の出現が抑制されていた可能性がある。前章で述べたように、『万葉集』に見られる「トリー」91例のうち、36例が「～(ヲ)～ニトリー」構文に該当する。

(56) 世間は かくのみならし ますらをの 心振り起し 劔太刀 腰にトリ佩き(腰尔取佩)
梓弓 鞆トリ負ひて(鞆取負而) 天地と いや遠長に (万葉集・巻3・478・大伴家持)

(57) 木綿たすき 肩にトリ懸け(肩尔取挂) 倭文幣を 手にトリ持ちて(手尔取持氏) な放け
そと 我れは折れど (万葉集・巻19・4236)

韻文にはヲ格目的語とニ格を伴う「トリー」が頻繁に使用されたため、上代にはテキストの性質上「～(ヲ)～ニトリー」構文が多く見られると考えられる。その一方、実際の言語生活ではより多くの「トリー」が用いられていたとしても、韻文にはそれが反映されていなかった可能性がある。このように考えれば、中古において上代に確認できない「トリー」が高い定着度を示したことも説明できよう。中古に定着していた「トリー」の一部は、上代から存在したが韻文に残らず、中古になって初めて文献上に出現したと考えて矛盾はない。ただし、この仮説の立証は困難であり、更なる考察の余地は残されている。今後の調査によっては、仮説を修正する可能性もある。

なお、韻文において中古よりも上代に「トリー」が多く見られるのは、『万葉集』と八代集の歌集としての性格の差異によると考えられる。雑多な歌を収載した『万葉集』には、洗練された和歌を収めた勅撰集たる八代集に比べ、日常語が比較的入り込みやすかったのではないだろうか。

ただし、「トリー」と同じく前項が接頭辞的と考えられる「ウチー」は韻文にも比較的多く見られる。「トリー」の場合と同様に八代集における「ウチー」を調査したところ、41 種 154 例が確認された。「トリー」と比べて「ウチー」は、異なり語数・延べ語数ともに韻文にも多く用いられたといえる。ただし第 4 章で述べるように、中古韻文の「ウチー」も、「ウチー」が爆発的に増加する中古後期の散文に比べれば使用頻度ははるかに低い。八代集の「ウチー」が「トリー」に比べて多いことは事実であるが、「ウチー」にもまた、テキストの性質による使用頻度の異なりがあるといえる。「トリ」「ウチ」以外の動詞連接前項のテキスト間における差異も調査する必要がある。

5. まとめ

中古の「トリー」には前項「トリ」の機能が希薄になっているものが多く確認できた。上代から中古にかけて接頭辞的な「トリ」による造語が生産的に行われ、その結果、中古には多くの「トリー」が出現したものと考えられる。また、上代と中古に存するテキストの性質の差異も、「トリー」の様相の違いを際立たせる要因の一つになっていると推測される。

しかし、中古における「トリー」の異なり語数は、第 4 章で取り上げる「ウチー」と比較すると、非常に少ないことが分かる。「トリ」の生産性はある程度拡大していたが、「トリ」が付されることのない動詞も少なくなかったのである。

古代語複合動詞に関する最大級の問題である緊密性に関しては、本章では触れることができなかった。中古には、一語化していると考えられる動詞連接においても、前項後項間に係助詞が介入する例が稀に見られる。

(58) 越前守など、げに少し物しと思へれど、親の御けしき得給ふ人の御有様、いふべきに
あらねば、ウチも出でず。 (落窪物語・巻四)

(59) トリも敢へず立ち騒がれしあだ浪にあやなく何に袖の濡れけん (後撰集・1159)

この事実から、前項と後項の形態的緊密性が現代語の複合動詞ほど強くなかったことは否定できないと思われる。しかし、それは必ずしも動詞連接の前項と後項が結びついていなかったことを意味するわけではない。いわゆる助動詞「なり」を係助詞が分断する「にやありけむ」のような例があることに鑑みると、形態的緊密性の問題は、動詞連接の内部

に存するものではなく、古代語の合成語全般に関わる問題と考えられる。

厳密な形態論的立場からは二語的と言わざるをえないとしても、多くの「トリー」において接頭辞化や意味の特殊化が起きており、語彙化した複合動詞として確立していた。中古における動詞連接「トリー」は、このような状況であったと結論したい。

6. おわりに

上代から中古にかけて接頭辞的前項を有する動詞連接が多く生み出されたことには何らかの理由があるはずだが、現時点では不明である。多くの「トリー」が生み出された原動力が何だったのか、考察していく必要がある。

そして、中古に確認される「トリー」が中世以降どのように変遷していくのかが注目される。上代から中古にかけては、新たな「トリー」の創出だけでなく、「トリー」の消滅も起きている。上代において「トリ見る」は「看病する」「世話をする」といった意味で使用されており、意味の特殊化が起きていた可能性が高い。しかし、上代には 7 例確認されたが、中古以降は観智院本『類聚名義抄』の[言尔]字の訓に「トリミル」がある他には確認できない⁷。意味が特殊化していた「トリー」が姿を消した例として注目される。中古において意味が特殊化していた「トリー」は、「トリ持つ」「トリなす」「トリ立てる」のように、多少の意味変化はありつつも現代語まで残る場合が珍しくないためである。中古から中世にかけて、新たな「トリー」の創出はあるのか、中古に頻出した「トリー」が中世以降に消滅する場合はあるのかなど、調査すべき点は多い。

また、本章では接頭辞「トリ」の意味については触れることができなかったもので、これについても検討すべき課題としておきたい。関(1993)は「とり動詞」を「ひき動詞」や「かき動詞」と比較し、「対象を選びとる動作」を表すとする。しかし、この説明ですべての「トリー」を説明しうるとは思われない。例えば、(13)として挙げた「トリ申す」に「対象を選びとる」意を認めるのは困難であろう。他の動詞連接だけでなく、「トリ」の付されない後項動詞の単独用法との比較によって、詳細に検討する必要がある。

しかし、「トリー」の本質を明らかにするためには、関(1993)が試みたような「ウチー」や「カキー」との比較を避けて通ることはできない。先に見たように、「トリ集む」には「集

⁷ 古活字本『狭衣物語』には「トリ見る」が 1 例あるが、これは「取って見る」という 2 つの動詞の連続であり、新編日本古典文学全集『狭衣物語』などでは「トリて見る」となっている。上代に見られる「看病する」「世話をする」意の「トリ見る」は中古以降の作品には見られない。

む」に比べ目的語が抽象化しているという特徴が確認されたが、「カキ集む」にも同様の特徴が確認できる。

- (60) 御覧じはじめし年月のことさへカキ集めよろづに思しつづけられて、時の間もおぼつかなかりしを、かくても月日は経にけりとあさましう思しめさる。(源氏物語・桐壺)

「集む」を後項とする動詞接続には他に「言ひ集む」「書き集む」「召し集む」などがあるが、いずれも「トリ集む」「カキ集む」に見られたような前項の希薄化や用法の抽象化は確認できない。従って、「トリ集む」「カキ集む」には、他の「一集む」とは異なる何らかの関連があると思われる。前項が接頭辞的な動詞接続の歴史的変遷や中古における全体的な様相を明らかにし、相互に比較することによって、新しく見えてくる事実があるだろう。「ウチ」「カキ」等、「トリ」以外の接頭辞的前項の詳細な検討も急がれる。

第3章 上代日本語における動詞連接「ウチー」の様相

1. はじめに

「打つ」の連用形「ウチ」を前項とする動詞連接「ウチー」には、前項が接頭辞であるものが存在するとされる。中古の例を(1)として挙げる。

- (1) 細やかにたをたをとして、物ウチ言ひたるけはひ、あな心ぐるし、とただいとらうた
く見ゆ。 (源氏物語・夕顔)

(1)では「物」が「ウチ言ふ」の目的語となっているが、「物」は「言ふ」の内容であり、「ウチ」の打撃の対象は存在しない。「ウチ言ふ」の前項「ウチ」は動詞としての機能を有しておらず、後項「言ふ」に付属していると考えられる。このような、本来の動詞としての機能を失い、後項動詞に付属する要素となった「ウチ」が、接頭辞と言われる「ウチ」である。

関(1977)が「「うち嘆く」「うち沈む」等の「うち」は、中古にすでに接頭語となり切っていたと考えられる」(p.120)とするように、「ウチー」の接頭辞化は上代から中古にかけて進行したものと推測されている。しかし、接頭辞「ウチ」がどの時代からどの程度現れるのか、接頭辞化がどのようなプロセスで実現したのかといった「ウチ」の接頭辞化の内実については、先行論においてもほとんど明らかになっていない。

前項が接頭辞的な動詞連接は古代から現代まで連綿と存在しており、日本語動詞連接において重要な位置を占めるものである。動詞連接の接頭辞化についての検討は、日本語動詞連接史を記述する上で欠かせない。また、前項が接頭辞的である動詞連接は、石井(2007)の挙げる「派生構造」の複合動詞に該当する。「派生構造」の複合動詞は前項と後項が本来の機能を残す「複合構造」の複合動詞を前提にして成立したと考えられることから、序章で触れた古代語における複合動詞の存否の問題を考えるうえでも、前項の接頭辞化についての検討は重要である。

本章では、動詞連接史構築の一端として、上代における動詞連接「ウチー」の様相を記述する。また、上代の共時的な様相から、「ウチ」の接頭辞化のプロセスについても検討する。「ウチ」の接頭辞としての用法は中古には定着していたと考えられることから、接頭辞

化のプロセスについて探るためには、上代文献に出現する「ウチー」を観察する必要がある。以下では、まず上代における「ウチー」の様相について概観し、「ウチ」の接頭辞化のプロセスについて仮説を提示する。

2. 「ウチー」に関する先行論

古代語の「ウチー」に関する主要な先行論として、阪倉(1983)、堀(1986)、関(1993)、近藤(1996、1997、1998ab、1999、2001)、山王丸(2011)がある。このうち、阪倉(1983)、関(1993)、近藤(1996、1997、1998ab、1999、2001)は接頭辞「ウチ」の意味的機能についての検討を中心とする。阪倉(1983)、関(1993)を含め、「ウチ」の意味的機能の研究史は近藤(1996)に詳しい。

その近藤(1996、1997、1998ab、1999、2001)では、中古の「ウチ」が「弱意」を表すと主張されている。近藤(1997)では『源氏物語』中の「ウチ+他動詞」について、近藤(1998b)では『源氏物語』中の「ウチ+主体変化動詞」について、それぞれ具体例を挙げながら詳細に検討しており、次のように結論している。

- (2)a. 「意志性・意図性の弱さ」(略)、「対象への働きかけの弱さ」(略)、「対象の受ける影響・変化の弱さ」(略)といったことが認められた。(近藤 1997:23)
 - b. 中古、特に源氏物語の頃に関して言えば、「ウチ」は「弱意」の方向を基本としつつ、その具体的な意味は、下接の動詞によっていろいろな形で実現するというものではないかという見通しを、筆者は持つに至っている。(近藤 1997:24)
 - (3) 「ウチ+主体変化動詞」の意味特徴としては次のようなことが認められた。
 - ㊦ 変化の結果の状態が軽度・可逆的である。(略)
 - ㊧ 変化の結果の状態が一時的である。(略)
 - ㊨ 変化の前の状態が変化の後の状態に近い。(略)
 - ㊩ 話題の規模・スケールが小さい。(略)
- ㊦㊨を更にまとめて、「変化の前と変化の後の、変化の幅が小さい」ということもできるだろう。これらはいずれも「強意」の方向と言うよりは、「弱意」の方向と言うことができる。(近藤 1998b:154)

中古における接頭辞「ウチ」の意味については、近藤(1996、1997、1998ab、1999、2001)

の挙げる「弱意」が現時点では最も首肯される。しかし、近藤も打撃を表す動詞「ウツ」から「弱意」が生じるプロセスについては説明していない。また、(2)(3)は中古の「ウチ」についての結論であり、上代の「ウチ」の意味的機能についてはほとんど検討されていない。このように「ウチ」が「弱意」という機能を獲得するプロセスや、上代の「ウチ」がどのような意味を有していたのかについては、検討すべき課題として残されている。

「ウチ」の接頭辞化に関して『源氏物語』を資料に考察した山王丸(2011)は、動詞「打つ」が形式化した接頭辞とされてきた「ウチ」の中に名詞「内」が含まれることを主張した。この中で山王丸は、『万葉集』中の「ウチ嘆く」や「ウチ見る」の前項が動詞「打つ」ではなく名詞「内」である可能性を指摘するが、これは首肯しがたい。『万葉集』における「ウチー」の前項の表記は、仮名書き例を除いた 69 例中「打」が 63 例を占め、「内」は 1 例のみである¹。動詞「ウツ」の単独例の表記も、仮名書き例を除いた 10 例中 9 例を「打」が占める。「ウチー」の前項と動詞「ウツ」の表記はほぼ同じであるといえよう。これに対し、『萬葉集索引』(古典索引刊行会編 2003)によれば、『万葉集』における名詞「内」の表記は仮名書き例を除けば全て「内」「中」「裏」のいずれかであり、「打」で表記される例は見られない。「ウチー」の前項の表記が「内」ではなく「ウツ(打つ)」に一致することから、前項「ウチ」は名詞「内」ではなく動詞「ウツ」の連用形と判断できる。

堀(1986)は、「ウチ渡す」など従来前項が接頭辞であるとされてきた「ウチー」の前項にも接頭辞ではないものが存在することを主張する。その中で、上代の「ウチー」の前項「ウチ」に様々な意味のものが存在することが述べられており、「ウチ」の接頭辞化のプロセスにも触れられている。

- (4) これ(阿部注:「打つ」という具体的動作を表していた「打」)が祝詞の「打積置弓」「打置弓」のように次第に抽象化し、「宇知須々呂比」「打見」など手動とは直接関係のない他動詞にも応用され、さらには「宇知奈妣久」「打霧之」など自動詞にも使われるようになって形式化・一般化したのが、いわゆる接頭語「うち」である。(p.47)

「ウチ」の意味的機能については、「ただ後項の動詞を強調する程度の意味しかもたない」(p.46)、「祝詞の諸例は、「うち」の意味が内面的に抽象化し始め、後項動詞が表わす他動行

¹ 「韓衣君にウチ着せ(君尔内著)」(巻 11・2682)。この例の前項「ウチ」が内側や内面を表すとは考えにくい。単純に訓仮名として用いられていると考えられる。

為の、その発動のきっかけともいうべき部分を表す程度にもなっている」(p.47)と述べる。

「ウチー」の後項が〈手動的な他動詞→非手動的な他動詞→自動詞〉という流れで拡大していったという接頭辞化の過程は不自然なものではないが、堀はこの流れについて概略的に述べるにとどまり、「ウチ」が希薄化する具体的な理由など、接頭辞化のプロセスを説得的に説明するには至っていない。

このように、上代における「ウチ」の様相や接頭辞化のプロセスについては、検討の余地が多く残されている。以下、上代の「ウツ」の用法を確認した上で、「ウチー」についての検討に入る。

3. 上代における「ウツ」

本節では、上代語資料(『古事記』歌謡、『日本書紀』歌謡、『万葉集』)において「ウツ」が単独で動詞として使用される際の特徴を確認する。「ウツ」は記紀歌謡から 18 例、『万葉集』から 14 例得られる。『続日本紀』宣命には用例が確認できなかった。

上代の「ウツ」には他動詞的な用法と自動詞的な用法が認められる。(5)～(8)は他動詞的な用法、(9)～(10)は自動詞的な用法である。

- (5) 皆人を寝よとの鐘はウツなれど(打礼杼)君をし思へば寐ねかてぬかも
(万葉集・巻 4・607・笠女郎)
- (6) 古に梁ウツ人の(梁打人乃)なかりせばここにもあらまし柘の枝はも
(万葉集・巻 3・387・若宮年魚麻呂)
- (7) 馬ないたくウチてな行きそ(打莫行)日ならべて見ても我が行く志賀にあらなくに
(万葉集・巻 3・263・刑部垂麻呂)
- (8) みつみつし 久米の子が 頭椎い 石椎いもち ウチてしやまむ(宇知亘斯夜麻牟)
(古事記・歌謡 10)
- (9) 笹葉に ウツや霰の(宇都夜阿良禮能) たしだしに 率寝てむ後は 人は離ゆとも
(古事記・歌謡 79)
- (10) 霰ウツ(霰打)安良礼松原住吉の弟日娘女と見れど飽かぬかも
(万葉集・巻 1・65・長皇子)

(5)(6)(7)(8)はそれぞれ「叩く」「設置する」「鞭打つ」「倒す」意の他動詞、(9)(10)は「打

ちつける(ように降る)」意の自動詞として解釈される²。このように、「ウツ」は様々な動作を表しうるが、その動作はいずれも「モノとモノとの強い接触」(以下、打撃)を伴う。上代において、単独の「ウツ」が打撃を表さない例は見られない。

「ウツ」は、動作主体が有情物である場合は、打撃を表す他動詞として使用される。自動詞としての「ウツ」は(9)(10)の 2 例が確認できるが、いずれも非情物「霰」を主体とする非意志的な動作である。非情物を主体とする「ウツ」はこの他には見られない。

上代の「ウツ」は、打撃を伴う動作・作用を表し、動作主が有情物であれば他動詞、霰などの非情物であれば非意志的自動詞として使用されるとまとめられる。

4. 上代における「ウチー」

4.1 概要

上代の「ウチー」は、延べ語数で 98 例(『古事記』歌謡 3 例、『日本書紀』歌謡 2 例、『万葉集』93 例)、異なり語数で 36 例得られた。それらを(11)として挙げる([]は用例数)。

- (11) ウチ出づ[3]、ウチ^こ寄す[1]、ウチ置く[1]、ウチ掛く[2]、ウチ交ふ[1]、ウチ着す[1]、ウチ懲ます[1]、ウチ霧らす[1]、ウチ臥い伏す[1]、ウチ越ゆ[7]、ウチさらす[2]、ウチしなふ[1]、ウチ^な偲ぶ[1]、ウチすすろふ[1]、ウチ付く(下二段活用)[1]、ウチ嘆く[5]、ウチ^な鳴す[1]、ウチ撫づ[1]、ウチ靡く[31]、ウチ濡らさゆ[1]、ウチ上る[1]、ウチ放つ[1]、ウチはなふ[1]、ウチ羽振く[1]、ウチ延ふ[2]、ウチ嵌む[1]、ウチ払ふ[6]、ウチ降る[3]、ウチ触る[1]、ウチ見る[1]、ウチ廻る[1]、ウチ群る[2]、ウチ止む[1]、ウチ行く[5]、ウチ寄す[1]、ウチ渡す[5]、ウチ折る[1]

「ウチー」の後項には他動詞、意志的自動詞、非意志的自動詞があることが分かる。先に見たように「ウツ」には他動詞と非意志的自動詞の用法があることから、組み合わせ上は 6 タイプの「ウチー」が存在しうることになるが、「他動詞ウチ+非意志的自動詞」「非意志的自動詞ウチ+他動詞」「非意志的自動詞ウチ+意志的自動詞」であることが明らかな「ウチー」は確認できない。上代の「ウチー」は「他動詞ウチ+他動詞」「他動詞ウチ+意志的自動詞」「非意志的自動詞ウチ+非意志的自動詞」の 3 タイプに限られる。これを I 類

² 記紀歌謡には(8)のような目的語が明示されない例が多いが、用法は「ウチてしやまむ」で固定的であり、文脈から動作対象(この場合、倒す相手)は明らかである。

～Ⅲ類とする³。このうち異なり語数が最も多いのはⅠ類であるが、上代の「ウチー」の最大用例を有する「ウチ靡く」や、「ウチ＋移動動詞」を含むⅡ類も、延べ語数は多い。

(12) Ⅰ類 他動詞ウチ＋他動詞

Ⅱ類 他動詞ウチ＋意志的自動詞

Ⅲ類 非意志的自動詞ウチ＋非意志的自動詞

前章までの「トリー」の検討では目的語の有無を分類基準に含めていたが、「ウツ」には非意志的自動詞としての用法があるため、目的語の有無は接頭辞化の判定基準としては弱い。そのため、本章では分類基準として目的語の有無を用いない。

「ウチー」の前項が打撃を表す動詞連用形であるのか、あるいは接頭辞であるのかは、主として打撃の意の有無で区別する。打撃の意の有無については、後項動詞の性質、補語の性質、文脈等から総合的に判定する。

4.2 Ⅰ類の「ウチー」

「他動詞ウチ＋他動詞」という構成であるⅠ類の「ウチー」は、 ϕ/γ 格で表示される目的語を有する例が多い。前項が打撃を表すものと接頭辞であるものが存在する。

4.2.1 目的語を伴うもの

次に挙げる「ウチー」は、前項が打撃を表していると判断できる。

(13) 太秦は神とも神と聞こえる常世の神をウチ懲ますも(宇知岐多麻須母)

(日本書紀・歌謡 112)

(14) 時守のウチ鳴す鼓(打鳴鼓)数みみれば時にはなりぬ逢はなくも怪し

(万葉集・巻 11・2641)

(15) 千鳥鳴く佐保の川門の清き瀬を馬ウチ渡し(馬打和多思)いつか通はむ

(万葉集・巻 4・715・大伴家持)

³ 「意志的自動詞」は「非能格自動詞」、「非意志的自動詞」は「非対格自動詞」にはば対応する。この様相は影山(2003)の指摘する「他動性調和の原則」に一致する。

それぞれ、前項に打撃の意を認めて(13)「常世の神を打って懲らしめる」、(14)「打って鳴らす鼓」、(15)「馬を鞭打って渡らせる」と解釈できる。このような打撃を伴いうる動作を表す動詞が後項となり、かつ打撃の対象と考えて矛盾のない目的語を伴う「ウチ+他動詞」は、前項「ウチ」が打撃の意を有していると判断する。ただし、「[ウチ][懲ます]」「[ウチ][鳴らす]」「[ウチ][渡す]」という2つの動詞の連続であるのか、前項と後項が本来の意味を保持している「複合構造」(石井 2007)の複合動詞「ウチ懲ます」「ウチ鳴す」「ウチ渡す」であるのかの判定は難しい。

これに対し、次の「ウチー」の前項は接頭辞と考えられる。

- (16) 堅塩を トリつづしろひ 糟湯酒 ウチすすろひて(宇知須々呂比豆) しはぶかひ 鼻び
しびしに しかとあらぬ ひげ搔き撫でて (万葉集・巻5・892・山上憶良)
- (17) 我が宿の冬木の上に降る雪を梅の花かとウチ見つるかも(打見都流香裳)
(万葉集・巻8・1645・巨勢宿奈麻呂)

(16)の後項「すすろふ」は「すする」意であり打撃を伴う動作ではないこと、「糟湯酒」が打撃の対象であるとは考えにくいことから、「ウチ」は接頭辞と判断できる。また、「トリつづしろひ」と「ウチすすろひて」が並列されている点も注目される。第1章で見たように、上代の「トリ」には接頭辞的用法が存する。接頭辞的前項を有する動詞連接「トリー」「ウチー」を並列することにより、表現上の効果を狙った可能性がある⁴。

(17)も同様に、「見る」が打撃を伴う動作ではないこと、「雪」が打撃の対象とは考えにくいことから、「ウチ」を接頭辞と判断できる。また「梅の花かと」を伴っている点が注目される。「ウツ」がト格を伴う例は上代には見られないが、「見る」には次の例がある。

- (18) 霍公鳥棟の枝に行きて居ば花は散らむな玉と見るまで(珠登見流麻泥)

⁴ 「トリー」と「ウチー」の並列は他にも見られる。

ますらをの 男さびすと 剣太刀 腰にトリ佩き(許志尔刀利波枳) さつ弓を 手握り持ちて 赤駒に 倭文鞍ウチ置き(志都久良宇知意伎) (万葉集・巻5・804・山上憶良)

玉梓の 道の隈廻に 草手折り 柴トリ敷きて(志婆刀利志伎提) 床じもの ウチ臥い伏して(宇知許伊布志提) 思ひつつ 嘆き伏せらく (万葉集・巻5・886・山上憶良)

これらはいずれも山上憶良作歌であり、憶良が好んで用いた表現とも考えられる。

この例から、「ウチ見る」の統語的特徴は「ウツ」ではなく「見る」に一致することが分かる。この事実も、「ウチ」を接頭辞と判断する根拠となる。

また、上代の「ウチ+他動詞」にはヲ／ ϕ 格目的語と二格を伴うものが存在する。「ウチ置く」の例を挙げておく。

- (19) ますらをの 男さびすと 劔太刀 腰にトリ佩き(許志尔刀利波枳)さつ弓を 手握り持ちて 赤駒に 倭文鞍 ウチ置き(志都久良字知意伎) (万葉集・巻5・804・山上憶良)

古代語の「トリー」について扱った前章では、神事、祈願、武装といった特定文脈の歌にはヲ／ ϕ 格目的語と二格を伴う「～(ヲ)～ニトリー」という構文が多く見られること、その構文が和歌に特有の技巧的表現であることを述べた。この種の「ウチー」も「～(ヲ)～ニトリー」と類似した構文であること、「劔太刀腰にトリ佩き」と並列されていることから、同様の技巧的表現であったと考えられる。

4.2.2 目的語を伴わないもの

I 類の「ウチー」には目的語を伴わない例も見られる。

- (20) さわさわに 汝が言へせこそ ウチ渡す(于知和多須) 彌木榮なす 來入り參來れ
(日本書紀・歌謡 57)

- (21) もののふの 八十伴の男の ウチはへて(打經而) 思へりしくは (万葉集・巻6・1047)

堀(1986)は(20)の「ウチ渡す」の前項に「馬を鞭打つ」意を認めるが、目的語が表示されていない点を重視し、ここでは前項を打撃の意が希薄化している接頭辞と見ておく⁵。「ウチはふ」は2例確認されるが、いずれも「ウチはへて」形で副詞的に「思ふ」にかかり、「ず

⁵ 『古事記』歌謡 63 番も(20)と同じ内容である。(20)の「ウチ」に「馬を鞭打つ」意を認めるならば「^{やがはえ}(彌木榮を)馬を鞭打つて渡す」という解釈になる。「ウチ」に「馬を鞭打つ」意を求めない場合は、「見渡す」意と解釈される(日本古典文学大系『古代歌謡集』岩波書店)。

っと(思い続けてきた)」などと解釈される。「ウチはふ」は中古においても「ウチはへ」あるいは「ウチはへて」形で副詞的に使用される⁶。副詞的な用法が上代に既に定着していたと考えられる。いずれも、「ウチ」が打撃を表すとは考えにくい。

以上、Ⅰ類の「ウチー」に「ウチ鳴す」や「ウチ懲ます」といった前項が打撃を表す「ウチー」と「ウチすすろふ」や「ウチ見る」といった前項が接頭辞である「ウチー」が共存していることを確認した。「～(ヲ)～ニトリ」と同様の、ニ格補語を伴う「ウチー」も存在したが、かような「ウチー」の前項も接頭辞の可能性が高い。また、「ウチはへて」のように、目的語を伴わない副詞的な用法が定着していると考えられる例も存在した。

4.3 Ⅱ類の「ウチー」

「他動詞ウチ＋意志的自動詞」という構成であるⅡ類の「ウチー」は、目的語を伴うものと伴わないものに大別される。目的語を伴わないもののうち、「ウチ＋移動動詞」は移動の経路となる補語を伴う例が多い。

4.3.1 目的語を伴うもの

目的語を伴うⅡ類の「ウチー」は次のようなものである。

- (22) たまきはる 命絶えぬれ 立ち躍り 足すり叫び 伏し仰ぎ 胸ウチ嘆き(武祢宇知奈氣吉) 手に持てる 我が子飛ばしつ 世間の道 (万葉集・巻5・904)
- (23) うち靡く 心もしのに そこをしも うら恋しみと 思ふどち 馬ウチ群れて(宇麻宇知牟礼豆) 携はり 出で立ち見れば (万葉集・巻17・3993・大伴池主)

(22)(23)は、前項「ウチ」がそれぞれ「胸」「馬」を目的語とする他動詞、後項「嘆く」「群る」が「作者」「思ふどち」を主体とする自動詞として機能しており、いずれも「胸を打って嘆く」「馬を鞭打って集まる」という2つの動作を表している。2つの動作である場合、現代語では「打ッテ嘆く」「打ッテ集まる」のように前項後項間に助詞「テ」を介入させることが一般的であるが、上代語では連用形でそのまま前項と後項を繋ぐことが可能であったことが分かる。

⁶ いとど御心地もあやまりて、ウチはへ臥しわづらひたまふ。

(源氏物語・真木柱)

4.3.2 目的語を伴わないもの

次に挙げる「ウチー」は打撃の対象となる目的語が存在しないことから、「ウチ」は接頭辞と考えられる。

(24) 昼暮らし 夜わたし聞けど 聞くごとに 心つごきて ウチ嘆き(宇知奈氣伎) あはれの
鳥と 言はぬ時なし (万葉集・巻18・4089・大伴家持)

(25) 安騎の野に宿る旅人ウチ靡き(打靡)寐も寝らめやも古思ふに
(万葉集・巻1・46・柿本人麻呂)

(26) 玉梓の 道の隈廻に 草手折り 柴トリ敷きて 床じもの ウチ臥い伏して(宇知許伊布
志提) 思ひつつ 嘆き伏せらく (万葉集・巻5・886・山上憶良)

「ウチ嘆く」には(22)として挙げた「胸ウチ嘆き」の例があることから、堀(1986)は目的語の存在しない「ウチ嘆く」も「胸を打つ」意である可能性を指摘する。しかし、両者には明らかな文脈の違いが存する。(22)は幼い子供が死んだ悲しみを述べる歌であり、その強い嘆きを表すために「胸ウチ嘆き」という表現を用いたものとされる⁷。これに対し、(24)の「 ϕ ウチ嘆く」はホトトギスの渡来を詠んだ歌であり、強い悲しみによって嘆く歌ではないため、「ウチ」に「胸」という補語を想定するのは困難である。「ウチ」には打撃の対象が存在せず、接頭辞と判断する。

(25)は「ウチ靡き」が人の横になる様子を表している。目的語が存在せず、打撃を伴う動作ではない点から、「ウチ」は接頭辞と判断できる。なお、「ウチ靡く」は上代で最も多くの用例(31例)が存する「ウチー」であるが、人が横になる意を表すⅡ類の例は5例と少なく、Ⅲ類に分類される非意志的な例が26例を占める。

(26)「ウチ臥い伏して」も、(25)「ウチ靡く」と同様に人が横になる動作の描写に用いら

⁷ 伊藤(1996a)は、(22)の歌を山上憶良の作とした上で、「人が死んだ時、哭き悲しみながら復活のための所作を振る舞うのは、古代人の習いであった」(p.259)、「仁徳即位前紀に、弟の菟道若郎子が息絶えた時、兄の大鷦鷯尊が、我が胸を打ち、叫び哭き、ついに髪を解き屍に跨って弟をいくたびか呼び、その命を活かしたという話がある」(p.260)、『礼記』檀弓下に「辟踊ハ哀ノ至リナリ」という言葉がある。「辟」は胸を打ち、「踊」は足踏みして悲しむ動作である。(略)「胸打ち嘆き」も「辟」と関係することは容易に考えられ(同)ると述べ、「憶良は、漢籍における死の悲哀を示す表現を踏まえながらも、仁徳即位前紀と同様、日本伝統の魂振りを色濃くこめてこの表現をなしたものと見るべきであろう」(同)と考察する。

れている。前項「ウチ」は接頭辞の可能性が高いが、「床じもの」に対する打撃を表すという解釈も完全に否定することはできない。これは、『万葉集』に「床」を目的語とする場合が多い「ウチ払ふ」という動詞接続が存在するためである。

- (27) 明けくれば 門に寄り立ち 衣手を 折り返しつつ 夕されば 床ウチ払ひ(登許宇知波良比) ぬばたまの 黒髪敷きて (万葉集・巻17・3962・大伴家持)

「ウチ払ふ」は『万葉集』に6例確認され、そのうち5例が「床」あるいは「玉床」を目的語とする。「ウチ払ふ」はⅠ類の「ウチ+他動詞」という構造であるが、前項「ウチ」が「床」に対する打撃を表しているのかは定かでない。「床」を払う際には軽度の接触を伴うが、「ウチ」がその接触を表しているのかを判断できないためである。しかし、仮に「ウチ払ふ」の「ウチ」が「床」に対する打撃を表しているとすれば、(26)の「ウチ」が「床じもの」に対する打撃を表しているという解釈も可能となろう。この問題については、ここでは保留しておく。

4.3.3 移動動詞を後項とするもの

ここまでは後項が移動動詞ではないⅡ類を見てきたが、Ⅱ類の「ウチー」の後項となる意志的自動詞には移動動詞が多い。上代には「ウチ越ゆ」「ウチ出づ」「ウチ行く」「ウチ上る」「ウチ廻る」が確認できる。この種の「ウチ+移動動詞」は、目的語が存在せず、ヲ／φ格などで表示される移動の経路や起点を補語として伴うことが多い。

- (28) 塩津山ウチ越え行けば(打越去者)我が乗れる馬ぞつまづく家恋ふらしも (万葉集・巻3・365・笠金村)
- (29) 浜辺より我がウチ行かば(和我宇知由可波)海辺より迎へも来ぬか海人の釣舟 (万葉集・巻18・4044・大伴家持)
- (30) 逢坂をウチ出でて見れば(打出而見者)近江の海白木綿花に波立ちわたる (万葉集・巻13・3238)
- (31) ウチ上る(打上)佐保の川原の青柳は今は春へとなりけるかも (万葉集・巻8・1433・坂上郎女)
- (32) 汝こそは 男にいませば ウチ廻る(宇知微流) 島の埼々 かき廻る 磯の埼落ちず

「ウチ＋移動動詞」には打撃の対象となる目的語が存在する例が無いことから、前項「ウチ」は接頭辞であるように見える。しかし堀(1986)は、これらの「ウチ」が「馬を鞭打つ意」を表しており接頭辞ではないとする。以下に述べるように、これは重要な指摘である。

『万葉集』の「ウチ越ゆ」は7例中3例⁸が(28)のように同歌中に「馬」を伴う。一方、単独使用の「越ゆ」は、『万葉集』中に73例見られるものの、移動手段としての「馬」を同歌中に伴う例は見られない⁹。この事実から、「ウチ越ゆ」は「越ゆ」と異なり「馬」と何らかの強い関係を有する動詞連接だといえる。この関係こそ、堀(1986)の指摘する「馬を鞭打つ」意であろう。(7)のように単独の「ウツ」に「馬」を目的語とする例があることから、「ウチ」を「鞭打つ」意と解することには合理性がある。「ウチ越ゆ」は本来、「馬ウチ越ゆ」(馬を鞭打ちながら越える)という構造であったと推測される。

しかし、実際には「馬」を目的語とする「馬ウチ越ゆ」のような例は見られない。この事実は、『万葉集』における「ウチ越ゆ」が既に項としての「馬」を必要としなかったことを示している。前項「ウチ」は、「鞭打つ」意の動詞としては機能していないといえよう。

「ウチ越ゆ」は「[ウチ][越ゆ]」という2つの動詞ではなく、「[ウチ越ゆ]」という複合動詞であったと考えられる。これは、「ウチ出づ」「ウチ行く」などについても同様である。『万葉集』に「ウチ越ゆ」は7例、「ウチ出づ」は3例、「ウチ行く」は5例確認される。複数の用例があることも、これらの「ウチ＋移動動詞」が単なる臨時的な動詞の連続ではなかったことを示している。

このように、「ウチ＋移動動詞」においては、後項動詞の補語である移動の経路等は明示されるが、「ウチ」の目的語は存在しない。「ウチ」は本来的には「馬を鞭打つ」意を有していたと考えられるが、『万葉集』の「ウチ＋移動動詞」においては、「ウチ」の「鞭打つ」意は失われていたと見るべきであろう。

以上のように、Ⅱ類の「ウチー」にも「(胸)ウチ嘆く」のような前項が打撃を表す動詞として機能する例と、「(φ)ウチ嘆く」「ウチ靡く」のような前項が接頭辞である例が共存している。また、「ウチ＋移動動詞」は、前項の打撃の意味は希薄化している可能性が高いが、

⁸ 巻3・365、巻7・1104、巻10・2201。

⁹ 馬を主体とする「赤駒の越ゆる馬柵の(越馬柵乃)」(万葉集・巻4・530)の例や、長歌中に「越ゆ」とは無関係に「馬」が現れる例(万葉集・巻19・4154)は見られる。

本来的には「馬を鞭打つ」意を表していたものとして注目される。

4.4 Ⅲ類の「ウチー」

「非意志的自動詞ウチ＋非意志的自動詞」という構成であるⅢ類の「ウチー」には、前項が打撃を伴う動きを表しているものと、打撃を表さないものが存在する。上代におけるⅢ類の「ウチー」はほぼ自然現象を表すものに限られる。

4.4.1 打撃を伴う動きを表す動詞を後項とするもの

次に挙げる「ウチ寄す」や「ウチ降る」は、前項が「寄す」「降る」に伴う非意志的な打撃を表していると判断する。

(33) なまよみの 甲斐の国 ウチ寄する(打縁流) 駿河の国と こちごちの 国のみ中ゆ 出で
立てる 富士の高嶺は (万葉集・巻3・319・高橋虫麻呂)

(34) 夏まけて咲きたるはねずひさかたの雨ウチ降らば(雨打零者)移ろひなむか
(万葉集・巻8・1485・大伴家持)

「ウチ寄す」は「駿河」にかかる枕詞として使用され、「波が打ち寄せる駿河」の意とされる¹⁰。上代には、単独の「ウツ」が波を主体とする例は見られないが、波に関する「ウチー」は複数見られる。

(35) 伏越ゆ行かましものをまもらふにウチ濡らさえぬ(所打沾)波数まずして
(万葉集・巻7・1387)

(36) 大伴の御津の浜辺をウチ曝し(打曝)寄せ来る波のゆくへ知らずも
(万葉集・巻7・1151)

堀(1986)は「ウチ寄す」「ウチ濡らさゆ」などの「ウチ」について、「「波が～をうつ」の具体的意味が著しく、単なる接頭語とすべきでない」(p.49)とする。「波」に関する「ウチー」

¹⁰ 東遊歌や古今集には「波」を主体とする「ウチ寄す」の例が見られる。

河風のすゞしくもあるかウチ寄する浪とともにや秋はたつらむ (古今集・170・紀貫之)

として他に(36)のような「ウチ曝し(打曝)寄せ来る波」が2例ある。単独の「ウツ」が波を主体とする例は無いが、波が岸や浜に打ち寄せる際には強い接触(打撃)が生じること、波に関する「ウチー」が上代にも複数存在することから、これらの「ウチ」は「波が岸に打ち付ける」という非意志的な打撃を表すと見てよいだろう。

(34)に挙げた「ウチ降る」は、単独の「ウツ」に「霰が打ち付ける」意の用法が存在することに鑑みると、前項「ウチ」が雨の「強く当たる様」を表していると解釈できる。「ウチ」は「雨が地面に打ち付ける」という非意志的な打撃を表していると見ておく。

4.4.2 打撃を伴わない動きを表す動詞を後項とするもの

打撃を伴う自然現象を表す「ウチー」がある一方、次に挙げるように後項が打撃を伴う動きを表さないⅢ類の「ウチー」も見られる。

(37) ウチ靡く(打奈婢久)春ともしるく鶯は植木の木間を鳴き渡らなむ

(万葉集・巻20・4495・大伴家持)

(38) 明日香川瀬々の玉藻のウチ靡き(打靡)心は妹に寄りにけるかも(万葉集・巻13・3267)

(39) ウチ霧らし(打霧之)雪は降りつつしかすがに我家の苑に鶯鳴くも

(万葉集・巻8・1441・大伴家持)

「ウチ靡く」は上代に最も多く出現する「ウチー」であり、万葉集に31例確認できる。人が意志的に横になる様子を表すⅡ類としての用法(25)だけでなく、(37)のような「春」にかかる枕詞としての用法、(38)のような「玉藻」「心」「黒髪」などの非情物が傾く様や横になる様を表す用法がある。これらは意志的な動きではないため、Ⅲ類に分類される。上代には、枕詞としての用法が最も多い。枕詞としての「ウチ靡く」は、『時代別国語大辞典 上代編』(三省堂)が「春になると草木がなよやかに靡くから、という」とするように、「草木がウチ靡く春」と解釈される。

また、Ⅱ類の「ウチ靡く」とⅢ類の「ウチ靡く」のいずれが先に成立したのかも注目される。「ウチ靡く」の初出はⅡ類である(25)の例であるが、この例のみが『万葉集』第2期のものである¹¹。一方、Ⅲ類の「ウチ靡く」のうち、作歌年代の明らかなものはすべて第3

¹¹ 一般に、『万葉集』内の歌は次のように時期区分される。第1期：～壬申の乱(672年)、第2期：～平城京遷都(710年)、第3期：～山上憶良没(733年)、第4期：～天平宝字3年(759年)。

期から第 4 期である。この事実から、Ⅱ類よりもⅢ類の成立が先である可能性が示唆されるが、第 2 期のⅡ類の例も 1 例のみであるため、断定はできない。いずれにせよ、目的語を伴う例が無いこと、打撃を伴う動作とは考えにくいことから、「ウチ靡く」の前項「ウチ」は接頭辞と判断できる。

「ウチ霧らす」は、「ウチ降る」と同じく天候に関する「ウチー」であるが、強い接触を伴わない。「ウチ靡く」と同様、「ウチ」は接頭辞である。

このようにⅢ類の「ウチー」においても、「ウチ寄す」「ウチ降る」のように前項が打撃を表していると考えられるものと、「ウチ靡く」「ウチ霧らす」のように前項が接頭辞であるものが共存している。

4.5 まとめ

以上、記紀歌謡と『万葉集』に見られる「ウチー」を概観した。上代の「ウチー」の前項には、Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類のいずれにおいても、打撃を表す動詞として機能するものと接頭辞であるものの両者が確認された。〈前項が接頭辞である「ウチー」がⅠ類からⅢ類の全てにおいて認められる〉〈「ウチはへて」のように副詞化が起きていると考えられる「ウチー」が存在する〉〈前項が明らかに接頭辞である「ウチ靡く」の用例数が突出して多い〉といった事実は、いずれも上代において「ウチ」の接頭辞化が十分に進行していたことを示すものといえる。「ウチ」の接頭辞用法が上代から存在したことは明らかである。

「ウチ」の接頭辞化は文法化の一種と捉えられる。文法化した要素は形態変化を起こすことが多く、現代語では「ウチー」にも「ブチ壊す」「ブン殴る」などの前項が濁音化や音便化を起こした形態が存在する。ところが、上代から中古においては、「ウチ」が明らかに接頭辞化しているにもかかわらず、前項の形態変化は確認できない。この理由は定かではないが、和歌集や物語といったテキストでは、語頭が濁音化した形式が避けられたためかもしれない。いずれにせよ、形態変化が起きている例が確認できないことは、接頭辞化を否定する根拠にはならないと考える。

上代は文献によって様相を探ることができる最古の時代であるが、既に接頭辞としての「ウチ」が成立している。そのため、「ウチ」の接頭辞化のプロセスは上代の共時的様相から推測せざるをえない。次節では「ウチ」の接頭辞化について考察し、接頭辞化のプロセスについての仮説を提示する。

5. 接頭辞化のプロセス

5.1 「ウチー」の複合動詞化

本章 3 節で見たように、単独使用の「ウツ」に打撃の意味を失っているものがないことから、打撃の意味の希薄化は「ウツ」が動詞連接前項となった場合に限って起こる現象といえる。「ウチ」の意味的な希薄化は、動詞連接において起こったと考えてよいであろう。

「ウチ」の接頭辞化は、自立形式から非自立形式への変化という点で、文法化の一種と位置づけられる。文法化の典型的なプロセスとして「再分析」と「類推」がある(Hopper and Traugott1993)。「ウチー」の接頭辞化においても、これら 2 つのプロセスが存在したと考えられる。

「ウチー」の再分析は、複合動詞化という形で実現する。2 つの動作であっても連用形で直接繋ぐことが一般的であった上代では、前項と後項の再分析が起きやすかったと思われる。再分析は、理論的にはⅠ類からⅢ類のどの「ウチー」においても起こり得るものである。それぞれの再分析のプロセスは次のように想定される。

Ⅰ類は「[～(ヲ)ウチ][他動詞]」から「[～(ヲ)][ウチ+他動詞]」への変化である。仮に「ウチ鳴す」が複合動詞化していたとすれば、「[鼓(ヲ)ウチ][鼓(ヲ)鳴す]」→「[鼓(ヲ)][ウチ鳴す]」というように括弧付けが変更される。

Ⅱ類は、「[～(ヲ)ウチ][意志的自動詞]」から「[ウチ+意志的自動詞]」への変化である。この変化が起きていたと考えられる「ウチー」の 1 つである「ウチ越ゆ」は、本来、「[場所(ヲ)][馬(ヲ)ウチ][越ゆ]」という構造であったと推測される。しかし、前項が他動詞、後項が意志的自動詞であるⅡ類の場合、目的語の存在が再分析を阻む。すなわち、「[馬(ヲ)][ウチ越ゆ]」という構造が存在したとは考えにくいのである。したがって、Ⅱ類において再分析が起こるためには〈目的語の非表示〉という段階を想定する必要がある。「[山(ヲ)][馬(ヲ)ウチ][越ゆ]」において「ウチー」の目的語が表示されない「[山(ヲ)][ϕ ウチ][越ゆ]」という構造が生じ、それによって「[山(ヲ)][ウチ越ゆ]」への再分析が許容されるようになったと考えられる。

Ⅲ類は、「[～(ガ)ウチ][非意志的自動詞]」から「[～(ガ)][ウチ+非意志的自動詞]」への変化である。「ウチ降る」を例に挙げると、「[雨(ガ)ウチ][降る]」→「[雨(ガ)][ウチ降る]」となる。

想定されるⅠ類からⅢ類の再分析のプロセスは、(40)のようにまとめられる。

(40) 再分析のプロセス

I 類 : [~(ヲ)ウチ][他動詞] → [~(ヲ)][ウチ+他動詞]

([鼓(ヲ)ウチ][鼓ヲ鳴す] → [鼓(ヲ)][ウチ鳴す])

II 類 : [~(ヲ)ウチ][意志的自動詞] → [φ ウチ][意志的自動詞]

→ [ウチ+意志的自動詞]

([馬(ヲ)ウチ][越ゆ] → [φ ウチ][越ゆ] → [ウチ越ゆ])

III 類 : [~(ガ)ウチ][非意志的自動詞] → [~(ガ)][ウチ+非意志的自動詞]

([雨(ガ)ウチ][降る] → [雨(ガ)][ウチ降る])

このように、再分析は理論上 I 類～III 類の全てにおいて起こりうる。では、「ウチ」の打撃の意の希薄化はどのタイプの「ウチー」において、どのような要因によって起こったのだろうか。

5.2 「ウチ」の接頭辞化

再分析と類推によって「ウチ」の接頭辞化が起きたとすれば、そのプロセスは次のようなものであったと想定される。

(41) 「ウチ」の接頭辞化のプロセス(仮)

- (a) 2つの動詞の連続に過ぎない何らかの「ウチー」が慣用的に使用される。
- (b) (a)の「ウチー」において再分析(複合動詞化)が起きる。
- (c) 再分析が起きた「ウチー」において、何らかの要因によって前項「ウチ」の打撃の意味が希薄化し、類推により接頭辞として他の動詞に付される。

(c)の段階における「何らかの要因」とはどのようなものだろうか。「ウチ」の打撃の意は、「ウチー」の本来の統語的特徴が保持されている環境では失われにくいと思われる。本来の統語的特徴を有する環境とは、I 類・II 類では打撃の対象となり得る目的語を有する場合、III 類では強い接触を伴い得る自然現象を表す場合である。したがって、「ウチ」の希薄化が起こるのは、I・II 類において目的語の抽象化や省略が起きた場合や、III 類において接触を伴わない自然現象を表すようになった場合など、「ウチ」が打撃の意を表していないという解釈が可能となる環境においてであると考えられる。

さて、接頭辞化の契機となった「ウチー」には、上記プロセスの(a)～(c)の全ての段階が存在したはずである。上代において、(a)～(c)の用法が存在したことが用例から判断できる。「ウチー」は、Ⅰ類の「ウチ渡す」、Ⅱ類の「ウチ嘆く」と「ウチ+移動動詞」(「ウチ越ゆ」など)である。これらの「ウチー」において前項の希薄化が起きたと仮定すると、その再分析のプロセスは次のようなものになる。

(42) 「ウチ渡す」「ウチ嘆く」「ウチ越ゆ」の再分析

「ウチ渡す」 (15)[馬(ヲ)ウチ][馬(ヲ)渡す] → [馬(ヲ)][ウチ渡す]
→ (20)[ϕ][ウチ渡す]
「ウチ嘆く」 (22)[胸(ヲ)ウチ][嘆く] → [ϕ ウチ][嘆く] → (24)[ウチ嘆く]
「ウチ越ゆ」 [馬ウチ][越ゆ] → [ϕ ウチ][越ゆ] → (28)[ウチ越ゆ]

ここで注目されるのは、接辞化の契機となった可能性のある「ウチー」の再分析プロセスに、いずれの場合も〈目的語の省略〉という過程が見出せる点である。一方、比喻などによって抽象的な目的語をとるようになったⅠ類・Ⅱ類の「ウチー」や、接触を伴わない自然現象の描写に用いられるようになったⅢ類の「ウチー」は確認できない。このことから、〈ウチの意味の希薄化には目的語の省略が関与した〉という仮説を立てることができる。特定の「ウチー」が慣用的になり、目的語が自明となった文脈では、臨時的な目的語の省略は起こりえたであろう。そして、目的語を省略した用法が一般的になれば、本来その「ウチー」の目的語が何であったのかは意識されにくくなる。目的語の存在が意識されなくなれば、「ウチ」がどのような打撃を表していたのかも忘却され、結果として「ウチ」の打撃の意味は希薄化していくと考えられる。

このように、本研究では目的語の省略が接頭辞化の契機になったと考えるが、Ⅰ類とⅡ類のどちらが接頭辞化により深く関与したのかは、上代文献に現れる用例から確定することはできない。しかし、目的語の省略という同じ現象でも、他動詞を後項とするⅠ類は前項と後項の両者が補語を失うのに対し、意志的自動詞を後項とするⅡ類は前項の補語のみが失われる。前項の補語が失われ、後項には本来の補語があるというⅡ類(ウチ+意志的自動詞)においては、主要部としての後項に前項が従属しているという解釈が行われやすいはずである。この点から、Ⅱ類はⅠ類に比べて前項「ウチ」が接頭辞化しやすいと考えられる。また、目的語の省略が許容されるのは、その目的語が何であるのかが文脈上自明な場

合に限られる。Ⅱ類の「ウチー」には「ウチ越ゆ」などの「ウチ＋移動動詞」が含まれるが、「ウチ＋移動動詞」の「ウチ」の目的語である「馬」は、当時の一般的な移動手段であったと思われる。したがって、「ウチ＋移動動詞」の目的語「馬」は文脈上自明であり、その省略は比較的許容され易かったと考えられる。上代の「ウチー」に「ウチ＋移動動詞」の用例が多く見られる点も、「ウチ」の接頭辞化がⅡ類から起きたことと合致する。これらの理由から、「ウチ」の接頭辞化には「ウチ＋移動動詞」などのⅡ類の「ウチー」が関与した可能性が最も高いと現時点では考えておく。

しかし、Ⅱ類から接頭辞化が起きたことを積極的に示す根拠に乏しい点、Ⅰ類から前項の接頭辞化が起きる可能性も否定はできない点から、Ⅰ類とⅡ類のいずれが接頭辞化を引き起こしたのかについては現時点では断定できない。なお、Ⅲ類が接頭辞化を引き起こした可能性も完全に否定することはできないものの、(41)の(a)の段階と(c)の段階がどちらも存在するⅢ類の「ウチー」がないことから、その可能性は低いと考える。

以上から、「ウチ」の接頭辞化は、Ⅰ類あるいはⅡ類の複合動詞「ウチー」の目的語が省略されることによって前項「ウチ」の打撃の意味が希薄化し、その希薄化した「ウチ」が類推によって他の動詞に付されることによって起こったと想定される。このプロセスがⅡ類で起こったと仮定すると、プロセスは(43)のようになる。

(43) 「ウチ」の接頭辞化のプロセス

(a) [目的語(ヲ)ウチ][意志的自動詞] (2つの動詞の連続の段階)

↓ 慣用化による目的語の省略

(b) [φウチ][意志的自動詞] (目的語が省略された段階)

↓ 再分析

(c) [ウチ＋意志的自動詞] (複合動詞の段階)

↓ 「ウチ」の打撃の意の希薄化

(d) [接頭辞ウチ＋意志的自動詞] (前項が接頭辞化した段階)

↓ 既存の他類の「ウチー」への類推

(e) 前項が打撃を表す他の「ウチー」の前項を接頭辞として再解釈

↓ 打撃と無関係な動詞への類推

(f) 打撃と無関係な動詞への接頭辞「ウチ」の付加

目的語の省略がⅡ類ではなくⅠ類で起きたとすれば、(b)の段階が「[目的語(ヲ)][ウチ+他動詞]」、(c)の段階が「[φ][ウチ+他動詞]」となる。また(e)の段階は、その存在は想定されるが、(e)の段階で成立したことが明らかな「ウチー」は上代文献には確認できない¹²。(d)の段階で接頭辞「ウチ」が成立していれば、(e)の段階と(f)の段階はいずれも起きうるため、これらが同時並行的に起こる可能性や、(f)が(e)に先行する可能性もある。

いずれのプロセスであっても、「ウチ」の意味的な希薄化は目的語の抽象化などの要因によって〈強い接触→弱い接触→接触なし〉といったように段階的に起こるのではなく、目的語の省略によって打撃の意味が失われることで生じると考える。「ウチ見る」「ウチ靡く」といった例の存在から、接頭辞「ウチ」は打撃の意が完全に失われていることが分かる。第1章で扱った「トリ」の接頭辞化のように、複合動詞が比喩的に用いられることによって意味変化を起こすこともあるが、その場合はこれほど完全には意味が失われないと思われる。目的語の省略によって前項の打撃の意味が希薄化したとする本研究の仮説は、接頭辞「ウチ」の打撃の意がほぼ完全に失われていることと矛盾しない。

次章で扱うように、中古(特に中古後期)には「ウチー」は異なり語数・延べ語数ともに飛躍的に増加する。この事実から、プロセスの(f)の段階は中古の後期には極めて盛んであったといえる。しかし、上代にも(f)の段階に相当する「ウチ見る」「ウチ靡く」などが多く存在することから、上代には既に(f)の段階まで達していたと考えられる。

ただし、このプロセスはあくまで試論である。記紀万葉の時代よりも古い時代の文献資料が存在せず、変化の具体的なプロセスを検証する手立てがない以上、「ウチ」の接頭辞化が目的語の省略によると断定することはできない。今後の研究によっては、仮説の修正が必要になる可能性もある。しかし、目的語の省略が影響したと考えれば、「ウチ」の意味的な希薄化を合理的に説明できる。蓋然性の高い接頭辞化のプロセスとして、Ⅰ類あるいはⅡ類における目的語の省略と、類推による他の動詞への拡張を提案する。目的語の省略がⅠ類とⅡ類のいずれで起きたのかについては、今後検討する必要がある。

6. おわりに

本章では、「ウツ」の連用形「ウチ」の接頭辞用法が上代において既に定着していたことを確認し、「ウチ」の接頭辞化にはⅠ類あるいはⅡ類の「ウチー」における目的語の省略が

¹² 次章で触れる「雪」を主体とする「ウチ降る」は、(e)の段階による接頭辞化の可能性がある。

関係していたという仮説を提示した。

動詞連用形が接頭辞化する現象は、本研究で扱っている「トリ」や「ウチ」だけでなく、「カキ」「サシ」「ヒキ」などでも認められ、古代日本語における体系的な現象といえる。本章で想定した「ウチ」の接頭辞化のプロセスは、第 1 章で扱った「トリ」の接頭辞化のプロセスと異なるものであった。「トリ」「ウチ」だけでなく、「カキ」「サシ」「ヒキ」の接頭辞化のプロセスがどのようなものであるのかについても検討しなければならない。

また、接頭辞「ウチ」の意味については触れることができなかった。打撃と無関係な動詞に「ウチ」が積極的に付された理由を合理的に説明するには、接頭辞としての「ウチ」がどのような機能を有していたのかを解明することが欠かせないが、それを上代の様相から推定することは難しい。現時点では、近藤(1996、1997、1998ab、1999、2001)の提示する「弱意」に近いものであったと考えたい。近藤によれば、「弱意」は具体的な意味ではなく、それぞれの「ウチー」において具体化される抽象的な意味である。「具体→抽象」という変化は文法化における一般的傾向である。上代においても、前項が接頭辞と認められる「ウチー」が表わす動作は、「塩をつまんで糟湯酒をすする」((16)「ウチすすろふ」)、「雪を梅の花かと見てしまう」((17)「ウチ見る」)、「旅の途中で草を敷いて横になる」((26)「ウチ臥い伏す」)といったように、自ら積極的に行うような動作ではない。これは、近藤の主張する「弱意」と矛盾しない。しかし、打撃を表す「ウツ」から「弱意」が生じる理由については近藤の研究でも明らかにされていない。本研究においても、今後の課題とする。

第4章 中古日本語における動詞連接「ウチー」の展開

1. はじめに

前章では、接頭辞「ウチ」を前項とする動詞連接「ウチー」が上代から存在していたこと、接頭辞「ウチ」は他動詞あるいは意志的自動詞を後項とする「ウチー」における目的語の省略を契機に成立した可能性があることを主張した。「ウチ+他動詞」と「ウチ+意志的自動詞」のいずれから接頭辞化が起きたのかは確定できないが、前章で述べたように「ウチ+意志的自動詞」からである可能性が高い。前章で想定した、「ウチ+意志的自動詞」からの接頭辞化のプロセスを(1)として示す。

(1) 「ウチ」の接頭辞化のプロセス

(a) [目的語(ヲ)ウチ][意志的自動詞] (2つの動詞の連続の段階)

↓ 慣用化による目的語の省略

(b) [φウチ][意志的自動詞] (目的語が省略された段階)

↓ 再分析

(c) [ウチ+意志的自動詞] (複合動詞の段階)

↓ 「ウチ」の打撃の意の希薄化

(d) [接頭辞ウチ+意志的自動詞] (前項が接頭辞化した段階)

↓ 既存の他類の「ウチー」への類推

(e) 前項が打撃を表す他の「ウチー」の前項を接頭辞として再解釈

↓ 打撃と無関係な動詞への類推

(f) 打撃と無関係な動詞への接頭辞「ウチ」の付加

接頭辞「ウチ」を前項とする「ウチー」が中古において多く用いられることは周知であり、研究の蓄積も多い¹。しかし、それらの先行論は「ウチー」の意味用法に関するものが多く、「ウチー」の歴史的変遷を扱うものは阪倉(1983)、村田・前川(2013)に限られる。阪倉(1983)は「ウチー」の使用率が『落窪物語』『源氏物語』といった「平安中期以後の、特

¹ 阪倉(1983)、関(1993)、近藤(1996,1997,1998ab,1999,2001)、山王丸(2011)、村田・前川(2013)など。

にいわゆる日記物語の全盛期とされる時代の作品」(p.10)において急激に高くなることを指摘し、村田・前川(2013)はその事実をより詳細に示した。村田・前川(2013)によれば、総動詞数に占める「ウチー」の割合は『竹取物語』から『篁物語』まではおよそ1%台であるが(『伊勢物語』のみ2.2%)、『宇津保物語』で3%となったのち、『蜻蛉日記』4.4%、『落窪物語』4.3%、『枕草子』5.8%、『源氏物語』4.5%、『堤中納言物語』5.2%、『夜の寝覚』7.1%、『浜松中納言物語』6.0%、『狭衣物語』5.2%、『大鏡』4.3%、『とりかへばや物語』7.2%といったように急激に高くなる²。先行論で指摘されるこのような急激な増加は注目される現象である。この増加は、(1)に示したプロセスの(f)の段階に相当すると考えられる。

このように中古における「ウチ」の変遷を扱う研究も存在するが、先行論においても、どのような「ウチー」が、どのような過程で、何故増えたのかという具体的な発達の内幕については、未だ十分な検討がなされていない。

そこで本章では、日本語動詞連接史構築の一端として、中古の「ウチー」の概要を示し、上代から中古にかけて接頭辞「ウチ」による造語がどのように発展していったのかを探る。さらに、接頭辞化のプロセス(1)の整合性も検証する。

2. 中古における「ウツ」

動詞連接「ウチー」の検討に入る前に、前項となる「ウツ」の中古における用法を確認しておこう。

中古における「ウツ」は、上代と同様に打撃を伴う様々な動作を表す。目的語を有する他動詞としての用法が多い点は上代と同様だが、上代には見られないタイプの動作を表す例も見られる。上代には見られないタイプの例を以下に挙げておく。

- (2) 大将「なくてちりにしふるさとの」といひてたち給へば、南のおとゞより、かうじを一なげて、大将をウツ人あり。 (宇津保物語・くらびらきの中)
- (3) 北の方手をウチ、ねたがる。 (落窪物語・卷三)
- (4) 有度浜歌ひて、竹の笹のもとにあゆみ出でて、御琴ウチたるほど、ただいかにせむとぞおぼゆるや。 (枕草子・なほめでたき事)
- (5) 童べは、容貌すぐれたる四人、赤色に桜の汗衫、薄色の織物の裵、浮紋の表袴、紅の

² 『篁物語』の成立時期には諸説あるが、安部(1996)は「少なくとも原『篁』としての第一部は、『宇津保』に前後する九〇〇年代末期に成立していた蓋然性が高い」(p.25)とする。

ウチたる、さまもてなしすぐれたるかぎりを召したり。(源氏物語・若菜下)

(6) 舞台の左右に、楽人の平張ウチて、西東に屯食八十具、祿の唐櫃四十づつつづけて立てたり。(源氏物語・若菜上)

(7) 「昼より西の御方の渡らせたまひて、碁ウタせたまふ」と言ふ。(源氏物語・空蟬)

(8) 風吹けば浪ウツ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべら也(古今集・671)

(2)は物を投げて人にぶつける意、(3)は手を叩く意で「ウツ」が用いられている。(4)は琴を弾く意である。楽器の演奏に用いられる「ウツ」あるいは「ウチー」の例として、上代には「鐘はウツなれど」(万葉集・巻4・607・笠女郎)、「ウチ鳴す鼓」(万葉集・巻11・2641)があるが、琴について用いられた例は上代には見られない。(5)は衣類を砧で打つ意、(6)は平張りを設ける意である。(7)は碁を打つ意であり、『源氏物語』にはこの用法が多く見られる。これに類似の例として、双六を目的語とする「ウツ」もある。(8)は波を主体とする例であり、自動詞として使用されている。自動詞としての「ウツ」は上代にも霰を主体とする例が見られたが、波に関する例は中古に初出する³。

以上、中古の「ウツ」の用法を確認した。上代には見られないタイプの用法も出現するが、目的語を有する他動詞として打撃を伴う動作を表す用法が典型的である点、自動詞としての使用も見られる点において、上代との大きな違いは無いと言えよう。

3. 中古における「ウチー」

3.1 概要

各種索引を利用し、中古(平安時代初め～院政の開始まで)の和文資料に現れる「ウチー」を調査した。本研究で資料とした中古の和文作品を(9)に、「ウチー」のリストを(10)に挙げる。「ウチー」は異なり語数で382語得られた⁴。中古において3作品以上で使用されるものには下線を付した。それぞれの「ウチー」の文献ごとの用例数は、巻末に付した資料を見られたい。

³ 「ウチ寄す」など、波に係る「ウチー」は上代から存在する。

⁴ 3つ以上の動詞が連続する例(「ウチ越え行く」など)は、第1項と第2項の連続(「ウチ越ゆ」など)として扱った。この方法では、第2項と第3項が複合動詞化しているもの(「ウチ+見遣す」など)を排除する(「ウチ見る」に含める)ことになってしまうが、ここは中古の「ウチー」の概要を示すことが目的であるため、便宜的にこの方法をとる。ただし、3連以上のものしか見られない「ウチー」はそのまま立項した。

(9) 中古の和文資料⁵

『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『多武峯少将物語』『平中物語』『落窪物語』『蜻蛉日記』『宇津保物語』『大和物語』『三宝絵詞』『枕草子』『和泉式部日記』『源氏物語』『紫式部日記』『栄花物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『堤中納言物語』『更級日記』『狭衣物語』『大鏡』『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』

(10) 中古の「ウチー」

ウチ赤む(四段活用)、ウチ赤む(下二段活用)、ウチ上ぐ、ウチ欠^あ伸^くぶ、ウチ浅^あふ、ウチ嘲笑^あふ、ウチ遊ばす、ウチ遊^あぶ、ウチ徒け好く、ウチ当たる、ウチ当つ、ウチ預^あく、ウチ合は^あす、ウチあばむ、ウチ荒^ある、ウチ合^あふ、ウチ仰^あぐ、ウチ扇^あぐ、ウチ過^あつ、ウチ落^あゆ、ウチ歩^あむ、ウチ改^あむ、ウチ顕^あす、ウチ顕^ある、ウチ洗^あふ、ウチ荒^ある、ウチ諍^あふ、ウチ急^あぐ、ウチ出^あだす、ウチ出^あづ、ウチ言^あふ、ウチ答^あふ、ウチ入り来、ウチ入^ある(下二段活用)、ウチ動^あく、ウチ失^あふ、ウチ嘯^あく、ウチ歌^あふ、ウチ移^あす、ウチうつ伏^あす、ウチ項^あ垂^ある、ウチ領^あく、ウチ産^あむ、ウチ呻^あく、ウチ倦^あんず、ウチ瑩^あず、ウチ置^あく、ウチ起^あく、ウチ行^あふ、ウチ抑^あふ、ウチ貶^あむ、ウチ落^あとす、ウチ音^あなふ、ウチ大人^あぶ、ウチ驚^あかす、ウチ驚^あく、ウチおはします、ウチ生^あひ出^あづ、ウチ追^あふ、ウチ思^あす、ウチ仰^あせらる、ウチおほどく(四段活用)、ウチおほどく(下二段活用)、ウチ覆^あふ、ウチ覚^あゆ、ウチ思^あふ、ウチ面^あ瘦^あす、ウチ下^あろ^あす、ウチ屈^あまる、ウチ屈^あむ、ウチ掛^あかる、ウチ書^あく、ウチ掛^あく(下二段活用)、ウチ隠^あればむ、ウチ隠^あろふ、ウチ翔^あける、ウチ囲^あむ、ウチ挿^あ頭^あす、ウチ重^あなる、ウチ重^あぬ、ウチ畏^あまる、ウチかしづく、ウチかす^あむ(下二段活用)、ウチ数^あふ、ウチ傾^あく(四段活用)、ウチ固^あむ、ウチ語^あら^あふ、ウチ語^ある、ウチ勝^あつ、ウチ被^あく(四段活用)、ウチ被^あく(下二段活用)、ウチかなぐる、ウチ奏^あづ、ウチ交^あは^あす、ウチ替^あはる、ウチ変^あはる、ウチ買^あふ、ウチ交^あふ、ウチか^あふ(下二段活用)、ウチ返^あす、ウチ返^あり言^あつ、ウチ返^ある、ウチ顧^あみる、ウチ洩^あむ、ウチ通^あふ、ウチ薰^ある、ウチ聞^あく、ウチ聞^あこ^あゆ、ウチ着^あす、ウチ消^あゆ、ウチ霧^あらす、ウチ着^ある、ウチ霧^ある、ウチ切^ある、ウチ来^あ、ウチ具^あす、ウチ屈^あす、ウチ下^ある、ウチ口^あ覆^あふ、ウチ口^あ遊^あぶ、ウチ加^あふ、ウチ食^あふ、ウチく^あぶ、ウチ曇^ある、ウチ暗^あがる、ウチ暮^ある、ウチ化粧^あず、ウチけざやぐ、ウチ気色^あばむ、ウチ消^あつ、ウチけ^あぶる、ウチ試^あみる、ウチ毀^あす、ウチ零^あす、ウチ毀^あつ、ウチこほめかす、ウチ

⁵ 『篁物語』は、成立時期に諸説あるため資料に含めていない。

零る、ウチ毀る、ウチ籠む、ウチ子めく、ウチ越ゆ、ウチ御覧ず、ウチ殺す、ウチ声作り
す、ウチ声作る、ウチ装束く、ウチ騒^{きょうど}動く、ウチ下ぐ、ウチさくじり引き奪ふ、ウチささ
めく、ウチ止す、ウチ冷ます、ウチさらばふ、ウチ去る、ウチ戯^{あそ}る、ウチ猿^{さる}樂ふ、ウチ騒
ぐ、ウチ頻る、ウチ敷く、ウチ時雨る、ウチ鎮まる、ウチ鎮む、ウチしつらふ、ウチ忍ぶ、
ウチ偲ぶ、ウチしはぶく、ウチ縛る、ウチ潮垂る、ウチ湿る、ウチ霜枯る、ウチ知る、ウ
チしをる、ウチす、ウチ誦うず、ウチすかす、ウチすがふ、ウチ透く、ウチ梳く、ウチ過
ぐ、ウチ過ぐす、ウチすげむ、ウチ過ごす、ウチ遊^{あそ}ぶ、ウチ荒む、ウチ誦^よす、ウチ捨つ、
ウチ誦んず、ウチ損なふ、ウチ注ぐ、ウチ側む(四段活用)、ウチ側む(下二段活用)、ウチ側
むく、ウチ添ふ(四段活用)、ウチ添ふ(下二段活用)、ウチそぼる、ウチ染む、ウチ背く、ウ
チそよぐ、ウチそよめく、ウチ違ふ、ウチ叩く、ウチ疊^ななはる(四段活用)、ウチ疊^ななはる(下
二段活用)、ウチ立つ(四段活用)、ウチ立つ(下二段活用)、ウチ辿り思ひ出づ、ウチ頼む、ウ
チ平らぐ、ウチ倒す、ウチ絶ゆ、ウチ弛む(四段活用)、ウチ弛む(下二段活用)、ウチ垂る、
ウチ散らす、ウチ散る、ウチ使ふ、ウチ付く(四段活用)、ウチ付く(下二段活用)、ウチ継ぐ、
ウチ繕ふ、ウチ続く(四段活用)、ウチ続く(下二段活用)、ウチ眩く、ウチ潰る、ウチ連る、
ウチ調ず、ウチ解く(四段活用)、ウチ解く(下二段活用)、ウチ取る、ウチ眺む、ウチ鳴く、
ウチ泣く、ウチ慰む、ウチ嘆く、ウチ為す、ウチ鳴す、ウチなづらふ、ウチ名のる、ウチ
靡く、ウチ直す、ウチ涙ぐむ、ウチ悩む、ウチなゆ、ウチなよぶ、ウチ鳴らす、ウチ成る、
ウチ馴る、ウチ匂はし置く、ウチ匂ふ、ウチ寝、ウチ濡らす、ウチ濡る、ウチねぶ、ウチ
眠る、ウチ退く、ウチ拭ふ、ウチ載す、ウチのたまはす、ウチのたまふ、ウチ伸ぶ、ウチ
飲む、ウチ乗る、ウチ掃く、ウチ挟む、ウチ始む、ウチ恥ぢしらふ、ウチ恥ぢらふ、ウチ
果つ、ウチ外す、ウチ外る、ウチ放つ、ウチはなやぐ、ウチ阻む、ウチ延ぶ、ウチ羽振く、
ウチはむ、ウチはやぐ、ウチはやす、ウチ早む、ウチ逸る、ウチ腹立つ、ウチ払ふ、ウチ
腫る、ウチ僻む、ウチ光る、ウチ引く、ウチ弾く、ウチひそまる、ウチひそむ、ウチ独り
言つ、ウチ広ぐ、ウチ更かす、ウチ吹く、ウチ振く、ウチ葺く、ウチ更く、ウチふくだむ、
ウチ含む、ウチふくる、ウチ臥す、ウチふすぶ、ウチ塞がる、ウチ踏む、ウチ降る、ウチ
振る、ウチ古る、ウチ振ひ祈る、ウチ振る舞ふ、ウチ古めく、ウチ隔つ、ウチ細る、ウチ
ほのめかす、ウチほのめく、ウチ頬歪む、ウチ微笑む、ウチ申す、ウチ任す、ウチ紛ふ、
ウチ紛らわす、ウチ紛る、ウチ紛ればむ、ウチ勝る、ウチ混じる、ウチ混ず、ウチ微睡む、
ウチ招く、ウチ真似ぶ、ウチ守^{まも}る、ウチ守る、ウチ参る、ウチ身じろぐ、ウチ乱る(四段活
用)、ウチ乱る(下二段活用)、ウチ見ゆ、ウチ見る、ウチ向かふ、ウチ向く、ウチむつかる、

ウチ群る、ウチ廻る、ウチ持つ、ウチもてなす、ウチ物語らふ、ウチ物古る、ウチ盛る、
ウチ休む(四段活用)、ウチ休む（下二段活用）、ウチ休らふ、ウチやつす、ウチやつる、ウチ
 破る、ウチ止む、ウチ遣る、ウチ歪む(四段活用)、ウチ歪む(下二段活用)、ウチ揺るぐ、ウ
 チ許す、ウチ緩ぶ(四段活用)、ウチ緩ぶ(下二段活用)、ウチ寄す、ウチ世馴る、ウチ呼ばふ、
ウチ読む、ウチ詠む、ウチ寄る、ウチ喜ぶ、ウチよろぼふ、ウチ接ず、ウチ忘る、ウチ渡
す、ウチ渡る、ウチわななく、ウチ侘ぶ、ウチ笑ふ、ウチ割る、ウチゐる、ウチ笑む、ウ
 チ怨ず、ウチ拌む、ウチ折る

以下、中古の「ウチー」の様相について具体例を挙げながら見ていく。考察に際しては、
 前章と同様に「ウチー」を後項動詞の性質によりⅠ～Ⅲ類に分類する。Ⅰ類は「ウチ＋他
 動詞」、Ⅱ類は「ウチ＋意志的自動詞」、Ⅲ類は「ウチ＋非意志的自動詞」である。上代に
 はそれぞれⅠ類「他動詞ウチ＋他動詞」、Ⅱ類「他動詞ウチ＋意志的自動詞」、Ⅲ類「非意
 志的自動詞ウチ＋非意志的自動詞」としていたが、接頭辞「ウチ」による造語((1f)の段階)
 が上代よりも発展していると考えられる中古においては、前項の自他が判定できないもの
 が多いため、後項動詞の性質のみによって分類する。

3.2 Ⅰ類の「ウチー」

Ⅰ類は「ウチ＋他動詞」という構造である。上代のⅠ類の「ウチー」はほとんどがヲ／
 ㇿ格表示される目的語を有していたが、中古には具体的な目的語を伴わない例が増加する。
 目的語を有する例にも有さない例にも、前項が接頭辞であるものが存在する。

3.2.1 目的語を伴うもの

次に挙げる「ウチ＋他動詞」では、後項が打撃を伴う動作を表すことから、前項「ウチ」
 は接頭辞ではなく、それぞれ「門」「扇」「冠」についての打撃を表していると考えられる。
 かような「ウチー」は上代から中古まで少数見られる。

- (11) いと忍びて通ひたまふところの、道なりけるを思し出でて、門ウチ叩かせたまへど、
 聞きつくる人なし。 (源氏物語・若紫)
- (12) 弁の君、扇はかなうウチ鳴らして、 (源氏物語・若紫)
- (13) さて、人打ちけるは、それぞなめげに言ひたてりしを、にくさに、冠をなんウチ落と

して、男ども引きふれ侍りし。

(落窪物語・巻二)

これに対し(14)～(16)の「ウチ+他動詞」は、「太刀」「筆の先」「顔」といった具体的な目的語が存在するが、「ウチー」がそれらに対する打撃を表しているとは文脈上考えられず、前項「ウチ」は接頭辞と判断できる。このタイプは上代には「ウチ見る」「ウチすすろふ」など僅かであったが、中古には増加する。(14)～(16)は「ウチ置く」「ウチ見る」「ウチ赤む(下二段活用)」の例である。

- (14) 物に襲はるる心地して、おどろきたまへれば、灯も消えにけり。うたて思さるれば、
[太刀]を引き抜きて、ウチ置きたまひ、右近を起こしたまふ。 (源氏物語・夕顔)
- (15) 墨、心とどめて押し摺り、[筆の先]ウチ見つつ、こまやかに書きやすらひたまへる、いとよし。 (源氏物語・野分)
- (16) 君、召し寄せて、「昨日待ち暮らししを。なほあひ思ふまじきなめり」と怨じたまへば、[顔]ウチ赤めてゐたり。 (源氏物語・帚木)

(14)の「ウチ置く」は、「勢いよく置く」といったように「ウチ」に打撃の意を認めて解釈することも不可能ではないように思われる。しかし、近藤(1997)は『源氏物語』中の「置く」と「ウチ置く」を比較し、「ウチ置く」は「主体の意志性・意図性が弱く、対象への積極的な働きかけという面が弱い」(p.15)と指摘する。この近藤の指摘が正しければ、「勢いよく置く」のような打撃を伴う動作とは考えにくい。また、「見る」「赤む」はいずれも接触を伴う動詞ではないため、前項「ウチ」は打撃を表しえない。「ウチ置く」は 12 作品に計 70 例、「ウチ見る」は 14 作品に計 60 例、「ウチ赤む」は 4 作品に計 10 例見られ、定着していた動詞連接であったと考えられる⁶。

3.2.2 目的語を伴わないもの

具体的な目的語を伴わない「ウチ+他動詞」は非常に多く見られる。以下に挙げる例のように、発話や思考に関わる他動詞を後項とするものが多い。

⁶ 本文中に挙げた用例数には、特に指定が無い限り 3 連以上のものは含めていない。以下同様。

- (17) ふしおきは、ただをさなき人をもてあそびて、「いかにして網代の氷魚にこととはむ」
とぞ、心にもあらでウチ言はるる。(蜻蛉日記・上)
- (18) 人のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、ウチ語らひて心のままに教
へ生ほし立てて見ばや、と思す。(源氏物語・若紫)
- (19) うちとけずあはれをかはしたまふ御仲なれば、かくやむごとなき方に定まりたまひぬ
るを、ただならずウチ思ひけり。(源氏物語・藤裏葉)
- (20) 「人出でたまひなば、とくさせ。このごろ盗人いと多かなり。火危ふし」など言ひた
るが、いとむつかしう、ウチ聞く人だにあり。(枕草子・宮仕人の里なども)
- (21) 年ごろウチ忘れたりつるいにしへの御事をさへとり重ねて、(源氏物語・椎本)

「ウチ言ふ」は 12 作品に計 37 例、「ウチ語らふ」は 11 作品に計 70 例、「ウチ思ふ」は 7 作品に計 23 例、「ウチ聞く」は 7 作品に計 25 例、「ウチ忘る」は 7 作品に計 20 例確認できることから、いずれも複合動詞として定着していたと見られる。発話や思考に関わる「ウチ+他動詞」として、このほか「ウチ思す」「ウチ誦す」「ウチつぶやく」「ウチのたまふ」などがいずれも複数作品に使用されている。これらは目的語が存在せず、文脈的にも打撃を表しているとは考えられないことから、前項「ウチ」は接頭辞と判断できる。このタイプの「ウチー」は上代には見られず、中古になって新しく出現する。

以上のように、上代のⅠ類は具体的な目的語を有する「ウチー」のみであったが、中古には具体的な目的語を有さない「ウチー」も増加しているとまとめられる。目的語を有さない、発話・思考を表すタイプの「ウチ+他動詞」には複数作品で使用されるものが多い。かような「ウチー」は複合動詞として定着していた可能性がある。しかし、これらの「ウチー」は後項動詞の単独用法との顕著な差異が認められず、用法は特殊化していない。用法の特殊化が認められないにも関わらず多くの「ウチー」が定着していたと考えられる点は注目される。

3.3 Ⅱ類の「ウチー」

Ⅱ類は「ウチ+意志的自動詞」という構造である。上代には移動動詞を後項とするものを中心に比較的多く見られた。中古においても「ウチ+意志的自動詞」は多く見られるが、移動動詞を後項とするものは減少する。

3.3.1 移動動詞を後項とするもの

前項「ウチ」が打撃を表す「ウチ＋意志的自動詞」は、上代にも中古にも散見される程度であり、顕著な増減はないと思われる。「ウチ出づ」の例を以下に挙げる。

- (22) 「おそし」とあれば、弁少将拍子ウチ出でて、忍びやかにうたふ声、鈴虫にまがひたり。
(源氏物語・篝火)

この例は「拍子を打って出る」という文脈であり、「ウチ」は弁少将が拍子を打つ意を表している。「ウチ」と「出づ」は別個の動詞として機能しており、複合動詞ではなく単なる2つの動詞の連続の例である。中古における「ウチ出づ」は後述するように「口に出す」意で用いられる例が多く、(22)のような例は稀である。

上代のⅡ類には「ウチ越ゆ」「ウチ出づ」「ウチ行く」といった移動動詞を後項とする「ウチー」が多く見られ、上代の「ウチー」全98例中17例を占めた。前章で述べたように、「ウチ＋移動動詞」における前項「ウチ」は本来「馬を鞭打つ」意を表していたと考えられるが、「馬」が「ウチ＋移動動詞」の目的語となる例は見られなかった。また、(22)のように「ウチ＋移動動詞」が「馬」以外の目的語を伴う例も上代には確認できない。(22)は、上代には存在しないタイプの「ウチー」である。

「ウチ＋移動動詞」は、上代の例も中古の例も、移動の起点・経由点・着点などの補語を伴うことが多い点で特徴的である。中古においても「ウチ越ゆ」「ウチ通ふ」「ウチ過ぐ」といった「ウチ＋移動動詞」が見られるが、上代と比べ相対的に少ない。

- (23) やり過して、今はたちてゆけば、関ウチ越えて、打出の浜に死にかへりていたりたれば、先立ちたりし人、舟に菰屋形ひきてまうけたり。
(蜻蛉日記・中)
- (24) かの四の君をも、なほかれがれにウチ通ひつつ、めざましうもてなされたれば、心とけたる御婿の中にも入れたまはず。
(源氏物語・賢木)
- (25) 駒並めてウチ過ぎたまふにも心のみ動くに、
(源氏物語・潯標)

上代には「ウチ越ゆ」が7例、「ウチ行く」が5例、「ウチ出づ」が3例見られたが、中古にも残るのは「ウチ越ゆ」のみである。その「ウチ越ゆ」も4作品に各1例ずつ見られるのみであり、上代と比べて使用頻度は低い。「ウチ行く」は中古以降には用例が確認でき

ない。上代においても全例が大伴家持による使用であり、家持が独自に創出した動詞連接であったと考えられる。「ウチ出づ」は中古以降用法が大きく変化する。中古においては 14 作品に計 94 例使用されるが、主に「思っていることを口に出す」意で使用され、上代のように場所を移動する意で使われた例は見られない⁷。

(26) 人のむすめのかしづく、いかでこのおとこに物いはむと思けり。ウチ出でむことかた
くやありけむ、物病みになりて死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」と言ひけるを、

(伊勢物語・45 段)

(27) え思すさまなる乱れ言もウチ出でさせたまはで、

(源氏物語・真木柱)

上代の「ウチ出づ」は「～へ出る」「出発する」といった意味の自動詞として用いられていたが、中古には「口に出す」といった意味の他動詞として用いられている。「出発する」意の「ウチ出づ」が用法変化を起こしたことによって「口に出す」意が成立したのか、あるいは「出発する」意の用法と無関係に「口に出す」意の「ウチ出づ」が成立したのか、については、現時点では明らかでない。

なお、中古には「出づ」に対する他動詞「出だす」を後項とする「ウチ出だす」も見られ、「ウチ出づ」とほぼ同じ意味で使用される。しかし、「ウチ出だす」は 3 作品計 10 例であり、「ウチ出づ」の方がより頻用されたことが分かる⁸。

(28) 「露は別の涙なるべし」といふことを頭の中將のウチ出だしたまへれば、

(枕草子・宰相の中將齊信)

⁷ 『古今集』や『新古今集』には上代と同様の「ウチ出づ」があるが、中古に使用された例とは認めがたい。『古今集』1073 番歌は『万葉集』巻 3・272 番歌に酷似しており、ほぼ「ウチ越え見れば」を「ウチ出でて見れば」に改めたのみである。新日本古典文学大系『古今和歌集』によれば、『万葉集』の歌の「異伝」に過ぎない。同様に、『新古今集』675 番歌は『万葉集』巻 3・318 番歌とほぼ同じである。

なお、中古の「ウチ出づ」には「波」などを補語とする例もある。かような「ウチ出づ」も、人の移動を表さない点で、上代の例とは異なる。

谷風にとくる氷のひまごとにウチ出づる波や春のはつ花 (古今集・12)

⁸ 第 2 章で見たように、「トリー」においても「トリー出だす」よりも「トリー出づ」が圧倒的に優勢である。「一出づ」から「一出だす」への変遷については、関(1977)で検討されている。

3.3.2 移動動詞を後項としないもの

「ウチ+移動動詞」が減少する一方で、移動動詞ではない意志的自動詞を後項とする「ウチー」は増加する。このタイプは、動作主体以外の項を伴わない。上代には「ウチ嘆く」「ウチ靡く(横になる意)」「ウチ群る」「ウチ臥い伏す」などが確認できたが、延べ語数は多いものの、異なり語数はさほど多くなかった。これに対し、中古には異なり語数・延べ語数ともに大幅に増加する。

- (29) 「さらば、かの人の御子になりておはしませよ」と聞こゆれば、ウチ領きて、いとよ
うありなむ、と思したり。(源氏物語・若紫)
- (30) 心得ず、ウチ傾きたまへるに、つつみに衣箱の重りかに古代なる、ウチ置きて押し出
でたり。(源氏物語・末摘花)
- (31) 「(略)今はじめていかにもものを思ひはべらず」とて、ウチ背きたまへる、らうたげ
なり。(源氏物語・真木柱)
- (32) ウチ臥したまへるに、僧都の御弟子、惟光を呼び出でさす。(源氏物語・若紫)
- (33) まして、ここかしこにウチ忍びて通ひたまふ所どころは、人知れずのみ数ならぬ嘆き
まसारも多かり。(源氏物語・葵)
- (34) 心ことにウチ化粧じたまへる御ありさま、今見たてまつる女房などは、
(源氏物語・若菜上)

このように、「ウチ」は様々な意志的自動詞に上接する。いずれの例も、「領く」「首をか
しげる」「背中を向ける」「横になる」「人目を避ける」「化粧をする」といった人の意志的
な動作を表すが、打撃の対象は存在せず、前項「ウチ」は接頭辞と認められる。「ウチ領く」
は5作品に9例、「ウチ傾く」は7作品に15例、「ウチ背く」は4作品に12例、「ウチ臥す」
は15作品に58例、「ウチ忍ぶ」は8作品に40例、「ウチ化粧ず」は2作品に5例見られ
る。中古に初出する「ウチ+意志的自動詞」にも、複数作品で使用されるものが多いこと
がわかる。既に見た「ウチ+他動詞」と同様、定着していると考えられるが、意味の特殊
化は認められない。

上代のⅡ類は移動動詞を後項とする「ウチー」が多く、移動動詞を後項としない「ウチ
ー」は比較的少なかったが、中古には移動動詞ではないタイプが大幅に増加しているとま
とめられる。中でも、「ウチ出づ」のように用法が上代と中古で全く異なる「ウチー」があ

る点や、中古に初出する「ウチー」にも複数作品で使用され定着していると考えられるものが認められる点は注目される。

3.4 Ⅲ類の「ウチー」

Ⅲ類の「ウチー」は非意志的自動詞を後項とする。このタイプの「ウチー」は、上代にはほぼ自然現象を表すものに限られた。前章で見たように、上代には前項が非意志的な打撃を表すものとして「ウチ降る」「ウチ寄す」など、前項が接頭辞であるものとして「ウチ霧らす」「ウチ靡く」などが見られた。中古には、自然現象を表す「ウチー」に用法の拡大が認められるほか、自然現象を表さない非意志的自動詞を後項とする「ウチー」も多数出現する。

3.4.1 自然現象を表すもの

自然現象を表す「ウチー」は、中古には前項が接頭辞であるものが増加する。(35)は前項が打撃を表す例、(36)～(39)は接頭辞と考えられる例である。

- (35) もとごとに波ウチ寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかよふ。 (土佐日記)
- (36) またの日、雪ウチ降り、空のけしきもものあはれに、過ぎにし方行く先の御物語聞こえかはしたまふ。 (源氏物語・若菜上)
- (37) 雪ウチ散り風はげしうて、 (源氏物語・賢木)
- (38) 日は出でたれども、空はなほウチ曇りたるに、 (枕草子・見物は)
- (39) 風冷やかにウチ吹きて、やや更けゆくほどに、 (源氏物語・紅葉賀)

「ウチ寄す」は波に関して用いられている。9作品計13例と延べ語数はさほど多くないものの、波が岸に寄せる様子を表す複合動詞として定着していたと考えられる。上代には「駿河」にかかる枕詞として使用されるが、それも「波の打ち寄せる駿河」の意とされており、上代と中古の「ウチ寄す」の用法に本質的な差は無いと考えられる。(8)に挙げたように中古の「ウツ」には単独で波を主体とする例があることから、前項「ウツ」は「波が岸を打つ」意を残していると認められる。

「ウチ降る」は上代には雨を主体とする例のみであったが、中古には雨だけでなく(36)のように雪を主体とする例が現れる。霰を主体とする「ウツ」が上代に見られること、雨

が地面に当たる際には打撃(強い接触)が生じることから、「ウチ降る」の「ウチ」は本来的には「雨が地を打つ」意を表していたと考えられる。しかし、雪が地面に落ちる際に打撃が生じるとは考えにくく、「雪」を主体とする「ウチ降る」の存在から、中古の「ウチ降る」は「ウチ」の打撃の意が失われつつあったことが分かる⁹。かような「ウチ降る」は、本来的には打撃を表していた「ウチ」が接頭辞化したものと認められるため、接頭辞化のプロセス(1)の(e)の段階(前項が打撃を表す「ウチー」の前項を接頭辞として再解釈する段階)によって成立したものである可能性がある。(e)の段階で成立する「ウチー」は、前項が打撃を表すものも接頭辞であるものも形態が同じであり、古代語においては発見が難しい。(36)は、接頭辞化プロセスの(e)の段階が実際に存在した証左になり得る例である。

このほか、「ウチ散る」「ウチ曇る」「ウチ吹く」は、いずれも接触を伴う動きではなく、「ウチ」が打撃を表すとは考えられない。「ウチ」は接頭辞と認められる。雪を主体としない「ウチ降る」の出現や、上代には見られない「ウチ散る」「ウチ曇る」「ウチ吹く」などの存在から、自然現象を表す「ウチー」の用法が中古にかけて拡大していることが窺える。

3.4.2 自然現象ではないもの

自然現象とは言い難い「ウチー」は、上代には「心理的に引き寄せられる」意の「ウチ靡く」のみであったが、中古には多く見られる。

(40) 片つ方には、おぼつかなく悲しきことのウチ添ひて絶えぬを、 (源氏物語・若菜上)

(41) 源氏の、ウチ続き後にゐたまふべきことを、世人飽かず思へるにつけても、
(源氏物語・若菜下)

(42) 夕闇過ぎて、おぼつかなき空のけしきの曇らはしきに、ウチ湿りたる宮の御けはひも、
いと艶なり。 (源氏物語・螢)

(43) いみじうものをあはれと思して、所どころウチ赤みたまへる御まみのわたりなど、言
はむ方なく見えたまふ。 (源氏物語・明石)

(44) 風につきて吹きくる匂ひのいとしるくウチかをるに、ふとそれとウチ驚かれて、
(源氏物語・総角)

⁹ 雨に関する用例のある「ウチ降る」以外の「ウチー」として、「ウチす」を挙げておく。なお、「ウチす」は雨以外にも様々な動作について用いられる。

時雨ウチしてもものあはれなる暮つ方、 (源氏物語・葵)

- (45) 「渡殿なる宿直人起こして、紙燭さして参れと言へ」とのたまへば、「いかでかまからん、暗うて」と言へば、「あな若々し」とウチ笑ひたまひて、 (源氏物語・夕顔)
- (46) またみたる大人、「げに」とウチ泣きて、 (源氏物語・若紫)
- (47) はじめこそ心にくもつくりけれ、今はウチ解けて、 (伊勢物語・23 段)

これらの「ウチー」は、いずれも打撃を伴う動きを表していないことから、前項「ウチ」は接頭辞と考えられる。「ウチ赤む(四段活用)」「ウチ笑ふ」「ウチ泣く」といった人の表情に関する「ウチー」や、「ウチ驚く」「ウチ解く(下二段活用)」といった人の心的状態を表す「ウチー」が目立つ。

「ウチ赤む」には、(16)に挙げたように対応する他動詞「ウチ赤む(下二段活用)」が存在する。自他いずれにも「ウチ」が付されるものとして、このほか「ウチ被く(四段活用／下二段活用)」「ウチ添ふ(四段活用／下二段活用)」「ウチ続く(四段活用／下二段活用)」「ウチ緩ぶ(四段活用／下二段活用)」などがある。接頭辞「ウチ」が自他を選ばずに前接したことが分かる。なお、上代にも「接頭辞ウチ+他動詞」(「ウチ見る」など)と「接頭辞+非意志的自動詞」(「ウチ霧らす」など)が共存するが、自他交替形のいずれにも「ウチ」が前接する例は上代文献には見られない。かような例が中古に複数出現することは、「ウチ」の接頭辞としての造語力の高まりを示す事実といえよう。

「ウチ笑ふ」「ウチ泣く」といった表情を表す「ウチー」として、ほかに「ウチ笑む」「ウチ微笑む」「ウチ涙ぐむ」なども存在する。「ウチ笑ふ」は 11 作品に計 198 例、「ウチ笑む」は 12 作品に計 102 例、「ウチ微笑む」は 7 作品に計 36 例、「ウチ泣く」は 15 作品に計 215 例、「ウチ涙ぐむ」は 5 作品に計 12 例使用されており、いずれも中古において定着していた「ウチー」であることが分かる。

心的状態を表す「ウチー」でもっとも多用されたのは「ウチ解く」であり、20 作品に計 257 例使用される。用例の多さから、「心を許す」「くつろぐ」「油断する」といった意を表す複合動詞として定着していたことは明らかである。なお、後項となる「解く」が単独で使用される場合には、恨み、心、官職、雪、氷、紐などが解ける意を表す。これに対し「ウチ解く」は、心的に「解ける」意に特化しており、官職、氷、紐などが解ける意で用いられる例はほとんど見られない。僅かに、和歌などには氷や露などを主体とする「ウチ解く」

が出現するが、かような例もほとんどが「心を許す」といった心的内容を含意している¹⁰。

「ウチ解く」は、中古において明らかに意味が特殊化している数少ない「ウチー」の 1 つである。

以上、上代には自然現象を表す「ウチー」のみが見られたが、中古には自然現象を表さない動詞を後項とする「ウチ＋非意志的自動詞」が増加しているとまとめられる。中古に初出する自然現象ではないタイプの「ウチー」には複数作品で多用されたものも多い。

3.5 まとめ

以上、ごく一部ではあるが中古の「ウチー」の実例を挙げた。前章で見た上代は、具体的な目的語を伴う「ウチ＋他動詞」、移動動詞を後項とする「ウチ＋意志的自動詞」、自然現象を表す「ウチ＋非意志的自動詞」が中心であった。これに対し中古には、具体的な目的語を伴わない「ウチ＋他動詞」、移動動詞を後項としない「ウチ＋意志的自動詞」、自然現象を表さない「ウチ＋非意志的自動詞」など、上代には見られない、あるいは少ないタイプの「ウチー」が非常に多く確認される。

前章で見た上代のⅠ類の「ウチー」は、前項が打撃を表すものも接頭辞であるものも、「〔～(ヲ)〕〔ウチ＋他動詞〕」という共通の構造を有している。上代のⅡ類に多い「ウチ＋移動動詞」は、目的語が存在しないが、本来的には「ウチ」が後項動詞の表す移動を実現するための「馬を鞭打つ」動作を表していたと考えられる。この点で、「ウチ＋移動動詞」は「ウチ嘆く」など他の「ウチ＋意志的自動詞」と異なる。上代のⅢ類は、「ウチ降る」「ウチ寄す」のように前項が打撃を表すと考えられるものも、「ウチ霧らす」「ウチ靡く」のように前項が接頭辞であるものも、自然現象を表す動詞を後項とするという共通点がある。すなわち上代の「ウチー」は、前項が接頭辞化しているものであっても、前項が打撃を表す「ウチー」と統語的特徴や後項の性質が類似しているものが多い。

これに対し、中古に多く見られる「ウチ言ふ」「ウチ語らふ」「ウチ領く」「ウチ化粧ず」「ウチ笑ふ」「ウチ解く」などは、いずれも後項が打撃と無関係な動作を表すものである。Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類の全てにおいて後項の拡大が起きていること、打撃と無関係な動作を表す動詞に「ウチ」が多く付されることは、中古には接頭辞「ウチ」による造語が上代と比べ非常に発達していることを示している。接頭辞化プロセスの(f)の段階(打撃と無関係な動

¹⁰ 今は早ウチ解けぬべき白露の心置くまで夜をや経にける

(後撰集・284・大輔)

春来れば山田の氷ウチ解けて人の心にまかすべら也

(拾遺集・46・在原元方)

詞に「ウチ」が付される段階)が、中古には盛んであったことが分かる。

4. 「ウチー」の発展の過程

4.1 時期区分

阪倉(1983)、村田・前川(2013)では、「ウチー」の使用率が中古の後期に入って急激に高くなることが指摘されている。したがって、「ウチー」の発展の過程を探るには、中古の前期と後期の差異を見る必要がある。

本研究で「中古」とする時期は、平安遷都の 794 年(8 世紀末)から院政開始の 1086 年(11 世紀末)のおよそ 300 年間である。以下、8 世紀末から 10 世紀前半までを中古前期、10 世紀後半から 11 世紀末までを中古後期とする。「ウチー」の用例が豊富に得られる和文資料は大部分が中古後期に成立したと考えられるものであり、中古前期の成立と目される作品は『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『古今集』に限られる。以下、中古の「ウチー」の様相を、中古前期と中古後期に分けて考察していく。

4.2 中古前期

ここでは中古前期の作品として『竹取物語』『土佐日記』『伊勢物語』を用いる。『古今集』は韻文であるため、別に扱う。これらの作品に用いられる「ウチー」は次の通りである。上代と共通する形態の「ウチー」には下線を付した。

(48) 中古前期散文の「ウチー」

竹取物語：ウチ上ぐ、ウチ出づ、ウチ入る(下二段活用)、ウチ懸く、ウチ着す、ウチくぶ、
ウチ過ぐ、ウチ潰る、ウチ嘆く

土佐日記：ウチはむ、ウチ群る、ウチ寄す

伊勢物語：ウチ出づ、ウチ解く、ウチながむ、ウチ泣く、ウチ寝、ウチ臥す、ウチ物語ら
ふ、ウチ遣る、ウチわぶ

中古後期と比べるとテキストの量が少ないが、『伊勢物語』を除き、上代と共通する「ウチー」が目立つ。中には「ウチ出づ」のように用法が変化しているものもあるが、「ウチー」全体の様相としては、上代との間に顕著な差異は認められない。

ただし、「ウチ潰る」「ウチ泣く」「ウチ解く」といった、上代には見られないタイプであ

る自然現象を表さない「ウチ＋非意志的自動詞」が複数確認できることから、上代から中古前期にかけて新たな「ウチー」が生産されていたことも明らかである。しかし、中古後期には非常に多い発話・思考を表す「ウチ＋他動詞」が中古前期には見られないことから、「ウチー」の生産は中古後期ほど活発でなかったといえる。これは、「ウチー」の使用率が中古後期以降の作品においてに急激に高くなるという阪倉(1983)、村田・前川(2013)の指摘とも合致する。

4.3 中古後期

中古に見られる「ウチー」の大部分は、中古後期に初出する。その1つが、発話・思考を表す「ウチ＋他動詞」である。中古において多用される「ウチ言ふ」「ウチ思ふ」「ウチ語らふ」「ウチ聞く」「ウチ誦す」などは、中古前期まではほとんど出現しない。この他にも、上代から中古前期には少ない「ウチー」が中古後期に至って多く出現する。

中古後期に初出する「ウチー」には、当時社会的に定着していたと考えられるものと、個人の臨時的な造語と考えられるものがある。厳密にはそれぞれの「ウチー」で個別に考察する必要があるが、ごく単純に考えれば、複数の作品で使用される「ウチー」は社会的に定着していた複合動詞である可能性が高い。中古後期に初出する「ウチー」およそ350語のうち、123語は3作品以上で使用される。中古後期に初出する「ウチー」の30%以上が、臨時的に作られたものではなく、定着していたものと考えられるのである。しかし、「ウチ言ふ」「ウチ泣く」など、多くの用例があり社会的に定着していたと考えられる「ウチー」に意味的な特殊化が認められないものが多い点は注目される。

語彙化し、社会的に定着していた「ウチー」の典型例として挙げられるのは、既述した意味の特殊化が認められる「ウチ解く」や、以下に述べる「ウチ返す」である。「ウチ返す」には副詞的な用法が存在することが知られている¹¹。(49)は「くりかえし」、(50)は「反対に」といずれも副詞的に解釈される。

- (49) ゆゆしくて、めでたき人と聞こゆとも、つらういみじうもあるべきかな、目に見えぬ
仏神を頼みたてまつりて、人の御心をも宿世をも知らでなど、ウチ返し思ひ乱れたり。
(源氏物語・明石)

¹¹ 中古の「ウチ返す」に関しては近藤(1998a)に詳しい。

(50) 「今、ウチ返し仕うまつらんに、御心はゆきなん。思ひおきし事違へじ」とのたまふ。

(落窪物語・巻二)

筆者の調査した限りでは「返す」の単独例には副詞的な用法が見られないことから、この意の用法は「ウチ返す」に特有のものといえる。「ウチ」と「返す」の単純合成からは得られない特殊化した意味であることから、「ウチ返す」は語彙化して定着していたと考えられる¹²。このような、中古前期には見られず、かつ中古後期には定着していた「ウチー」は、いつ頃成立したものなのだろうか。中古前期から存在したが文献に現れなかったとも考えられるが、現時点では明らかにできておらず、今後の課題としておきたい。

複数作品で見られる「ウチー」が存在する一方、中古後期には 1 作品のみに現れる「ウチー」が増加する。阪倉(1983)が「一作品に限り表^マわ^レてくる「うち動詞」を、その作品の「独自語」と呼ぶことにするが、これは、その作品(作者)における新造語というように、一往は見なしでもよいであろう」(p.6)と述べるように、1 つの作品のみに使用される「ウチー」は、その作品を著した人物が独自に生み出した「ウチー」である可能性がある。中古後期の「ウチー」のうち、139 語は「独自語」である。「独自語」は、中古前期には『竹取物語』『伊勢物語』に各 1 例と少なく、中古後期の『源氏物語』(39 語)、『枕草子』(18 語)、『宇津保物語』(16 語)などに多く出現する。このような「独自語」としての「ウチー」が多数出現するということは、接頭辞「ウチ」による造語が個人レベルで盛んに行われていたことを示しているといえよう。以下に、「独自語」である「ウチー」の例を挙げておく。

(51) まいて、ウチ徒け好きたる人の、年つもりゆくままに、いかに悔しきこと多からむ。

(源氏物語・朝顔)

(52) 古き者どもの、さもえいきはなるまじきは、来年の国々、手を折りてウチ数へなどして、ゆるぎありきたるも、いとほしうすさまじげなり。 (枕草子・すさまじきもの)

(53) おもひかけざりし人の、昨日今日ウチ産み出したまへるこそはあめれ。

(宇津保物語・国ゆずりの下)

¹² 副詞的な「ウチ返す」は『落窪物語』『源氏物語』『後撰集』などで見られる。また、『栄花物語』には重複形「ウチ返しウチ返し」の例がある。

この宮には「あさましうことのほかにもありける身かな」とウチ返し／＼我が御身一つを恨みさせたまへど、かひなかりけり。 (栄花物語・巻十二)

4.4 まとめ

以上、中古前期から後期にかけての「ウチー」の変遷を見た。中古前期には、上代には少ないタイプの「ウチー」も存在はするものの、上代と共通する「ウチー」も多く、全体としては上代との顕著な違いは見られない。ところが中古後期に入ると、「ウチー」の後項となる動詞の幅が急激に拡大し、その結果「ウチー」は異なり語数・延べ語数ともに顕著に増加する。阪倉(1983)や村田・前川(2013)によって指摘されてきた、平安中期以降における「ウチー」の使用率の急激な増加は、発話・思考を表す「ウチ+他動詞」や、人の表情や心的状態を表す「ウチ+非意志的自動詞」など、中古前期までには少なかったタイプの「ウチー」が中古後期に大量に出現することによるものと言えるだろう。

中古後期に初出するタイプの「ウチー」には、ある程度社会的に定着していたと考えられるものから、臨時的に作られたと考えられるものまで存在する。多くの「ウチー」が定着している中で、新たな「ウチー」が盛んに創出された結果として、中古後期に「ウチー」が爆発的に増加したと言える。しかし、なぜこれほど大量の「ウチー」が生産され、用いられたのかについては、別途考察する必要がある。

5. テキストによる相違

資料が韻文に偏る上代と、散文・韻文がいずれも豊富な中古には、テキストの性質の相違が存する。そのため、前節で確認した「ウチー」の発達に関しても、それがテキストの相違によるものでないことを確認しておく必要がある。

純粹に上代と比較するためには、上代と中古の韻文同士を比較しなければならない。中古の韻文として『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』を用いて調査したところ、30語の「ウチー」が得られた。散文も合わせた「ウチー」の総数が382語であることから、韻文における30語は比較的少ないといえる。30語のリストを以下に示す。下線を付した「ウチー」は上代にも見られるものである。

(54) 勅撰集の「ウチー」

ウチ出づ、ウチ懸く、ウチ交はす、ウチ返す、ウチ霧らす、ウチ着る、ウチ消つ、ウチ試みる、ウチ越ゆ、ウチ騒ぐ、ウチしきる、ウチ忍ぶ、ウチ棄つ、ウチ添ふ、ウチそよぐ、ウチ叩く、ウチ解く、ウチ靡く、ウチ寝、ウチ濡らす、ウチ羽振く、ウチはふ、ウチ払ふ、

ウチ吹く、ウチ伏す、ウチ見る、ウチ群る、ウチ寄す、ウチ渡す、ウチわぶ

(54)から、中古の勅撰和歌集では上代と共通する「ウチー」が約半数を占めることが分かる。『万葉集』の和歌をそのまま収載したものや、「ウチ出づ」のように用法が変化しているものもあるが、全体としては上代の韻文との間に顕著な差は見られない。

さらに注目される点は、発話・思考を表す「ウチ+他動詞」や、自然現象を表さない「ウチ+非意志的自動詞」など、中古後期に著しく増加する「ウチー」が中古の勅撰集には非常に少ない点である。これらの「ウチー」は韻文には使用されにくいものであったと考えられる。しかし、これらの「ウチー」は中古前期散文にも少ないことから、その増加はテキストの性質のみによるものではない。

すなわち、上代と中古前期散文・中古韻文は、新たな「ウチー」の出現がありつつも、顕著な差は認められず比較的類似した様相であるといえる。これに対し、中古後期散文は上代・中古韻文や中古前期散文と大きく異なる様相を示す。「ウチー」の増加は、中古後期の散文において特に顕著なのである。

6. おわりに

本章では、中古に多く見られる発話・思考を表す「ウチ+他動詞」、移動動詞ではない「ウチ+意志的自動詞」、自然現象ではない「ウチ+非意志的自動詞」が、いずれも中古後期に大きく増加することを明らかにしたが、なぜ中古後期にこれらの「ウチー」が増えたのかについては明らかにできなかった。これは接頭辞「ウチ」の機能と密接に関わる問題である。中古における「ウチー」の意味的機能については、阪倉(1983)、関(1993)、近藤(1996、1997、1998ab、1999、2001)などの先行論があるが、現時点で最も有力であるのは近藤の主張する「弱意」であろう。しかし、「ウチ」の機能が弱意であると判明したとしても、それが何故中古後期に爆発的に増加するのかについては別に説明が必要である。

阪倉(1983)は『今昔物語集』における「ウチー」の使用について、『今昔物語集』の、漢文訓読臭の強い文章で書かれた巻々には、「うち動詞」の表われ方が概して少く、和文的な文章の巻々ほどそれが高い」(p.17)ことを述べる。また、後藤(2004)は「平安・鎌倉時代の公家日記(記録体)においては、接頭語「打(ウチ)」は、少数しか用いられていない」(p.67)こと、「使用されていたものも、平安時代の仮名の文章での使用例のある範囲に、ほぼ収まるものである」(同)ことを指摘する。以上より、「ウチー」の使用には文体も関連している

と思われる。

中古後期における「ウチー」の生産が、当時の宮中において日常的に行われていたことであるのか、それとも「平安仮名文学用語」(関 1987)や「物語用語」(関 1993)といったものであるのかを明らかにしなければ、「ウチー」の増加の真相に迫ることはできない。関(1993)では、中古和文で用いられる語について「中古の文学作品において、その用語選択にはかなり厳格な基準が定められていたものと推測される」(p.12)、「物語・日記類の用語は、当時の貴族たちのいわゆる日常語をそのまま用いたのではなく、その中からそれぞれの物語・日記によりふさわしい語を選択して用いたものと推測される」(p.13)、「平安時代の物語・日記・随筆類に用いられている動詞語彙は、作中人物の動き(演技)を表わす物語用語として、当時の日常的用語の中からそれに適したものが簡拔され、また、日常的用語を基に造語されたものであった」(p.150)とする。中古後期に増加する「ウチー」が、当時の貴族の間で実際に日常的に大量使用されていたものであるのか、あるいは使用していたのはごく一部の「ウチー」であり、それらからの類推によって文学作品のために大量に生み出されたものであるのかが重要である。今後は、中古後期における「ウチー」の増加の要因を追究する必要がある。

また、村田・前川(2013)によれば、中古後期に顕著な増加を見せるのは「ウチー」のみであり、同じく接頭辞とされる「トリ」「カキ」などを前項とする動詞連接には目立った増加は見られないという。その他の動詞連接と「ウチー」の違いも検討しなければならない。

中古より後に「ウチ」がどのように変化するかについても、調査する必要がある。「ウチ」の意味の歴史的変遷については近藤(1996、1999、2001)に考察がある。近藤によれば、『今昔物語集』『覚一本平家物語』『土井本太平記』といった文献に出現する「ウチー」には、「弱意」よりもむしろ「強意」で解すべき例が出現するという。近藤(1996)における「ウチ笑ふ」に関する記述を挙げておく。

(55) 中古には「ウチワラフ」は「ワラフ」に対して「弱意」的な意味であったが、中世軍記物の頃を境に「強意」の方向の、中古とは正反対とも言える意味・用法のものが現れ、近世になると内容上軍記物の影響が強そうな作品を中心に「強意」的用法が引き継がれ、現代語に至るとというのが大体の経緯であった。(略)「ウチワラフ」が中世のある時期を境に「弱意」的な意味から「強意」的な意味に変化したことはほぼ確かと思われる。(p.189)

中世以降の「ウチ」についての先行論は非常に少なく、また内容も意味変化の検討に偏る。「ウチー」の歴史的変遷を明らかにするためには、中世以降における「ウチー」の様相の記述が必須である。

結論 本研究のまとめと課題

1. はじめに

日本語には多様な複合動詞が存在するが、複合動詞の歴史的な発達過程には未解明の部分が多く残されている。日本語の特質ともいえる複合動詞の発達過程を記述することは、日本語史を構築する上で欠かせない。しかし、複合動詞の歴史に関しては、それがいつ頃から存在するのかといった基本的な問題さえも定説を見ておらず、検討すべき課題は山積している。

複合動詞の歴史に関する最も大きな問題は、金田一(1953)に始まる〈古代語における複合動詞の存否〉である。これについては現在も検討が行われており、近年では青木(2013)によって複合動詞の歴史的展開の大よその流れが示された。しかし、古代語における存否も含めた複合動詞の発達過程は、個別の動詞接続についての詳細な検討を蓄積しなければ解明できないものである。現在の動詞接続史研究に求められることは、様々な動詞接続についての個別的な記述である。

本研究では、動詞接続史構築の個別的実践として、前項が接頭辞とされる動詞接続「トリー」「ウチー」の古代語における様相を記述した。前項が接頭辞である動詞接続は現代語にも存在し、「トリ決める」「ウチ明ける」「カキ口説く」などがこれに当たるが、これらの古代語における様相や現代語までの変遷はほとんど明らかとなっていない。しかし、前項が接頭辞である動詞接続は「派生構造」(石井 2007)の複合動詞に該当するため、その発達過程の記述は古代語における複合動詞の存否の問題にも関わる重要な課題といえる。

以下では、これまでの研究で明らかになった事実をもとに、古代語における複合動詞の存否、古代語における接頭辞化の様相、「トリー」と「ウチー」の差異、今後の課題などについてまとめ、本研究の結びとしたい。

2. 古代語における「トリー」の様相

2.1 上代における「トリー」

第1章では、上代における「トリー」を扱った。「トリー」は上代から多く見られ、中には単なる2つの動詞の連続に過ぎないと思われる例もあるが、前項が接頭辞と認められる例も複数確認することができた。上代の接頭辞を前項とする「トリー」は次のようなもの

であった。

- (1) 唐衣裾にトリ付き(須宗尔等里都伎)泣く子らを置きてぞ来のや母なしにして
(万葉集・巻 20・4401・他田舎人大嶋・防人歌)
- (2) 衣手にトリとどこほり(取等騰己保里)泣く子にもまされるわれを置きていかにせむ
(万葉集・巻 4・492・舎人吉年)
- (3) ますらをの 心振り起し 剣太刀 腰にトリ佩き(腰尔取佩) 梓弓 鞆トリ負ひて 天地と
いや遠長に 万代に かくしもがもと (万葉集・巻 3・478・大伴家持)
- (4) ちはやぶる 神の社に 照る鏡 倭文にトリ添へ(之都尔等里蘇倍) 祈ひ祷みて 我が待つ
時に (万葉集・巻 17・4011・大伴家持)

(1)(2)は後項が意志的自動詞の例である。上代文献における「トル」は目的語を伴う他動詞として使用されていることから、目的語を伴わない(1)(2)は「トル」の文法的特徴を残していないといえる。目的語が存在しないことから、「トル」が具体物に対する「手にする」という動作を表しているとは考えにくい。また、「付く」「とどこほる」はいずれも単独で自動詞として用いられる例がある。「トリ付く」「トリとどこほる」は意味的にも統語的にも機能の中心が後項「付く」「とどこほる」にあり、「トリ」は接頭辞と判断できる。

(3)(4)の後項は他動詞である。他動詞を後項とする場合、前項が接頭辞か否かの判定が難しいが、(3)(4)は「トル」が伴うことのない「腰に」「倭文に」といった二格補語を伴っていること、「～(ヲ)トリ腰に佩き」のような語順が見られず常に「～(ヲ)腰にトリ佩き」といった語順であることから、前項「トリ」は動詞として機能しておらず接頭辞である可能性が高いといえる。なお、かような「トリー」は中古の韻文にも見られることから、「～(ヲ)～ニトリー」あるいは「～ニ～(ヲ)トリー」という韻文に特徴的な構文として定着していたと考えられる。

上代の「トリー」には、前項が接頭辞ではない複合動詞も存在した。次に挙げる例では、「トリ持つ」が目的語を伴わず「政事を行う」「とりまとめる」といった意味で用いられている。

- (5) 大君の 任きのまにまに トリ持ちて(等里毛知氏) 仕ふる国の 年の内の 事かたね持ち
(万葉集・巻 18・4116・大伴家持)

かような「トリ持つ」は、意味的に前項「トリ」が後項「持つ」に従属しているという関係が認められないこと、「トル」と「持つ」を単純合成しただけでは生じない意味を有していることから、「熟合構造」(石井 2007)の複合動詞と認めてよいと思われる。

2.2 中古における「トリー」

第 2 章では、中古における「トリー」を扱った。中古には複合動詞と認められる「トリー」が増加する。以下に挙げる「トリー」はすべて複合動詞と考えられる。

- (6) 「(略)かたはならむことは、トリ隠して、さることなんありけると、おほかたの物語のついでに、僧都の言ひしことを語れ」とのたまはす。(源氏物語・手習)
- (7) 秋のころほひなれば、もののあはれトリ重ねたる心地して、その日とある暁に、秋風涼しくて虫の音もとりあへぬに、(源氏物語・松風)
- (8) 上には、「身の宿世のおもひしられ侍りて、きこえさせず」とトリ申させ給へ。(蜻蛉日記・下)
- (9) 北の方、「何ばかりの徳か我は見侍る。おとゞは父なればせしにこそあめれ。トリ外して落窪といひたらん、何かひがみたらん」といへば、(落窪物語・巻四)
- (10) 山の駅は、あはれなりしことを聞きおきたりしに、又もあはれなることのありしかば、なほトリ集めてあはれなり。(枕草子・駅は)
- (11) 何ごとの儀式をもてなしたまひけれど、トリ立ててはかばかり後見しなければ、事ある時は、なほ抛りどころなく心ぼそげなり。(源氏物語・桐壺)
- (12) 榊、臨時の祭の御神楽の折など、いとをかし。世に木どもこそあれ、神の御前のものと生ひはじめけむも、トリ分きてをかし(枕草子・花の木ならぬは)
- (13) 「など帝の皇子ならんからに、見ん人さへかたほならずものほめがちなる」と、作りごとめきてトリなす人ものしたまひければなん。(源氏物語・夕顔)
- (14) 久しう手ふれたまはぬ琴を袋よりトリ出でたまひて、はかなく掻き鳴らしたまへる御さまを、(源氏物語・明石)
- (15) 「高潮といふものになむ、トリ敢へず人損はるるとは聞けど、いとかかる事はまだ知らず」と言ひあへり。(源氏物語・須磨)

(6)「トリ隠す」や(7)「トリ重ぬ」は具体的でない目的語を有していること、(8)「トリ申す」(9)「トリ外す」(10)「トリ集む」は目的語を伴わずに用いられていることから、「トリ」が「手にする」意を表す動詞として機能しているとは考えにくい。上代の「トリ＋他動詞」では、抽象的な目的語を伴う例は「トリ持つ」にのみ見られたが、中古には増加している。(11)「トリ立つ」や(12)「トリ分く」は主に副詞的用法で用いられる。(13)「トリなす」は目的語を伴わず「解釈する」「勘繰る」といった特殊化した意味で使用されている。(14)「トリ出づ」は形態的には「トリ＋自動詞」だが、全体としては「取り出す」意の他動詞として用いられており、2つの動詞の連続とは認められない。(15)「トリ敢ふ」は「トリ＋接尾辞」という構造である点でここまで挙げた「トリー」と異なるが、否定を表す文脈に固定化しつつあることから、複合動詞として定着していたと考えられる。(11)～(15)のような「トリー」も上代には見られないものである。

中古にも上代と共通する「トリー」があるが、上代には空間的連続を表す例のみであった「トリ続く」に時間的連続を表す例が見られる点や、「政事を行う」「とりまとめる」意では解釈できない「トリ持つ」が出現する点など、上代から連続する「トリー」にも用法の変化を確認することができた。

上代には見られない複合動詞「トリー」が多く出現する点、上代から見られる「トリー」にも用法の変化が認められる点から、「トリー」の複合動詞化は上代から中古にかけて大きく進んだと考えられる。ただし、上代と中古には資料の性質に違いがあり、その違いが上代と中古の差異をより際立たせている可能性もあるため、留意しておく必要がある。

3. 古代語における「ウチー」の様相

3.1 上代における「ウチー」

第3章では、上代における「ウチー」を扱った。「ウチー」は上代から豊富な用例がある。他動詞を後項とする「ウチー」(Ⅰ類)、意志的自動詞を後項とする「ウチー」(Ⅱ類)、非意志的自動詞を後項とする「ウチー」(Ⅲ類)のいずれにおいても、前項が接頭辞である例が確認できた。

(16) 堅塩を トリつづしろひ 糟湯酒 ウチすするひて(宇知須々呂比豆) しはぶかひ 鼻び
しびしに しかとあらぬ ひげ搔き撫でて (万葉集・巻5・892・山上憶良)

(17) 我が宿の冬木の上に降る雪を梅の花かとウチ見つるかも(打見都流香裳)

(万葉集・巻 8・1645・巨勢宿奈麻呂)

- (18) 昼暮らし 夜わたし聞けど 聞くごとに 心つごきて ウチ嘆き(宇知奈氣伎) あはれの
鳥と 言はぬ時なし (万葉集・巻 18・4089・大伴家持)

- (19) 安騎の野に宿る旅人ウチ靡き(打靡)寐も寝らめやも古思ふに
(万葉集・巻 1・46・柿本人麻呂)

- (20) 塩津山ウチ越え行けば(打越去者)我が乗れる馬ぞつまづく家恋ふらしも
(万葉集・巻 3・365・笠金村)

- (21) 逢坂をウチ出でて見れば(打出而見者)近江の海白木綿花に波立ちわたる
(万葉集・巻 13・3238)

- (22) ウチ靡く(打奈婢久)春ともしるく鶯は植木の木間を鳴き渡らなむ
(万葉集・巻 20・4495・大伴家持)

- (23) ウチ霧らし(打霧之)雪は降りつつしかすがに我家の苑に鶯鳴くも
(万葉集・巻 8・1441・大伴家持)

(16)(17)はⅠ類である。目的語「糟湯酒」「雪」を伴っているが、「すすろふ」「見る」という動作を行う際に何らかの打撃を伴うとは考えにくいことから、「ウチ」は打撃を表さない接頭辞と判断できる。

(18)～(21)はⅡ類であり、いずれも目的語を伴わずに使用されている。(18)(19)は「ウチ」の打撃の対象が存在しない。(20)(21)の「ウチ+移動動詞」はヲ格で表しうる項を伴っているが、いずれも移動の経路であり、目的語ではない。打撃の対象が存在しないことから、(18)～(21)の「ウチ」も接頭辞と考えられる。なお、「ウチ越ゆ」など「ウチ+移動動詞」の「ウチ」は本来的には「馬を鞭打つ」意を表していたと推測されるが、「ウチ+移動動詞」が項としての「馬」を伴う例は見られないことから、これらの「ウチー」における前項の「馬を鞭打つ」意は既に希薄化していたと思われる。

(22)(23)はⅢ類である。「ウツ」には「霰ウツ」のように自然現象を表す非意志的自動詞としての用法があり、「ウチ寄す」「ウチ降る」など、Ⅲ類の「ウチー」にも前項が打撃を表すと考えられるものが存在する。しかし、(22)「ウチ靡く」や(23)「ウチ霧らす」は、いずれも打撃を伴いうる動きではないことから、「ウチ」は打撃の意を有さない接頭辞と判断できる。

3.2 中古における「ウチー」

第4章では、中古における「ウチー」を扱った。中古には、前項が接頭辞である「ウチー」が著しく増加する。

- (24) ふしおきは、ただをさなき人をもてあそびて、「いかにして網代の氷魚にこととはむ」とぞ、心にもあらでウチ言はるる。(蜻蛉日記・上)
- (25) 「人出でたまひなば、とくさせ。このごろ盗人いと多かなり。火危ふし」など言ひたるが、いとむつかしう、ウチ聞く人だにあり。(枕草子・宮仕人の里なども)
- (26) 年ごろウチ忘れたりつるいにしへの御事をさへとり重ねて、(源氏物語・椎本)
- (27) 「さらば、かの人の御子になりておはしませよ」と聞こゆれば、ウチ領きて、いとようありなむ、と思したり。(源氏物語・若紫)
- (28) まして、ここかしこにウチ忍びて通ひたまふ所どころは、人知れずのみ数ならぬ嘆きまさるも多かり。(源氏物語・葵)
- (29) 心ことにウチ化粧じたまへる御ありさま、今見たてまつる女房などは、(源氏物語・若菜上)
- (30) 源氏の、ウチ続き後にみたまふべきことを、世人飽かず思へるにつけても、(源氏物語・若菜下)
- (31) 「渡殿なる宿直人起こして、紙燭さして参れと言へ」とのたまへば、「いかでまからん、暗うて」と言へば、「あな若々し」とウチ笑ひたまひて、(源氏物語・夕顔)
- (32) またみたる大人、「げに」とウチ泣きて、(源氏物語・若紫)
- (33) はじめこそ心にくもつくりけれ、今はウチ解けて、(伊勢物語・23段)

(24)～(26)は「ウチ+他動詞」(Ⅰ類)であるが、「言ふ」「聞く」「忘る」といった発話・思考を表す他動詞を後項としており、具体的な目的語は伴っていない。上代のⅠ類にも「ウチ渡す」「ウチはへて」のように具体的な目的語を伴わない例があるが、「ウチ渡す」には目的語が存在する例があり、「ウチはへて」は副詞的用法である。目的語を伴わず発話・思考を表すタイプのⅠ類の「ウチー」は中古になって見られるようになる。

(27)～(29)は「ウチ+意志的自動詞」(Ⅱ類)の例である。上代のⅡ類は「ウチ越ゆ」など移動動詞を後項とするものが多く、移動動詞を後項としないⅡ類は少なかった。これに対し中古には、(27)～(29)のように「領く」「忍ぶ」「化粧ず」といった移動動詞ではない意志

的自動詞を後項とする例が増加する。

(30)～(33)は「ウチ＋非意志的自動詞」(Ⅲ類)である。上代のⅢ類は自然現象を表すものに限られたが、中古には自然現象ではなく人の表情や心的状態を表す「ウチ＋非意志的自動詞」が多く出現する。

このように、中古には上代には見られないタイプの「ウチー」が増加する。これらはいずれも前項が接頭辞と認められることから、中古には接頭辞「ウチ」による造語が盛んに行われていたことが分かる。

なお、中古の韻文や中古前期までの散文における「ウチー」の様相は、上代との間に顕著な差異は認められない。発話・思考を表す「ウチ＋他動詞」、移動動詞を後項としない「ウチ＋意志的自動詞」、自然現象ではない「ウチ＋非意志的自動詞」が爆発的に増加するのは中古後期以降の散文である。「ウチー」の使用には、文体あるいは資料の性質が影響していると考えられる。

4. 古代語における複合動詞の存否

2 節から 3 節で示した通り、本研究では複合動詞と認められる「トリー」「ウチー」が古代語から多く確認できることを示してきた。

しかし、先行論において複合動詞の不在の根拠とされる前項後項間への助詞の介入が、古代語の「トリー」や「ウチー」においても稀に確認される。

(34) 越前守など、げに少し物しと思へれど、親の御けしき得給ふ人の御有様、いふべきに
あらねば、ウチも出でず。 (落窪物語・巻四)

(35) トリも敢へず立ち騒がれしあだ浪にあやなく何に袖の濡れけん (後撰集・1159)

この現象をどのように評価するかについては、先行論においても意見が分かれている。助詞の挿入が許容されることを前項と後項の緊密度が弱かったことの証左とする立場(金田一 1953、吉澤 1952、宮岡 2002 など)と、前項後項間に助詞の介入する例はあるとしても古代語における複合動詞を認める立場(中村 1971、関 1977、小松 2000 など)がいずれも存在し、現在も明確な結論は出ていない。序章においても挙げたが、小松(2000)と宮岡(2002)の主張を改めて確認しておく。

(36) 仮名文テキストで、連続した二つの動詞の間に係助詞が挿入されている場合があることは、(略)仮名文における係助詞の行動の一つとして説明すべきであって、「二つの動詞の結合がゆるかった」と一般化すべきではない。複合名詞と違って、結合が緩かろうときつかろうと、動詞には形態の特徴があるので、二つの動詞の切れ目は判然としており、表現の類型に従って中間に助詞を挿入することは容易であった。

(小松 2000,pp.47-48)

(37) 万葉集の歌語には、たとえば「泣キ行ク」にたいして、「泣キテ行ク」(9-1756)、「咲キ散ル」にたいして、「咲キテ散ル」(5-829)、「咲キカ散ル(ラム)」(2-231)、「咲キカモ散ル(ト)」(12-3129)のように、おそらくとくに大きな差もなく「複合動詞」の中に助詞が割りこむと説明されている現象がある。このような助詞の挿入は、要因が音数を整えることであれ何であれ、挿入が許されるということ自体は、むしろ「泣キ行ク」、「咲キ散ル」がいまだ完全に複合語化してはいない語連接であった可能性を窺わせるように思われる。くりかえすまでもなく、そもそも勝義の複合語には助詞などによる分割を考えるのは妥当ではないからである。

(宮岡 2002,pp.90-91)

これは何を以て「複合動詞」を規定するかという立場の相違であり、一方が正しく一方が誤りであると言える性質のものではない。実際の用法面からみれば、2 節と 3 節で確認したような「トリー」「ウチー」は複合動詞と認められる。しかし、「複合動詞」を「語」の一種と考える以上、形態的緊密性を無視することはできない¹。緊密性の観点からは、助詞の介入を許容しうる動詞連接は複合動詞とは認めがたい。

筆者は、「複合動詞」の本質を「2 つ(以上)の動詞を〈動詞連用形+動詞〉という形で直接つなぐことによって新しい動詞を産み出すこと」にあると考える。したがって、それが形態的に「語」としての資格を有しているかどうかよりも、前項と後項の単純な連続からは生じえない意味用法を有しているかどうかを重視したい。動詞連接前項の接頭辞化や動詞連接の意味の特殊化は、2 つの動詞を単純に足し合わせただけでは起こりえない現象である。したがって、「トリー」「ウチー」のうち、前項の接頭辞化や意味の特殊化が起きているものはすべて、前項と後項が意味的に一体化した複合動詞と認める立場をとる。

青木(2013)は古代語における動詞連接を「「句」を形成するもの」とし、そこから「複合

¹ 「語」の定義における形態的緊密性の重要性については、影山(1993)、宮岡(2002)など参照。

動詞」が形成されると述べる。これは日本語史に関して非常に重要な指摘であり、形態的緊密性という点では現代語と古代語の複合動詞に差異が認められる可能性が高い。しかし、古代語の動詞連接が「句」であったとしても「語」であったとしても、2つ(以上)の動詞をつなげることによって新しい意味を持つ複合動詞を産み出すというシステムが古代から存在したことに変わりはない。とすれば、少なくとも意味的には一体化しており複合動詞と認められる動詞連接であっても係助詞などの介入を許すという古代語に特有の現象にこそ、注目すべきであろう。「トリー」「ウチー」にも係助詞の介入する例はあるが、少ない。係助詞が介入しやすい動詞連接や介入しにくい動詞連接はあるのか、散文・韻文といったテキストの性質によって助詞の介入に差異があるのかなど、この現象についてはより詳細な研究が求められる²。

では、複合動詞はいつの時代から存在したのだろうか。「熟合構造」と考えられる「トリ持つ」が『万葉集』に見られることから、8世紀頃には既に存在していたと見ることができる。また、「春」にかかる枕詞として定着している「ウチ靡く」、複数の用例がある「トリ見る」「トリ付く(四段活用)」なども、すでに一語として定着していたと考えてよいだろう。前項が接頭辞である「トリー」「ウチー」が上代において複数確認されることは、接頭辞「トリ」「ウチ」による複合動詞の生産が8世紀頃には既に行われはじめていたことを示すものといえる。ある動詞連接が複合動詞となるまでにどれほどの時間を必要とするのかは不明だが、8世紀頃に既に複数の複合動詞が確認され、しかもそれらが意味変化の進んだ「派生構造」「熟合構造」であることに鑑みると、7世紀以前には複合動詞の生産が行われはじめていたと考えられる。

5. 「トリー」と「ウチー」の差異

既に確認したように、「トリー」や「ウチー」においては上代から前項が接頭辞である例が認められる。しかし、古代語における「トリー」と「ウチー」の様相には、次に挙げるような差異が存する。

5.1 非意志的自動詞への前接

「トリ」は、他動詞や意志的自動詞に前接する例は多く見られるが、非意志的自動詞に

² 青木(2013)は、助詞の挿入が中世室町期には「補助動詞タイプにおける打ち消し句」に限定されることを明らかにしている。

前接する例は非常に少なく、中古に少数確認できるのみである。これに対し「ウチ」は、上代から他動詞、意志的自動詞、非意志的自動詞の全てに広く前接する。この違いが生じた理由としてまず考えられるのは、前項となる動詞「トル」と「ウツ」に存する用法の差異である。「トル」は上代から手に関する動作を表す他動詞として使用される。これに対し上代の「ウツ」は、他動詞としての用法が主であるが、「霰ウツ」のように自然現象を表す非意志的自動詞としての使用も確認できる。「トル」は他動詞としての使用のみであったのに対し、「ウチ」は非意志的自動詞としても使用されたため、非意志的自動詞への前接可能性に差が生じたと考えることが可能である³。

しかし、非意志的自動詞への前接可能性は、次に挙げる「意味の希薄化の程度」にも関連があるものと思われる。

5.2 意味の希薄化の程度

「トリ」は主として他動詞や意志的自動詞に前接し、非意志的自動詞に前接する例は稀であることから、「トリ」がすべての動詞に自由に付されたものではないことが分かる⁴。他動詞「トル」の「自分の領域外にあるものを、手にすることによって自分の領域に引き入れる」という意味のうち、「手にする」という部分は失われているが、第1章で見たように特に上代の例(「トリ見る」「トリ付く(四段活用)」など)においては「トル」の「自分の領域に引き入れる」意が形式化しつつも残っていたと考えられる。

これに対し「ウチ」は、「言ふ」「思ふ」といった打撃と無関係な他動詞、「笑ふ」「泣く」といった自然現象ではない非意志的自動詞など、様々な動詞に前接する。「ウチ」の打撃の意はほぼ完全に失われているといえる。

このように、「トリ」は本来の意味の一部が残っているが「ウチ」は本来の意味がほぼ完全に失われているという差異が認められる。意味の希薄化の程度の差異は、「ウツ」に非意志的自動詞としての用法があることのみでは説明が難しい。筆者は、この差異が両形式の

³ 「トリ」と「ウチ」で接頭辞化の時期が異なっている可能性も考慮に入れる必要がある。仮に「ウチ」の接頭辞化が「トリ」よりも先に生じたとすれば、「トリ」よりも「ウチ」の方が早く用法の拡大が起きるはずである。しかし、「トリ」は中古に至っても非意志的自動詞を後項とする例は少ないため、後項動詞の差異が接頭辞化の時期によるとは考えにくい。

⁴ 関(1977)では、「ウチ」は「中古にすでに接頭語となり切っていたと考えられる」(p.120)とされるのに対し、「トリ」は「中古では多く叙述性をもっていたとみなされる」(同)とされる。

接頭辞化のプロセスの違いによって生じている可能性があると考えている。本研究で想定したそれぞれの接頭辞化のプロセスは次の通りである。

(38) 「トリ」の接頭辞化のプロセス

- (a) 「[～(ヲ)トリ][持つ]」(2つの動詞の連続の段階)

↓ 慣用的な使用による再分析

- (b) 「[～(ヲ)][トリ持つ]」(複合動詞の段階)

↓ 比喩などにより「手にする」意が希薄化した用法が成立

- (c) 「[～(ヲ)手ニ][トリ持つ]」／「[抽象的な目的語／ ϕ][トリ持つ]」

↓ 「トリ」を接頭辞として解釈

- (d) 「[接頭辞トリ＋持つ]」(前項が接頭辞化した段階)

↓ 他の意志的な動詞への類推

- (e) 「[～(ヲ)～ニ][トリー]」(「トリ佩く」「トリ懸く」など)

「[抽象的な目的語／ ϕ][トリー]」(「トリ見る」「トリ付く」など)

↓ 既存の「トリー」への類推

- (f) 前項が「手にする」意を表す他の「トリー」の前項を接頭辞として再解釈

↓ 非意志的な動詞への類推

- (g) 非意志的な動詞への接頭辞「トリ」の付加

(39) 「ウチ」の接頭辞化のプロセス

- (a) 「[目的語(ヲ)ウチ][意志的自動詞]」(2つの動詞の連続の段階)

↓ 慣用化による目的語の省略

- (b) 「[ϕ ウチ][意志的自動詞]」(目的語が省略された段階)

↓ 再分析

- (c) 「[ウチ＋意志的自動詞]」(複合動詞の段階)

↓ 「ウチ」の打撃の意の希薄化

- (d) 「[接頭辞ウチ＋意志的自動詞]」(前項が接頭辞化した段階)

↓ 既存の他類の「ウチー」への類推

- (e) 前項が打撃を表す他の「ウチー」の前項を接頭辞として再解釈

↓ 打撃と無関係な動詞への類推

(f) 打撃と無関係な動詞への接頭辞「ウチ」の付加

(39)はⅡ類の「ウチー」(「ウチ+意志的自動詞」)から接頭辞化が起こると仮定したプロセスであり、第3章でも述べたようにⅠ類の「ウチー」(「ウチ+他動詞」)から接頭辞化が起きた可能性も否定できない。ここでは、便宜的にⅡ類から接頭辞化が起きたとして論を進める。

(38)に示したように、「トリ」の「手にする」意の希薄化は、具体物を手にする意を表していた「トリ持つ」が比喩などによって抽象的な目的語を有する用法や目的語の存在しない用法で用いられるようになった結果として起きたものと考えられる。比喩によって用法の変化が起きたとしても、「トリ」の意味は完全に失われるわけではなく、「自分の領域でしっかりと」「責任をもって」といった形で保持されうる。これに対し、(39)に示したように「ウチ」の意味的な希薄化は自明となった目的語が省略されることによって起きると考えられる。目的語が省略され、その目的語が何であったのかが意識されなくなれば、「ウチ」が何に対するどのような打撃を表していたのかが忘却され、ほぼ完全に打撃の意が希薄化すると推測される。

5.3 中古における異なり語数・延べ語数の増加

「トリー」と「ウチー」の用例数は、上代から中古の前半までは顕著な差が見られない。しかし、和文資料の全盛期ともいべき中古後期には、「ウチー」の用例数は異なり語数・延べ語数ともに著しく増加する。上代から中古までを合計すると、「トリー」は124種1247例、「ウチー」は394種3872例確認できた。「ウチー」は「トリー」の3倍を超える用例があることが分かる。村田・前川(2013)は「ウチー」の使用率が『宇津保物語』以降急激に増加することを示すが、「ウチ」以外の「動詞由来の接頭辞」の使用率が「ウチ」ほどの顕著な増加を示さないことも指摘する。「ウチ」は意味が希薄化しきっていたために「トリ」よりも自由に接頭辞として使用できたと考えられるが、中古後期以降にこれほど頻繁に「ウチー」が用いられた理由は、意味の希薄化の程度からでは説明ができない。意味が希薄化した「ウチ」を他の動詞に付すという、この一見奇妙な造語が、当時の宮中において日常的に行われていたことなのか、あるいは文学作品においてのみ盛んに用いられたものであったのかを考察する必要がある。

5.4 意味の特殊化

「トリー」には、「政事を行う」「とりまとめる」といった意を表す「トリ持つ」、目的語の抽象化が認められる「トリ隠す」「トリ重ぬ」、目的語の存在しない「トリ申す」「トリ外す」「トリ集む」、副詞的用法の「トリ立つ」「トリ分く」、「解釈する」「勘繰る」意の「トリなす」、前項と後項の動作主体が同一と考えられる「トリ出づ」、否定を表す文脈で使用されやすい「トリ敢ふ」など、意味や用法が特殊化していると考えられるものが多く見られる。すなわち、「トリー」とその後項となる動詞の間に意味用法の差が存するものが少なくないのである。これに対し「ウチー」は、異なり語数・延べ語数ともに「トリー」を凌駕するにも関わらず、意味の特殊化が認められるものは「ウチ解く」「ウチ返す」など僅かである。関(1977、1993)、阪倉(1983)、近藤(1996、1997、1998ab、2001)などにおいて「ウチ」の機能が盛んに議論されるのも、「ウチー」と後項動詞の単独用法の差が小さいことを示していると言えよう。しかし、「トリー」には意味が特殊化したものが多く「ウチー」には少ない理由は現時点では明らかにできていない。

5.5 まとめ

「トリ」と「ウチ」はいずれも上代から接頭辞と見るべき例が認められる。動詞連接前項の接頭辞化は、7世紀から8世紀、あるいはそれ以前から進行していたと考えられる。このように「トリ」と「ウチ」は接頭辞的な用法が存する点で共通するのだが、両者にはこれまで述べたような違いが存する。すなわち、両者ともに接頭辞用法を獲得していながら、接頭辞としての機能は「トリ」と「ウチ」で異なっていたのである。

村田・前川(2013)によれば、中古後期に爆発的に増加する現象は「ウチー」にのみ見られるものであり、同じく前項が接頭辞化していると考えられる「カキー」「サシー」「ヒキー」にはかような増加は見られない。とすれば、「カキ」「サシ」「ヒキ」などは「トリ」と比較的類似した伸張の様相を示し、「ウチ」のみが特徴的な様相を示しているということになる。この問題については、古代語の「カキ」「サシ」「ヒキ」などに関しても詳細な調査を行っただけでなければ言及ができない。今後の課題としたい。

5.6 現代語への残存

「トリー」「ウチー」は現代日本語でも使用される。国立国語研究所『複合動詞レキシコン』(<http://vvlexicon.ninjal.ac.jp>)を用いて現代語の「トリー」「ウチー」を調査したところ、

次のような結果が得られた⁵。古代語と共通するものには下線を付した。

(40) 現代語の「トリー」

トリ合う、トリ上げる、トリ上げる(完了の意)、トリ扱う、トリ集める、トリ合わせる、トリ入る、トリ入れる、トリ行う、トリ押さえる、トリ落とす、トリ下ろす、トリ返す、トリ替える、トリ掛かる、トリ囲む、トリ片付ける、トリ固める、トリ交わす、トリ決める、トリ切る、トリ崩す、トリ組む、トリ消す、トリこぼす、トリ込む、トリ籠める、トリ殺す、トリ壊す、トリ下げる、トリ去る、トリ仕切る、トリ鎮める、トリ締まる、トリ調べる、トリすぎる、トリ捨てる、トリすます、トリ揃える、トリただす、トリ立てる、トリ出す、トリ違える、トリ散らかす、トリ散らす、トリ付く、トリ繕う、トリ次ぐ、トリ付ける、トリ潰す、トリ留める、トリなす、トリ逃がす、トリ逃す、トリのける、トリ残す、トリ除く、トリ計らう、トリ運ぶ、トリ外す、トリ離す、トリ払う、トリ紛れる、トリ巻く、トリ混ぜる、トリまとめる、トリ回す、トリ乱す、トリ結ぶ、トリ持つ、トリ戻す、トリ止める、トリ寄せる、トリ分ける (計 74 語)

(41) 現代語の「ウチー」⁶

ウチ合う、ウチ仰ぐ、ウチ上がる、ウチ明ける、ウチ上げる、ウチ合わせる、ウチ落とす、ウチ下ろす、ウチ返す、ウチ掛かる、ウチ掛ける、ウチ重なる、ウチ勝つ、ウチ興じる、ウチ切る、ウチ崩す、ウチ砕く、ウチ消す、ウチ込む、ウチ殺す、ウチ壊す、ウチ沈む、ウチ据える、ウチ捨てる、ウチ倒す、ウチ立てる、ウチ出す、ウチ付ける、ウチ続く、ウチ解ける、ウチ取る、ウチ眺める、ウチ鳴らす、ウチ抜く、ウチのめす、ウチ払う、ウチ開く、ウチ振る、ウチ震える、ウチ滅ぼす、ウチ負かす、ウチ負ける、ウチ破る、ウチ寄せる、ウチ忘れる、ウチ割る、ウチ入る、ウチ果たす (計 48 語)

異なり語数において、現代語では「ウチー」よりも「トリー」が多くなっている。古代語と現代語で共通するものは「トリー」に 34 語、「ウチー」に 29 語見られる⁷。(40)には挙

⁵ この結果には、「トリ合う」など後項が接尾辞的に機能するものも含まれる。

⁶ 「ブチまける」「ブチ壊す」などの「ブチー」、「ブッ飛ばす」「ブッ千切る」などの「ブッー」も「ウチー」の派生形と考えられるが、ここには含めていない。

⁷ ただし、これらの中には、古代語には僅かな例しか見られないものや、現代語との間に意味の変化が起

けていないが、「トリー」には「トリ敢えず」があるため、現代語と共通のものは実質的には 35 語である。「トリー」は、中古の異なり語数では「ウチー」の 3 分の 1 程度でありながら、現代語まで残る語の数は「ウチー」と同程度である。これに対し「ウチー」は、中古には非常に多く創出されたが、現代語まで残ったのはそのごく一部であることが分かる。古代語の「トリー」「ウチー」のうち現代語に残るのはいずれも少数であるが、割合としては「トリー」の方が残りやすいといえよう。

では、古代語に確認できない「トリー」「ウチー」で現代語に定着しているものは、どの時代に成立したものなのだろうか。接頭辞「トリ」「ウチ」は、現代語においては生産性を有していないことから、現代語に定着している「トリー」「ウチー」はすべて歴史的に成立したものと考えられる。「トリ」「ウチ」の生産性がどの時代まで維持されたのかを調査する必要がある。

6. 今後の課題

本研究では、動詞連接史構築の一環として古代語における「トリー」「ウチー」の様相を記述し、接頭辞化のプロセスについて検討した。「トリ」「ウチ」がいずれも上代から接頭辞として機能していること、中古には「トリー」「ウチー」がいずれも大きく発達すること、「トリ」と「ウチ」の接頭辞としての機能には差異が存することなどを明らかにし、「トリ」「ウチ」の接頭辞化のプロセスについても仮説を提示したが、以下に述べるように課題も多く残された。

「トリー」と「ウチー」は、いずれも古代語において前項が接頭辞である例を多く有するが、前節でまとめたようにこれらには〈後項動詞の幅〉〈希薄化の程度〉〈異なり語数・延べ語数〉〈意味の特殊化〉といった点において顕著な違いが認められた。このような差異が生じた理由の一つとして接頭辞化のプロセスの違いを提案したが、プロセスの違いのみではこれらの全てを説明することはできない。「トリー」と「ウチー」の差異がどのようにして生じたのかについて、更なる検討が必要である。

また、「トリ」と「ウチ」の接頭辞化のプロセスについて仮説を提示したが、現時点ではそのようなプロセスで変化が起きたことを示す具体的な証拠に乏しい。本研究で提示した接頭辞化プロセスの仮説が妥当なものであるのか、さらなる合理的なプロセスは存在しな

きているものも含まれる。

いのかについて、今後も検討を重ねていきたい。

本研究では古代語の「トリー」「ウチー」を扱ったが、これは「トリー」「ウチー」の歴史の一部である。現代語の「トリー」「ウチー」には古代語には見られないものが多く存在することから、「トリー」「ウチー」は中世以降にも生産性を有していたものと思われる。中世、近世、近代における様相を記述する必要がある。

また、古代語における前項が接頭辞とされる動詞連接には、「トリー」「ウチー」のほか「カキー」「サシー」「ヒキー」「タチー」「モテー」などがある。これらの様相を通時的に記述しなければ、前項が接頭辞である動詞連接の歴史的変遷を明らかにすることにはならない。これらの動詞連接についても、いずれ扱いたい。

動詞連用形接頭辞は、古代から中世にかけて高い生産性を有していたと考えられるが、現代語においては生産性がほぼ失われている。なぜ古代においては動詞連用形接頭辞による造語が盛んであったのか、現代語に至るまでに生産性が失われた理由はどこにあるのかを明らかにするには、更なる研究の蓄積が必要である。動詞連用形接頭辞による複合動詞生産に関するこれらの問題について明らかにし、日本語動詞連接史の一部分を構築することが、本研究の究極的な目標である。

使用テキスト

- 『古事記』歌謡・・・日本古典文学大系『古代歌謡集』岩波書店
- 『日本書紀』歌謡・・・日本古典文学大系『古代歌謡集』岩波書店
- 『万葉集』・・・鶴久・森山隆編『萬葉集』おうふう
- 『続日本紀』宣命・・・北川和秀編『続日本紀宣命校本・総索引』吉川弘文館
- 『竹取物語』・・・上坂信男編『九本対照竹取翁物語語彙索引本文編』笠間書院
- 『伊勢物語』・・・日本古典文学大系『竹取物語 伊勢物語 大和物語』岩波書店
- 『土佐日記』・・・日本古典文学大系『土佐日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』
岩波書店
- 『落窪物語』・・・日本古典文学大系『落窪物語 堤中納言物語』岩波書店
- 『蜻蛉日記』・・・佐伯梅友・伊牟田経久編『改訂新版かげろふ日記総索引 本文篇』風間
書房
- 『宇津保物語』・・・宇津保物語研究会編『宇津保物語本文と索引 本文編』笠間書院
- 『枕草子』・・・松村博司監修、榊原邦彦・武山隆昭・塚原清・藤掛和美編『枕草子総索引』
右文書院
- 『源氏物語』・・・日本古典文学全集『源氏物語』(1)～(6) 小学館
- 『栄花物語』・・・高知大学人文学部国語史研究会編『栄花物語本文と索引 本文篇』武蔵
野書院
- 『今鏡』・・・榊原邦彦・藤掛和美・塚原清編『今鏡本文及び総索引』笠間書院
- 『古今集』・・・新日本古典文学大系『古今和歌集』岩波書店
- 『後撰集』・・・新日本古典文学大系『後撰和歌集』岩波書店
- 『拾遺集』・・・新日本古典文学大系『拾遺和歌集』岩波書店
- 『後拾遺集』・・・新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』岩波書店
- 『金葉集』・・・新日本古典文学大系『金葉和歌集 詞花和歌集』岩波書店
- 『千載集』・・・新日本古典文学大系『千載和歌集』岩波書店

なお、表記や句読点などには私に改めた部分がある。

使用索引

- 正宗敦夫編『万葉集總索引 單語編』平凡社
- 古典索引刊行会編『萬葉集索引』塙書房
- 北川和秀編『続日本紀宣命校本・総索引』吉川弘文館
- 上坂信男編『九本対照竹取翁物語語彙索引索引編』笠間書院
- 大野晋・辛島稔子編『伊勢物語総索引』明治書院
- 小久保崇明・山田瑩徹編『土佐日記 本文及び語彙索引』笠間書院
- 小久保崇明編『多武峯少将物語本文及び総索引』笠間書院
- 山田巖・水野清・山内潤三・木村晟編『平中物語本文と索引』洛文社
- 松尾聰・江口正弘編『落窪物語総索引』明治書院
- 佐伯梅友・伊牟田経久編『改訂新版かげろふ日記総索引 索引篇』風間書房
- 宇津保物語研究会編『宇津保物語本文と索引 索引編』笠間書院
- 塚原鉄雄・曾田文雄編『大和物語語彙索引』笠間書院
- 馬淵和夫監修、中央大学国語研究会編『三宝絵詞自立語索引』笠間書院
- 松村博司監修、榊原邦彦・武山隆昭・塚原清・藤掛和美編『枕草子総索引』右文書院
- 西端幸雄・木村雅則・志甫由紀恵共編『平安日記文学 土佐日記・蜻蛉日記・和泉式部日記・
紫式部日記・更級日記 総合語彙索引 索引編』勉誠社
- 池田亀鑑『源氏物語大成 卷四 索引篇』中央公論社
- 高知大学人文学部国語史研究会編『栄花物語本文と索引 自立語索引篇』武蔵野書院
- 阪倉篤義・高村元継・志水富夫共編『夜の寝覚総索引』明治書院
- 池田利夫編『濱松中納言物語総索引』武蔵野書院
- 鎌田廣夫編『堤中納言物語総索引』白帝社
- 榊原邦彦・藤掛和美・武山隆昭・塚原清共編『古活字本狭衣物語総索引』笠間書院
- 秋葉安太郎『大鏡の研究 上巻 本文篇』桜楓社
- 片桐洋一監修、ひめまつの会編『八代集総索引 和歌自立語篇』大学堂書店
- 東辻保和・岡野幸夫・土居裕美子・橋村勝明編『平安時代複合動詞索引』清文堂

参考文献

- 青木博史(2010)『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房
- 青木博史(2012)「クル型複合動詞の史的展開—歴史的観点から見た統語的複合動詞—」高山善行・青木博史・福田嘉一郎編『日本語文法史研究 1』pp.189-210 ひつじ書房
- 青木博史(2013)「複合動詞の歴史的変化」影山太郎編(2013)『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』pp.215-241 ひつじ書房
- 安部清哉(1996)「語彙・語法史から見る資料—『篁物語』の成立時期をめぐりて—」『国語学』184:pp.14-27 国語学会
- 石井正彦(2007)『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房
- 伊藤博(1996a)『萬葉集釋注 三』集英社
- 伊藤博(1996b)『萬葉集釋注 四』集英社
- 伊藤博(1998)『萬葉集釋注 十』集英社
- 井上展子(1962)「動詞の接辭化—萬葉の「行く」と「來」—」『萬葉』43:pp.27-37 萬葉学会
- 大堀壽夫(2005)「日本語の文法化研究にあたって—概観と理論的課題—」『日本語の研究』1(3):pp.1-17 日本語学会
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(2013)「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い—」影山太郎編(2013)『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』pp.3-46 ひつじ書房
- 影山太郎編(2013)『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』ひつじ書房
- 金田一春彦(1953)「国語アクセント史の研究が何に役立つか」『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』pp.329-354 三省堂
- 小島聡子(2001)「平安時代の複合動詞」『日本語学』20(9):pp.71-78 明治書院
- こまつひでお(1975)「音便機能考」『国語学』101:pp.1-16 国語学会
- 小松英雄(2000)『日本語書記史原論 補訂版』笠間書院
- 後藤英次(2004)「平安・鎌倉時代の公家日記における接頭語「打(ウチ)」」『国語学研究』43:pp.59-70 「国語学研究」刊行会 東北大学
- 近藤明(1996)「「ウチワラフ」の意味の時代的变化—「ウチ動詞」の意味変化の一例—」『国

- 語彙史の研究 十六』 pp.175-192 和泉書院
- 近藤明(1997)「中古における「ウチ+他動詞」の意味—源氏物語の場合—」加藤正信編『日本語の歴史地理構造』 pp.9-25 明治書院
- 近藤明(1998a)「「ウチカヘス」考—「ウチ」が接辞化しているものの場合—」『金沢大学教育学部紀要 人文科学・社会科学編』 47:pp.9-18 金沢大学
- 近藤明(1998b)「中古における「ウチ+主体変化動詞」の意味—源氏物語の場合—」佐藤喜代治編『国語論究 7 中古語の研究』 pp.131-157 明治書院
- 近藤明(1999)「土井本太平記における「接頭辞ウチ+動詞」の意味」佐藤武義編『語彙・語法の新研究』 pp.87-103 明治書院
- 近藤明(2001)「「ウチツヅク」考」『国語語彙史の研究 二十』 pp.173-185 和泉書院
- 斎藤倫明(1984)「複合動詞構成要素の意味—単独用法との比較を通して—」『国語語彙史の研究 五』 pp.399-414 和泉書院
- 阪倉篤義(1983)「接頭語「うち」の消長」『国語語彙史の研究 四』 pp.1-20 和泉書院
- 佐藤恭子(1986)「うちー ぶちー ぶっー ぶんー」『日本語学』 5(3):pp.43-46 明治書院
- 山王丸有紀(2009)「上代複合動詞の結合事情についての一考察」『国語語彙史の研究 二十八』 pp.11-27 和泉書院
- 山王丸有紀(2011)「「接頭語」と解される「うちー」について—源氏物語における「うちー」を中心として—」『汲古』 60:pp.49-55 古典研究会
- 関一雄(1977)『国語複合動詞の研究』 笠間書院
- 関一雄(1987)「複合動詞—平安仮名文学用語として—」山口明穂編『国文法講座第二巻 古典解釈と文法 活用語』 pp.69-96 明治書院
- 関一雄(1993)『平安時代和文語の研究』 笠間書院
- 寺村秀夫(1969)「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト—その一—」『日本語・日本文化』 1:pp.32-48 大阪外国語大学研究留学生別科
- 徳本文(2009)「上代の複合動詞—前項と後項の意味関係から—」『立教大学日本文学』 102:pp.114-124 立教大学日本文学会
- 長嶋善郎(1976)「複合動詞の構造」鈴木孝夫編『日本語講座第 4 巻 日本語の語彙と表現』 pp.64-104 大修館書店
- 中村幸弘(1971)「上代複合動詞の緊密度について」『國學院高等学校紀要』 21:pp.3-47 国学院高等学校

- 新田哲夫(2010)「石川県白峰方言の複合動詞アクセント」上野善道監修『日本語研究の 12 章』 pp.413-428 明治書院
- 百留康晴(2001a)「継続を表わす補助動詞「一続ける」の成立」『言語科学論集』 5:pp.1-12 東北大学大学院文学研究科言語科学専攻
- 百留康晴(2001b)「動詞連接から複合動詞へー「一入る」の補助動詞化を中心にー」『文芸研究』 152:pp.79-92 日本文芸研究会
- 百留康晴(2002)「複合動詞後項「一出す」における意味の歴史的変遷」『文化』 66(1・2):pp.17-33 東北大学文学会
- 百留康晴(2003a)「中古動詞表現における動詞連接の展開」『国語学研究』 42:pp.14-25 『国語学研究』刊行会
- 百留康晴(2003b)「複合動詞と動詞連接ー「～出づ」を中心にー」『国語と国文学』 80(8):pp.42-54 東京大学国語国文学会
- 堀勝博(1986)「「うちわたす」の考察」『ことばとことのは』 3:pp.45-59 あめつち会 和泉書院
- 宮岡伯人(2002)『「語」とはなにか エスキモー語から日本語をみる』三省堂
- 村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 村田菜穂子・前川武(2013)「動詞由来の接頭辞についての通時的考察」『国語語彙史の研究 三十二』 pp.135-147 和泉書院
- 森田良行(1978)「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』 14:pp.69-86 早稲田大学語学教育研究所
- 山本清隆(1984)「複合動詞の格支配」『都大論究』 21:pp.32-49 東京都立大学国語国文学会
- 吉澤典男(1952)「複合動詞について」『日本文学論究』 10:pp.32-42 国学院大学文学会
- 由本陽子(1996)「語形成と語彙概念構造ー日本語の「動詞＋動詞」の複合語形成について」『言語と文化の諸相ー奥田博之教授退官記念論文集ー』 pp.105-118 英宝社
- Heine, Bernd, Claudi, Urike, and Hünemeyer, Friederike (1991) *Grammaticalization : A Conceptual Framework*. Chicago : University of Chicago Press.
- Hopper, Paul J. and Traugott, Elizabeth Closs (1993) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.(日野資成訳(2003)『文法化』九州大学出版会)

初出一覧

序論

書き下ろし

第1章

阿部裕(2011)「上代日本語の動詞接続「トリー」について―複合動詞の存否を中心に―」
『Nagoya Linguistics(名古屋言語研究)』5 pp.1-14 名古屋言語研究会

第2章

阿部裕(2013)「古代日本語における動詞接続「トリー」の様相」影山太郎編『複合動詞研究
の最先端―謎の解明に向けて』pp.243-269 ひつじ書房

第3章

阿部裕(2012)「上代日本語の動詞接続ウチーについて」日本語学会 2012 年度秋季大会(富山
大学) 口頭発表

第4章

阿部裕(2014)「古代日本語における動詞接続「ウチー」の様相」名古屋大学国語国文学会平
成 26 年度秋季大会 口頭発表(予定)

結論

書き下ろし

なお、第1章から第3章には大幅な加筆・修正を施してある。

〈資料〉古代語の「トリー」「ウチー」リスト

- ・この資料は、各種索引を用いて古代語文献における「トリー」「ウチー」の用例数を数え、リストにしたものである。
- ・前項と後項の間に係助詞などが介入しているものも動詞連接として数えた。
- ・上代は、記紀歌謡、『万葉集』、宣命の用例をまとめたものである。
- ・各資料の略称は以下の通り。

竹取…『竹取物語』、伊勢…『伊勢物語』、土佐…『土佐日記』、多武…『多武峰少将物語』、
平中…『平中物語』、落窪…『落窪物語』、蜻蛉…『蜻蛉日記』、宇津…『宇津保物語』、
大和…『大和物語』、三宝…『三宝絵詞』、枕…『枕草子』、和泉…『和泉式部日記』、
源氏…『源氏物語』、紫…『紫式部日記』、栄花…『栄花物語』、寝覚…『夜の寝覚』
浜松…『浜松中納言物語』、堤…『堤中納言物語』、更級…『更級日記』、
狭衣…『狭衣物語』、大鏡…『大鏡』、古今…『古今和歌集』、後撰…『後撰和歌集』
拾遺…『拾遺和歌集』、後拾…『後拾遺和歌集』

	上代	竹取	伊勢	土佐	多武	平中	落窪	蜻蛉	宇津	大和	三宝	枕	和泉	源氏	紫	栄花	寝覚	浜松	堀	更級	狭衣	大鏡	古今	後撰	拾遺	後拾	合計
トリ上げ (トリ上げ混す)	1						1		1	1	1	1								2							8
トリ与ふ	2							1																			1
トリ当たる									1																		1
トリ扱ふ																	2										2
トリ集む							1	3	5			3	2			22	4	3	3	3	1	4	1				55
(トリ集め言はむ方なし)																	1										1
トリ合はす									3										1								4
トリ敗ふ			1				1	2						4		1	9				1			2	2	1	24
(トリ敗えず)									2					8							4	3					17
(トリ敗えて)														1													1
トリ眠つ														2	1												3
トリ眠る														1													1
トリ争ふ														1									1				2
トリ出だす										2						1											1
トリ出づ	4						7	4	42				6	2	34	2	15	3	3	4		22	3				5
トリ入る	下二段	1			1	2	3	3	7				12	2	12	1	6	3	3		1	4	1				60
(トリ入れさまよふ)																1											1
トリ得											1					1	1										3
トリ動かす									1													1					2
トリ炙ふ									1						1												2
トリ埋み被く																1											1
トリ鑑ふ																						1					1
トリ置く	2						4		4					2		1			1		2	2					18
トリ行ふ											2			1		3											6
トリ落とす																							1				1
トリおほさうぞ																				1							1
トリ食ふ	4																										4
トリ覆ふ																1											1
トリ下ろす								1	1			4		1													7
トリ掛かる									1					1								1					3
トリ掛く	下二段	5		1					1																		7
トリ隠す							3		5				1	9			5	2			1						26
トリ重ね								1						9		2	1										13
(トリ重ね思ひ練く)																1											1
(トリ重ね仕うまつる)																1											1
トリ被く									2																		2
トリ交はす				1			1										4					1					7
トリ替ふ	下二段	3							4					4					3								15
(トリ替へトリ替へ)																					1						1
(トリ替へトリ替へす)																1											1
トリ飼ふ											1					1											2
トリ返す			1				1		1		2	1		33	1			1	4		1	2					48
(トリ返し)																					2	1					4
トリ枯らす	1																										1
トリ聞こゆ								1																			1
トリ聞こえさす								1																			1
トリ着る	3																1										4
トリ来	2																										2
トリ具す							1		2					5					1		2	1					12
トリ加ふ									1					1													2
トリくびる																											1
トリ食ふ									2						1												3
トリ込む																1							2				3
トリ籠む							1		4					3		1	1				2						12
トリ殺す									1																		1
トリ探す									2																		2
トリ放(さ)く														1	1												2
トリ下ぐ																						1					1
トリ探る	1																										1
トリ敷く	1						1	2						1	3												1
トリしたたむ																						1					8
トリ垂づ	2																										2
トリ占む												1															1
トリす																1											1
トリ握う									5																		7
トリ捨つ		1										4		4								1			1		9
トリ総べ持つ	1																										1
トリ添ふ	下二段	2					3								14			1	1					1			22
トリ初む									1							1											1
トリ背く																											1
トリ違(たが)ふ													1							1			1				3
トリ立つ	下二段	1							1	1			2	22	1		2					1					31
トリ違(ちが)ふ									1																		1
トリ散らす									6				1	4		2			1		4						18
(トリ散らし損ふ)													1														1
トリ束(つか)ぬ	1																										1
トリ使ふ								1	1					2		1		2									7
トリ付く	四段	3															1										4
(トリ付き喜び顔なり)																						1					1
トリ付く	下二段	3														1											4
トリ次ぐ									5			4	1	4	6	2											22
(トリ次ぎ参る)													1														1
トリ尽くす	1																										1
トリ作る																1											1
トリ繕ふ							2								3						1						6
(トリ繕ひ関はる)																											1
トリ伝ふ						2			1																		2
(トリ伝へ始む)																1											1
トリ続く	四段						1		7					4		5	1										18
(トリ続き参る)																2											2
(トリ続き持て参る)																1											1
トリ続く	下二段	2												1				3									6
トリ繋ぐ																									1		1
トリつつしるふ	1																										1
トリ積む							1																				

	上代	竹取	伊勢	土佐	多峯	平中	落窪	蜻蛉	宇津	大和	三宅	枕	和泉	源氏	紫	栄花	寝堂	浜松	堤	更級	狭衣	大鏡	古今	後撰	拾遺	後拾	合計
トリ並め掛く	1																										1
トリ並ぶ	下二段													4													4
トリのく	下二段								1							1					1						3
トリ風く	8																										8
トリ始む																					1						1
トリ果つ																									1	1	
トリ外す							1							4	2							1					7
トリ離す	1																										1
トリ放つ							1		5		1		5	1	6	2	3				1						25
(トリ放ち養ふ)															1												1
トリはやす									1		2																3
トリ払ふ								1							3	1					2						7
(トリ払ひ出づ)																1											1
トリ広ぐ									3																		4
トリ広む																1											1
トリ触る							2											1									2
トリ股く								1																			1
トリ申す								2	24					9							2						37
トリ脂で来									1																		1
トリ膳ふ									1													1					5
トリ紛らはす															1												1
トリまさぐる						1																					1
トリ申(ま)す							1																				1
トリ混ず												1		9													10
トリ乱る	四段							1	1					1													3
トリ見る	7																					1					8
トリ向かふ												1															1
トリ向く	2																										2
トリ食(め)す	1																										1
トリ持たり														1													1
トリ持つ	29								4					9					1	2					1	1	47
(トリ持て行く)								1						1		1											3
(トリ持て往ぬ)														1													1
(トリ持て来)							1		2		1		3														7
(トリ持てまかる)													1														1
(トリ持て参る)													1														1
トリ通る											1		3		1	2		1				1					9
(トリ通らで)													1														1
トリ寄す							2	2	8		5		16		5	4	3	3		7							55
トリ寄る									1				1														2
トリ装ふ	5																										5
トリよろふ	1																										1
トリ分かつ																				1							1
トリ分く							1		7		4		34	1	3		1				7	3					61
(トリ分き)													5		13	8					2	2					30
(トリ分きて)					1		2						27	3							1					1	35
(トリ分け)																					1						1
トリ忘る								1			1		1														2
トリ渡す									1		1		4					1									7
トリ犯す									1																		1
トリ納む									1							1											2
合計	99	7	3	2	2	5	44	31	188	3	9	64	4	413	23	99	63	35	17	6	86	30	4	2	4	4	1247

[illegible]

[illegible]

	上代	竹取	伊勢	土佐	多峯	平中	落窪	蜻蛉	宇津	大和	三宅	枕	和泉	源氏	紫	栄花	寝覚	浜松	堤	更級	鞍衣	大鏡	古今	後撰	拾遺	後拾	合計	
ウチ装束く							1								1				1								3	
(ウチ装束き渡る)																		1									1	
ウチさうどく															1												1	
ウチ下ぐ												1										1					2	
ウチさくじり引き奪ふ																					1						1	
ウチささめく												1		10		1			1		1	2					16	
ウチ止す														2							1						3	
ウチ冷ます																1											1	
ウチ暖す		2														1											2	
ウチさらぼふ																					1						1	
ウチ去る										1																	1	
ウチ戯(さ)る															1												1	
ウチ猿索ふ												1															1	
ウチ騒ぐ						1		1	1				1	3	1		1	1			6			1			17	
ウチ頻る													7			1	1									1	1	
(ウチ頻り御覧す)																					2				1		12	
(ウチ頻り見ゆ)												1									1						1	
ウチ敷く						1			1			3									1	1					7	
ウチ時雨る												3															8	
ウチ鎮まる														5			1	1		1							2	
ウチ鎮む											1			2													2	
ウチしつらふ												1					1										1	
ウチしなふ		1																									1	
ウチ偃ふ		1																									1	
ウチ忍ぶ														11			16	7	1		2				1	1	1	40
(ウチ忍び廻らふ)																					1						1	
(ウチ忍び越ゆ)																		1									1	
(ウチ忍び御覧す)																				1							1	
ウチ偃ふ														1													1	
ウチしはぶく						1		1			1		6								1	1					11	
ウチ繕る									1		1																2	
ウチ潮垂る							1								8												9	
ウチ湿る														8													8	
ウチ薪枯る																1											1	
ウチ知る												1															1	
ウチしをる														3		1	2	1									7	
ウチす						3	7				8		15	3	2						1	1	2				42	
ウチ誦うず													2														2	
ウチすかず											1																1	
ウチすがふ														2		2						1					5	
ウチ透く														1													1	
ウチ捨く																				1							1	
ウチ過ぐ		1						3	2		2		8		2	1	1	1		1							21	
(ウチ過ぎがたし)													1			1											2	
ウチ過ぐす													3														3	
ウチすげむ													1														1	
ウチ過ぐす											1																1	
ウチ遊(すさ)ぶ																	1										1	
ウチ荒む																											1	
ウチ誦(す)す														21								1					22	
ウチすすろふ		1																									1	
ウチ捨つ					4	3	4	1		4	1	40				1	2	1			4	2		1			68	
(ウチ捨て書く)												1															1	
(ウチ捨てざまなり)												1															1	
ウチ誦んず						1	1			3		10		3	3		3	3	1	3							31	
(ウチ誦んじなす)												1															1	
ウチ繕ふ																						1					1	
ウチ注ぐ														6													7	
(ウチ注ぎ渡す)																		1									1	
ウチ側む	四段									2				2		1		1				4					10	
ウチ側む	下二段									1																	1	
ウチ側むく																				1							1	
ウチ添ふ	四段													5		1	6	11		1	2	1					27	
(ウチ添ひ置ふ)																											1	
(ウチ添ひ臥す)																	1	1									2	
ウチ添ふ	下二段									1		2	14	2	3	2					3			1		1	29	
ウチそぼる													1														1	
ウチ染む										1																	1	
ウチ背く										1				8			2				1						12	
ウチそよぐ																									1		1	
ウチそよめく							1	1			3		6				4										15	
(ウチそよめき出づ)													1														1	
ウチ遠(たが)ふ															1												1	
ウチ叩く						1	3	2	1	1			2	9		1	4	1	3							1	29	
(ウチ叩き鳴らす)							1																				1	
ウチ量なほる	四段											1															1	
ウチ量なほる	下二段									1																	1	
ウチ立つ	四段																					1					1	
ウチ立つ	下二段																										1	
ウチ辿り思ひ出づ																		1									1	
ウチ繕む							1							16				1			2						20	
ウチ平らぐ											1																1	
ウチ倒す							1				1																2	
ウチ絶ゆ													4							1							5	
ウチ弛む	四段						1			1			8			4	1				1						16	
ウチ弛む	下二段												2														2	
ウチ垂る												1										1					3	
(ウチ垂れ髪)													1				1								1		2	
ウチ散らす							3					2	1														6	
ウチ散る								1				2	5		1	1				1		1					12	
(ウチ散り添ふ)													1														1	
(ウチ散り粉ふ)													1														1	
(ウチ散り渡る)													1														1	
ウチ使ふ									1			1		1								2						

	上代	竹取	伊勢	土佐	多峯	平中	落窪	蜻蛉	宇津	大和	三宝	枕	和泉	源氏	紫	栄花	夜堂	浜松	堤	更級	兼衣	大鏡	古今	後撰	拾遺	後拾	合計	
ウチ続く	下二段													1	1		1					1					3	
ウチ吹く														3	1												6	
ウチ滑る		1						3					1	10			8	3									26	
ウチ連る									3			1		8	1	1	1				2						17	
ウチ調ず												1															1	
ウチ解く	四段											1															1	
ウチ解く	下二段	1				1	3	9	3	1		8	3	151	7	13	19	17	4	1	8	1			3	3	1	257
(ウチ解け)																		1			1						2	
(ウチ解けあやし)																	1				1						2	
(ウチ解け言ふ)																											0	
(ウチ解けおはします)														1													1	
(ウチ解けがたし)													1	1		1	1				1						5	
(ウチ解け語らふ)																					1						1	
(ウチ解け顔)														1													1	
(ウチ解け言)												1		2													3	
(ウチ解けざま)																											1	
(ウチ解けしにくげなり)								1																			1	
(ウチ解け姿)								1						1							1						3	
(ウチ解け過ぐ)														2													2	
(ウチ解け住む)														1													1	
(ウチ解け頼む)																	1										1	
(ウチ解け並ぶ)																		1									1	
(ウチ解けにくし)														1							1						2	
(ウチ解け果つ)														1			1										2	
(ウチ解け文)														1													1	
(ウチ解け勝る)														1													1	
(ウチ解け見馴る)																		3									3	
(ウチ解け見る)																	1										1	
(ウチ解け睡ぶ)																					1						1	
(ウチ解け違る)																		1									1	
(ウチ解けゆく)									1					3													4	
(ウチ解けわざ)														2													2	
(ウチ解けある)														1	1				1								3	
ウチ取る									2			1				1				1			2				6	
ウチ眺む			1				1		1			1	2	33	1	5	10	7	1	1	2	1					67	
(ウチ眺めがちなり)														1			2										1	
(ウチ眺め渡す)																		1									1	
ウチ鳴く												1	1	9				1			1	1					14	
ウチ鳴きはじむ									1																		1	
ウチ泣く		1	3				8	6	11	2		3	1	75		21	26	32	2	5	19						215	
(ウチ泣きウチ泣き)														1		3											4	
(ウチ泣き交はす)																		1									1	
(ウチ泣き喜ぶ)													1														1	
(ウチ泣き笑ふ)																		1									1	
ウチ慰む																	1										1	
ウチ嘆く		5	2				6	1	1	1		2		53		2	22	6	3		9						113	
(ウチ嘆き思ふ)																		1									1	
(ウチ嘆きがちなり)														1			1										2	
(ウチ嘆きがら凭ふ)																	1										1	
ウチ為す																	1										1	
ウチ鳴く(な)す		1								1																	2	
ウチなすらふ																					1						1	
ウチ撫づ		1																									1	
ウチ名のる																		1									1	
ウチ歴く		31					1					2	1	9		2	2	1	1					1			54	
(ウチ歴き寄る)																	1										1	
ウチ直す														1													1	
ウチ還くむ							1		1					6			2				2						12	
ウチ悩む														6	1	1	2			1	1						12	
ウチなゆ														1													1	
ウチなよぶ																						1					1	
ウチ鳴らす									1			2		6	1			1			6						17	
ウチ成る														1		1											2	
ウチ馴る														1													1	
ウチ句はし置く														1													1	
ウチ句ふ														3			1		2		1						7	
ウチ寝									1					1		1							2				7	
(ウチ寝齋(くた)る)																		1				1	2				1	
ウチ濡らす		1												1			1								2		5	
ウチ濡る														1													1	
ウチねぶ														1	1												2	
ウチ眠る												1		1						1		1					4	
ウチ退く																		1									1	
ウチ拭ふ																	1										1	
(うちのごいうちのごい)																1											1	
ウチ藝す											1			1					1			1					4	
ウチのたまはす																				1							1	
ウチのたまふ							1							4	1	1	2	2				1					11	
(ウチのたまひ出づ)														1													1	
(ウチのたまひ紛らはす)																											1	
ウチ上る		1																									1	
ウチ伸ぶ																											1	
ウチ飲む										1																	1	
ウチ乗る																				1							1	
ウチ掃く										1																	1	
ウチ挟む										1												1					2	
ウチ始む										1				5			1	1		1	4						14	
ウチ恥しらふ																1	1		1								3	
ウチ恥じらふ																		1									1	
ウチ果つ														3													3	
ウチ外す											1																1	
ウチ外る										1																	1	
ウチ放つ		1					1															1					3	
ウチはなふ		1																										

	上代	竹取	伊勢	土佐	多峯	平中	落窪	蜻蛉	宇津	大和	三宝	枕	和泉	源氏	紫	栄花	夜堂	浜松	堤	更級	狭衣	大鏡	古今	後撰	拾遺	後拾	合計	
ウチはやぐ									1																		1	
ウチはやす								1																			1	
ウチ早む												1		1					1								3	
ウチ逸(はやる)							1													1		1					3	
(ウチ逸りありつく)																					1						1	
ウチ腹立つ							1		1																		2	
ウチ払ふ	6							2	2					6	1	3	1	1					1	1	2		2	28
ウチ睡る														1													1	
ウチ慰む									1				1														2	
ウチ光る												1															1	
ウチ引く							1		1	1							1										4	
ウチ弾く																		1									1	
ウチひそまる															1												1	
ウチひそむ														10		3	1	1									15	
(ウチひそみあふ)														1													1	
(ウチひそみ泣く)																1					1						2	
ウチ独り言つ														3													3	
ウチ広ぐ																						1	1				2	
ウチ更かす							1																				1	
ウチ吹く								4	2					8		2	1			1					1	1	20	
(ウチ吹き返す)						1																					1	
(ウチ吹き初む)																								1			1	
(ウチ吹き立つ)									1																		1	
(ウチ吹き鳴らす)																1											1	
ウチ振く							1																				1	
ウチ掻く												1									1						2	
ウチ更く							1	3	1				1	1			2	1									10	
ウチふくだむ												1			1												2	
ウチ含む														1													1	
ウチくくる							1																				1	
ウチ臥す			1		1			5	5	1				3	12	1	3	5	2	4	3	11				1	58	
(ウチ臥し起く)																		1									1	
(ウチ臥し休む)												1															1	
ウチふすふ														1													1	
ウチ寒(ふた)がる																	1										1	
ウチ踏む																											1	
ウチ降る	3								1				3	2	2		1		2		1						15	
ウチ振る							1								1							1	1				4	
ウチ触る	1																										1	
ウチ占る												1															1	
ウチ振い折る												1															1	
ウチ振る舞ふ									1						7							2					10	
(ウチ振る舞ひ入る)																1											1	
ウチ占めく												1															1	
ウチ隔つ																	1										1	
ウチ細る																1											1	
ウチほめめかす															1												1	
ウチほめめく									1						4						1						6	
ウチ頬寄む														1													1	
ウチ微笑む									9				3		8		4	6	2			4					36	
ウチ申す																1	1										2	
(ウチ申しかく)																							1				1	
ウチ任す												1						1				4					6	
ウチ紛ふ															1												1	
ウチ紛らはす															1		2										3	
ウチ紛る																3		2									5	
ウチ紛ればむ																1											1	
ウチ勝る								1						1	2		1					1					6	
ウチ混じる							1	1						20	1	1	1					1	1				27	
ウチ混ず									1					11		1	1										13	
ウチ微睡む					1								1	5		1					1	3					12	
(ウチ微睡み入る)																					1						1	
(ウチ微睡み過ぐす)																		1									1	
ウチ招く														1				1				1					3	
ウチ真似ぶ														2													2	
ウチ守(まほ)る															1				3			1					5	
(ウチ守(まほ)り上ぐ)																1											1	
ウチ守(まも)る								1	1				4	13		1	13	3			1	4					41	
(ウチ守(まも)りウチ守る)															1												1	
(ウチ守(まも)り比ぶ)																	1										1	
ウチ参る																			1				1				2	
ウチ身じろぐ												2		11		1	2	1				4					21	
(ウチ身じろぎ寄る)														1			1										2	
ウチ乱る : 四段							1																				1	
ウチ乱る : 下二段														16		1	4	1	1								23	
(ウチ乱れ奏す)															1				1								1	
(ウチ乱れの箱)														1													1	
ウチ見ゆ									2			2		1			2										7	
ウチ見る	1						2	4	4			1	2	12	1	2	19	6			1	3			1	2	61	
(ウチ場ウチ見)																2											2	
(ウチ見上ぐ)								1	1			1															4	
(ウチ見合はす)									2								1	1			1						5	
(ウチ見入る)																							2				4	
(ウチ見おこす)					1	1																	2				2	
(ウチ見交はす)												1										2					1	
(ウチ見返る)												1		1								2					5	
(ウチ見付く)																	2	3				3					8	
(ウチ見廻す)													2							1							3	
(ウチ見廻らす)																			1								1	
(ウチ見遣る)							1					1		3			3				2	1					11	
(ウチ見渡す)																	2	1					1				4	
ウチ廻(みる)	1																										1	
ウチ向かふ																		1									1	
ウチ向く : 下二段																	1											

	上代	竹取	伊勢	土佐	多峯	平中	落窪	蜻蛉	宇津	大和	三宅	枕	和泉	源氏	紫	栄花	寝覚	浜松	堤	更級	狭衣	大鏡	古今	後撰	拾遺	後拾	合計	
ウチ物古る																					1						1	
ウチ盛る								1																			1	
ウチ休む	四段						2	2	9	2		2		27		2	13	6		1							66	
(ウチ休み)																											1	
(ウチ休み過ぐす)															1												1	
(ウチ休み渡る)																1											1	
ウチ休む	下二段																	1				6					7	
ウチ休らふ									1					2													3	
ウチやつす														1													1	
ウチやつる														3					1								4	
ウチ破(やぶ)る									1																		1	
ウチ止(や)む		1																				1					2	
ウチ這る				1										6			4	1				3					15	
ウチ進む	四段													2													2	
ウチ進む	下二段													1													1	
ウチ行く		5																									5	
ウチ揺るぐ												1					1										2	
ウチ許す									2																		2	
ウチ緩ぶ	四段													4				6	1								11	
ウチ緩ぶ	下二段													1				1									2	
ウチ寄す		1			3					2				1		2				1			1	1	1	1	1	14
ウチ世馴る														1													1	
ウチ呼ばふ								1																			1	
ウチ読む							1							2		2											5	
ウチ詠む												1		1									1				3	
ウチ寄る									3														1				4	
ウチ喜ぶ								1																			1	
ウチよろほふ														1							1						2	
ウチ接す											1																1	
ウチ忘る						1	1					2		9				5	1		1						20	
ウチ渡す		5							4					1	1	1	1	1	1				1	1	1		17	
ウチ渡る								1	1					7		1											4	
(ウチ渡り見る)																						1					1	
ウチわななく									2					1				1				1					11	
ウチ怪ぶ				1										1										1	2		5	
ウチ笑ふ							11	6	68			7	59			4	8	8	2		21	4					198	
(ウチ笑ひおはさうす)													1														1	
(ウチ笑ふことがちなり)								1																			1	
ウチ割る						2			1		1	1															5	
ウチぬる									2			2															4	
ウチ笑む						4			3				1	47	2	6	5	3		1	17	2					102	
(ウチ笑み合ふ)																1											1	
(ウチ笑みウチ笑みす)																1											1	
ウチ怒す								1						2													3	
ウチ拝む												1				1											2	
ウチ折る		1						1																			2	
合計		98	11	11	6	4	6	114	121	303	15	5	223	30	1405	57	246	410	242	50	47	297	85	16	33	22	15	3872